



Title	関西若年層のカジュアル談話にみるスタイルの運用 —首都圏移住者を事例として—
Author(s)	上林, 葵
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2019（令和元）年度
大阪大学大学院 博士学位申請論文

関西若年層のカジュアル談話にみるスタイルの運用
—首都圏移住者を事例として—

上林 葵

要 旨

本研究は、出身地域の異なる親しい友人との談話における関西若年層のスタイルの在り方に着目し、その実態の把握と運用メカニズムの解明を試みるものである。この研究テーマを設定した背景には、学校教育やメディア等との関わりによって成育の過程で「知識」として保有されるようになった標準語スタイルについて、それが実際の使用場面に接した際にどのような形で実践されるのか、すなわち話者の潜在的な標準語スタイルの運用能力が如何にして発揮されるのかを明らかにしたいという問題意識がある。

多言語話者やバイリンガルなどを対象としたこれまでの研究は、複数の言語ないし変種の実際の運用能力を持つ話者を対象としたものが多く、知識としては有しているが日常生活において実践の場が少ない言語や変種に対する話者の運用能力の実現可能性を探るものについては、阿部（2006）などを除きあまり例がない。生活様式の変化や交通網の発達・整備等により人口の流出入が盛んとなった現代において、地域社会に住まう人々の潜在的な標準語能力が発揮される場面を見出すことは容易になりつつある。そうした場でどのような言語実践が行われるかを考察することは、多変種社会へと変容しつつある現代の日本社会におけることばの運用の在りようを捉えるうえで、一定の意味を持つものと考えられる。

本研究の考察対象である関西若年層は、標準語を使用する機会が少なく、フォーマルやカジュアルなどの場面に関わらず方言を中心とした言語生活が営まれる「方言中心社会」（田原 2006）のなかで成育してきた一集団である。そうした社会の特質によるものもあってか、これまでの関西方言話者の言語運用に対しては、方言使用というモノリンガルの側面に注目が集まるが多かったように思われる。しかしたとえ方言が中心の社会にあっても、成育の過程で標準語を知識として習得し、理解する能力を備えていることは十分に考えられることである。このように、話者のなかで知識として潜在的に保有されてきた標準語スタイルが実際にどのように実践されるのかを捉えることは、これまでの関西方言話者の言語運用に対する見方に対し、新たな側面を提案することになるものと考えられる。

本論文では以上のような考えのもと、関西若年層のカジュアル談話におけるスタイル運用の在り方を明らかにすることを目指した。

本論文は第Ⅰ部から第Ⅲ部までの3部構成となっている。第Ⅰ部（第1章～第3章）は序論とし、本論文における研究の背景と議論の前提となる事項について述べた。まず第1章ではスタイル研究のこれまでの流れについて、海外の研究と日本国内の研究に分けたうえで整理を行った。そしてそれらを踏まえ、スタイルに関する本研究の立場を述べた。続く第2章では、本研究が対象とする関西若年層の言語運用の在り方を明らかにするための前提として、関西方言話者に特徴づけられる従来の言語使用や行動パターンについて、意識研究と実態研究の両側面から整理した。また、そうした特徴の背景にある要因として考えられてきた点についてまとめた。第3章では、前章までの研究の背景から浮かび上がる

問題のありかと、それらに対して本研究が取り組むべき課題を提示する。続いて調査方法の検討を行い、調査の概要として本研究で対象とする話者等について述べた。また、本論文で使用する用語の整理や談話データの文字化方法についても合わせて示した。

本論の中心となる第Ⅱ部（第4章～第7章）では、首都圏に移住した関西若年層3名を対象に、出身地の異なる対者に対しどのような言語運用を実践するかについて、語彙・文法・音声・談話の各レベルに分けて分析・考察することを試みた。まず第4章では語彙・文法レベルとして、方言・標準語の両変種間で対応関係にある複数の語と文法項目を取り上げ、各項目について対他地域出身者場面（〔他郷〕）と対同郷出身者場面（〔同郷〕）における運用の実態を観察した。場面間の切換えの実態として、場面ごとに使用形式（方言形/標準語形）の異なる明瞭な切換えを行うタイプと、数のうえでは両場面で使用がみられるが、談話の進行に伴い徐々に当該場面の期待形式の使用へと移行していくタイプがあることを述べた。また〔他郷〕における東京語形や〔同郷〕における伝統方言形のように、各場面で使用が期待される形式が当該場面の対者以上に顕著に用いられた点を取り上げ、移住者に特有の運用の特徴である可能性を指摘した。当該場面の「場面らしさ」を特徴づける言語形式が積極的に選択されたことは、〔他郷〕でいえば知識としての標準語スタイルが実際の運用の形として実現したことを意味する。このことから、3名は語彙・文法レベルにおいて標準語能力の顕在化に成功したといえる。

第5章では音声レベルの分析項目としてアクセントを取り上げ、方言文節量（高木 2006 ほか）の手法を用いて場面間の運用の在り方を捉えた。3名に共通する傾向として、形態面は場面の別を問わず方言・標準語の両変種に共通の形式が多数を占めるのに対し、アクセント面は場面によってそれぞれの変種に固有のアクセント型（京阪式アクセント/東京式アクセント）が概ね固定されていることを示した。話者によってはたとえ形態的に方言要素が含まれる文節であっても、〔他郷〕であれば東京式アクセント、〔同郷〕であればほぼ京阪式アクセントのみによる実現を固持する、きわめて明瞭な切換えを行うタイプがある。このタイプは他者や自身の過去の発話を引用ないし模倣する際にも、〔同郷〕では模倣対象の出身地の違いによって両アクセントを使い分けたのに対し、〔他郷〕では一貫して東京式アクセントを用いたことから、標準語話者に対しては方言要素を感じさせる京阪式アクセントの使用を控える「標準語話者を意識した切換え」が行われている可能性を指摘した。対する他方のタイプは上述のタイプほど徹底した切換えではないが、語彙・文法レベルと同様に談話が進むにつれ当該場面で期待されるアクセント使用へと徐々に移行するという運用を行った。引用発話に関しては模倣対象の別に関わらず一貫したアクセント使用を行っていたのが〔同郷〕であったことから、先のタイプとは反対に「方言話者を意識した切換え」を行っていると考えられる。いずれのタイプにせよ〔他郷〕での東京式アクセントの実現度の高さから考えると、アクセント面においても潜在的な標準語能力が発揮されたと結論づけられる。

第6章と第7章では談話レベルの分析項目を取り上げた。第6章では先行研究で示され

た関西方言話者の引用発話の使用頻度の高さ及び引用手法の独自性を受け、発話の引用手法と題したうえで、他者や自身の発話を引用する程度や具体的な引用の仕方における場面間の異同を考察した。話者によっては場面間で違いがみられたケースもあったが、その切換えの度合いは語彙や文法、アクセントなどの個別項目に比べると連続的である。また、各場面の対者との相互作用のなかで用いられたと考えられるものもあり、話者自らの判断による積極的ないし主体的な切換えとはいいがたいことを述べた。

第 7 章では談話の展開のさせ方に着目し、談話標識の使用を分析項目としたうえで、各場面における運用の特徴と場面間の異同を明らかにした。分析に先立ち、関西方言話者に特有の談話展開と、標準語話者に特有の談話展開の洗い出しをそれぞれ試みた。各談話に固有の特徴を切換え項目としたうえで両場面の談話展開を対照した結果、話の結末部分の示し方や談話標識の具体形式の種類に多少の違いがみられたほかは、〔他郷〕か〔同郷〕かに関わらず関西方言話者的な談話展開を維持する傾向にあり、切換えの程度が低いことが示された。このように、談話レベルの各項目は両場面を通じて関西方言的傾向が現れていることから、標準語能力を顕在化させる対象とはなりにくいと考えられる。

第Ⅲ部（第 8 章・第 9 章）は本論文の結論にあたる。第 8 章では、各論で提示した関西若年層 3 名の各場面における言語項目の切換えの実態を通して、スタイル運用のメカニズムを明らかにすることを試みた。それに先立ち、各項目についてレベル別の切換えの程度（切換え度）を算出したところ、音声、文法、語彙といった個別項目は切換え度が高い一方、談話レベルのような大きな言語単位になると非常に低くなることが示された。こうした場面間のスタイル運用の在り方を左右するメカニズムとして本論文では、社会的な場面に従って使用言語が選択される「わきまえ」が基本的な枠組みとして影響していることを、切換えに対する話者自身の意識調査の結果などを踏まえ主張した。そのうえで、そのわきまえが特に強く働くことによってスタイルが選択される「わきまえ型」と、大枠ではわきまえに従いつつもスタイルを自己のアイデンティティ表出のための言語資源として能動的に活用する「わきまえ＋資源活用型」のタイプが存在することを述べた。最後に第 9 章では本論文で明らかにした内容を整理し、今後の展望について述べた。

上掲のいずれのタイプであれ、これまで場面を問わず方言を中心とした言語生活が営まれる「方言中心社会」のなかで過ごしてきた関西若年層が、知識としてののみ有してきたであろう潜在的な標準語運用能力を、実践可能な実態としてダイナミックに発揮するさまが現れているといえる。人々の生活様式や社会生活の多様化が進む現在、知識としての変種、すなわち関西方言話者にとっての標準語にあたるものが、実際の言語実践の場で活用される機会は今後ますます増加していくと思われる。現代に生きるそうした人々の言語運用の在り方とそのメカニズムについて、3 名という限られた人数のなかではあるものの明らかにすることができた点に、本研究の意義があるものと考えられる。

目 次

はじめに	1
第 I 部 序論：研究の背景と本研究の目的.....	3
第 1 章 多言語・多変種社会におけるスタイル選択の在り方.....	5
1. はじめに	6
2. スタイル研究の潮流.....	6
2.1. 海外の研究におけるスタイルの捉え方.....	6
2.2. 国内の研究におけるスタイルの捉え方.....	7
3. 社会の多様化とスタイルの関わり	8
3.1. 多言語話者のスタイル運用能力.....	9
3.2. 移住者とスタイル.....	11
4. 本章のまとめ	12
第 2 章 関西方言話者の言語的特性.....	13
1. はじめに	14
2. ことばの使い分けにみる関西方言話者の特徴.....	14
2.1. 意識研究	14
2.1.1. 使い分け意識のタイプにみる関西の位置づけ	14
2.1.2. 言語行動・使用意識にみる方言使用の積極性.....	16
2.2. 実態研究	17
2.3. 使い分け調査における場面設定.....	18
3. 関西的特徴の要因.....	19
4. 本章のまとめ	20
第 3 章 本研究の目的と調査の概要.....	23
1. はじめに	24
2. 問題のありかと本研究の目的.....	24
3. 調査方法・対象の検討.....	25
3.1. 調査方法	25
3.2. 調査対象	26
3.2.1. 主要な調査対象（関西出身若年層）	26
3.2.2. 各場面の対者.....	27

4. 調査の概要	28
4.1. 調査内容	28
4.2. 話者情報・談話情報.....	29
5. 各種用語・概念に対する本研究の立場.....	31
5.1. 「方言」と「標準語」	31
5.2. 「スタイル」をめぐる諸概念.....	32
6. 文字化の方法	34
6.1. 表記と文節の切り出し方.....	34
6.2. 談話データに用いる記号.....	35
 第Ⅱ部 本論：関西若年層のスタイル運用の実態.....	37
 第4章 語彙・文法項目にみる運用の実態.....	39
1. はじめに	40
2. 各項目の分析結果.....	40
2.1. 語彙項目	40
2.2. 文法項目	42
2.2.1. 断定形式	42
2.2.2. 動詞否定形式.....	44
2.2.3. 否定疑問形式.....	48
2.2.4. 推量形式	49
2.2.5. ノダ相当形式.....	49
2.2.6. 間投助詞	51
2.2.7. 終助詞	51
3. 話者別にみる場面間切換えの実態.....	53
3.1. 各話者の切換えのタイプ.....	53
3.1.1. X と Y の場合	53
3.1.2. Z の場合	54
3.1.3. タイプの異なりの要因.....	56
3.2. 各話者に共通する切換え方の特徴.....	57
4. 場面別の運用にみる移住者としての特徴.....	58
4.1. 〔他郷〕での運用.....	59
4.2. 〔同郷〕での運用.....	60
5. 本章のまとめ	63

第5章 アクセントにみる運用の実態	65
1. はじめに	66
2. 分析方法	66
2.1. 方言文節量	66
2.2. 本研究の枠組み	68
3. 形態面・アクセント面における文節量の場面間比較	69
4. 話者別にみるアクセントの切換えの実態	70
4.1. X の場合	71
4.2. Y の場合	73
4.3. Z の場合	75
5. 引用発話におけるアクセント使用	78
5.1. 模倣対象の違いによるアクセント使用の実態	78
5.2. X と Y の場合	79
5.3. Z の場合	80
6. 本章のまとめ	81
 第6章 発話の引用方法にみる運用の実態	 83
1. はじめに	84
2. 分析の枠組み	84
2.1. 分析方法	84
2.1.1. 引用発話の認定基準	84
2.1.2. 引用発話数の算出方法	85
2.2. 分析項目	86
3. 発話の引用方法における切換えの実態	87
3.1. X の場合	88
3.2. Y の場合	90
3.3. Z の場合	92
4. 本章のまとめ	94
 第7章 談話の展開方法にみる運用の実態	 97
1. はじめに	98
2. 分析方法	98
3. 従来の東京・関西方言談話間にみる展開方法の異同	101
4. 東京・関西若年層の談話展開パターン	102
4.1. 談話標識の出現傾向	103
4.2. 談話標識の組み合わせパターン	104

5. 関西出身若年層の談話展開の場面間比較.....	108
5.1. 分析の枠組み	108
5.2. X の場合.....	110
5.3. Y の場合.....	112
5.4. Z の場合	116
6. 全体の傾向と従来の東京・関西談話との比較.....	118
7. 本章のまとめ	121
 第Ⅲ部 結論：関西若年層のスタイル運用のメカニズム.....	123
 第8章 スタイル運用の全容とそのメカニズム.....	125
1. はじめに	126
2. 各項目の運用の全容.....	126
2.1. 語彙レベル	126
2.2. 文法レベル	128
2.3. 音声レベル	129
2.4. 談話レベル	131
2.4.1. 発話の引用方法.....	131
2.4.2. 談話の展開方法.....	132
3. 各話者のレベル別切換え度.....	134
4. スタイル運用のメカニズム.....	136
4.1. 基本的な枠組み（マクロ視点でのメカニズム）	136
4.2. 個別的な枠組み（ミクロ視点でのメカニズム）	139
5. 本章のまとめ	142
 第9章 まとめと今後の課題.....	145
 参考文献一覧	151

はじめに

本論文は、出身の異なる親しい友人とのカジュアルな場面を中心としたスタイル運用の在り方について、首都圏に移住した関西若年層を対象に考察するものである。このテーマは学校教育やメディア等との関わりによって、成育の過程で「知識」すなわち理解能力として保有されるようになった標準語スタイルについて、それが実際の使用場面に接した際にどのような形で実践されるのか、すなわち話者の潜在的な標準語スタイルの運用能力が如何にして発揮されるのかを明らかにしたいという問題意識に基づいている。

多言語話者やバイリンガルなどを対象としたこれまでの研究は、複数の言語ないし変種の実際の運用能力を持つ話者を対象としたものが多く、知識としては有しているが日常生活において実践の場が少ない言語や変種に対する話者の運用能力の実現可能性を探るものについてはあまり例がない。生活様式の変化や交通網の発達・整備等により人口の流出入が盛んとなった現代において、地域社会に住まう人々の潜在的な標準語能力が発揮される場面を見出すことは容易になりつつある。そうした場でどのような言語実践が行われるかを考察することは、多変種社会へと変容しつつある現代の日本社会におけることばの運用の在りようを捉えるうえで、一定の意味を持つものと考ええる。

本研究の考察対象である関西若年層は、標準語を使用する機会が少なく、フォーマルやカジュアルなどの場面に関わらず方言を中心とした言語生活が営まれる「方言中心社会」（田原 2006）のなかで成育してきた一集団である。そうした社会の特質によるものもあってか、これまでの関西方言話者の言語運用に対しては、方言使用というモノリンガルの側面に注目が集まるが多かったように思われる。しかしたとえ方言が中心の社会にあっても、成育の過程で標準語を知識として習得し、理解する能力を備えていることは十分に考えられることである。このように、知識として話者のなかで潜在的に保有されてきた標準語スタイルが実際にどのように実践されるのかを捉えることは、これまでの関西方言話者の言語運用に対する見方に対し、新たな側面を提案することになると考える。

本論文では以上のような考えのもと、関西若年層のカジュアル談話におけるスタイル運用の在り方を明らかにすることを目指した。

本論文は第Ⅰ部から第Ⅲ部までの3部構成をとる。第Ⅰ部（第1章～第3章）は序論とし、本論文における研究の背景と議論の前提となる事項について述べる。第1章ではスタイル研究のこれまでの流れについて、海外の研究と日本国内の研究に分け、整理する。それらを踏まえたうえで、スタイルに関する本研究の立場を述べる。続く第2章では、本研究が対象とする関西若年層の言語運用の在り方を明らかにするための前提として、関西方言話者に特徴づけられる従来の言語使用や行動パターンについて意識研究と実態研究の両側面から整理を行う。加えて、そうした特徴の背景にある要因としてこれまで考えられてきた点についてまとめる。第3章では、前章までの研究の背景から浮かび上がる問題のあ

りかとそれらに対する本研究の課題を提示する。続いて調査方法と調査対象の検討を行ったのち、それに基づいて実施した調査の概要について述べる。また、本論文で使用する用語の整理や談話データの文字化方法についても合わせて述べる。

各論となる第Ⅱ部（第 4 章～第 7 章）では首都圏に移住した関西若年層 3 名を対象に、出身地の異なる対者に対しどのような言語運用を実践するかについて、語彙・文法・音声・談話の各レベルに分けて分析・考察を行う。まず第 4 章では語彙・文法レベルとして、方言・標準語の両変種間で対応関係にある複数の語と文法項目を取り上げ、各項目について対他地域出身者場面（〔他郷〕）と対同郷出身者場面（〔同郷〕）での運用の実態を明らかにする。第 5 章では音声レベルの分析項目としてアクセントを取り上げ、談話全体に占める各アクセント型の実現量の違いなどから場面間の異同を捉える。第 6 章及び第 7 章では談話レベルにおける特徴を考察する。前者では発話の引用方法を、後者では談話の展開方法を取り上げ、それぞれの項目について〔他郷〕と〔同郷〕でどのような運用が行われているかを考察する。

第Ⅲ部（第 8 章・第 9 章）は結論である。第 8 章では、各論で述べた場面間のスタイルの特徴を「切換え度」としてまとめ直したのち、本研究が対象とした関西若年層 3 名のスタイル運用のメカニズムを考察する。そして第 9 章にて本論文の内容を改めて整理したうえで、今後の展望について述べる。

第 I 部 序論：研究の背景と本研究の目的

第 I 部は序論と題し、本論文における研究の背景及び前提となる事項について述べる。まず第 1 章では本研究の関心の中心に位置する「スタイル」ならびに「スタイル切換え」をめぐる従来の研究の動向について概観する。続く第 2 章では本論の主要な研究対象である関西方言話者について、その言語的特性とされてきた点を整理する。第 3 章では、第 1 章及び第 2 章から浮かび上がる問題のありかとそれらに対する本研究の課題を提示したうえで、調査方法・対象の検討ならびに本研究で実施した調査の概要について述べる。最後に本論文で使用する用語や概念について説明を加え、調査で得たデータの文字化方法についてまとめる。

第1章 多言語・多変種社会におけるスタイル選択の在り方

本研究は、多言語・多変種化しつつある現代の日本社会におけるスタイルの運用・選択の在り方を探るものである。その前提として、本章ではこれまでスタイルがどのように捉えられ、今後どのように捉えられていくのか、その潮流を概観する。また、現代社会に生きる人々とスタイルの関わりについて、運用能力ならびに移住者を対象とした研究の視点から整理する。

1. はじめに

かつてはそれぞれの地域社会に堅固に根ざしていた人々の生活や文化も、社会構造の変化や交通網の整備・発達に伴う人口の流入・流出等により、現在は多様化・重層化の最中にある。近年では国外からの移住者の数も増加傾向にあり、異なる文化的背景を持つ者同士の交流が各地で見受けられる。ことばもまた例外ではなく、他言語/方言との接触による中間言語/変種の生成や移住先方言の受容、共通語化の影響など、一個人が様々なことばのレパートリーを有する、いわば多言語・多変種化した社会へと変容しつつある(3.2 節参照)。本章ではこうした複雑な言語事情を抱えた現代の日本社会を多言語・多変種社会と捉えたうえで、そこでのことばの運用の在り方について、本研究の議論に関わる「スタイル選択」をキーワードに、これまでの研究を概観することとしたい。

本章は次のような構成からなる。はじめに 2 節では、スタイル研究の潮流として海外及び日本国内でスタイルがどのように研究されてきたかを概観する。続いて 3 節では現代社会を生きる人々のスタイルの選択・運用に関わる研究として、話者の運用能力に着目したものと、移住者の言語運用に着目したものを中心に整理する。4 節は本章のまとめである。

2. スタイル研究の潮流

「スタイル」は社会言語学における主要な研究対象の 1 つであり、これまで国内外を問わず多種多様な観点から研究が蓄積されてきた。本節ではスタイル研究のこれまでの流れについて、海外の研究(2.1 節)及び日本国内の研究(2.2 節)の両側面から整理し、スタイルがどのようなものとして捉えられてきたのかを概観する。

2.1. 海外の研究におけるスタイルの捉え方

スタイルをめぐる研究に関しては多くの場合、Labov による一連の研究がその出発点として挙げられている。話をする際に自身のことばに注意を払うか、話の内容に集中するかといった「ことばへの注意度 (attention paid to speech)」の違いによって使用形式の異なりを説明した Labov (1966; 1972) 等がその一例である。また、話し手のスタイルの選択を聞き手との心理的距離から捉え、聞き手の言語能力によって自身のことばを調節する「アコモデーション理論 (accommodation theory)」を提示した Giles (1973) や、聞き手だけでなく周囲で自身の話を聞いている人、あるいは周囲にはいないが話を聞く可能性のある人にも配慮してことばを調整する「オーディエンス・デザイン (audience design)」の考えを示した Bell (1984; 2001) など、スタイルの役割やメカニズムの解明へのアイディアを提供した研究が複数みられる。

スタイル研究の初期に位置づけられるこれらの研究モデルにおいては、社会的なカテゴリーやアイデンティティはすでに与えられた所与のものとして捉えられ、スタイルはそれらに沿って選択される受動的かつ固定的なものと捉えられてきた (Rickford & Eckert 2001)。こうした固定的な捉え方が伝統的な社会言語学のアプローチに付随するものとみなされる

ようになった近年では、そこから脱却し、社会的カテゴリーやアイデンティティを「絶えず構築され続けるもの」として捉え直そうとする試みが Eckert らによって提案されている。

たとえば Eckert (2012; 2018) はこれまでの社会言語学の歩みを大きく3つのタイプに分け、それぞれを「第一の波 (The First Wave)」、「第二の波 (The Second Wave)」、「第三の波 (The Third Wave)」と呼んだ。第一の波は年齢、ジェンダー、人種、社会階層などの社会的・人口統計学的カテゴリーがことばの変異とどのように関連しているのかについて、第二の波はそれらのカテゴリーを構築するためにことばの変異がどのように利用されるのかをより質的視点から解明することを目的とした (高野 2011; ハインリッヒ・石部 2016)。これらの波は種々のカテゴリーが「こうあるもの」として固定化されている点で共通する。対する第三の波はそうした固定的な枠から脱却し、社会的カテゴリーやアイデンティティを「持続的に構築するもの」とみなしたうえで、特定の相互行為者間において、社会的な相互行為を通して社会的意味がどのようにことばの変異と結びつけられるのかを解明するものとされる。第三の波におけるスタイル研究は、そうしたカテゴリーの構築プロセスの資源として能動的かつ創造的に、個別具体的な場面に沿った適切性を伴って現れるものとしてスタイルを解釈するようになった (Rickford & Eckert 2001; ハインリッヒ 2016)。代表的なものとしては、自身が属さない民族集団のことばを意図的に借用する行為 (language crossing) とアイデンティティとの関係を論じた Rampton (1995) や Coupland (2007)、Eckert の一連の研究 (Eckert 2000; 2012; 2018) などが挙げられる。こうした研究アプローチは現在、日本国内の研究においても取り入れられつつある (次節参照)。

2.2. 国内の研究におけるスタイルの捉え方

日本国内における (日本語を対象とした) スタイル研究は、渋谷 (2015) にも簡潔にまとめられているように、方言と標準語の使い分け、あるいは丁寧体と普通体の使い分けをめぐってなされてきた。前者に関しては 1990 年代以前を中心に、もっぱら話者の意識を介した使い分けの在り方の把握が盛んに試みられたが (『言語』別冊 1995; 佐藤・米田 1999 ほか)、2000 年代以降は実際の会話上で観察される実態としてのスタイル及びその使い分けに注目が集まるようになり、「阪大 SS プロジェクト」(渋谷 2002 ほか) のような実態記述を目的としたプロジェクトが進められてきた。対する丁寧体と普通体の使い分けに関しては、三牧 (2013) などにみるような自然談話の分析による実態研究が主流となっている。

このように方言/標準語ならびに丁寧体/普通体といった2つの観点を含み込むことから察せられるように、日本語におけるスタイルの概念やその捉え方は、研究の進展に伴って複雑さを増している。この状況に鑑み、スタイルあるいはそれに類する用語や概念を用いた研究の整理・概観を行った宇佐美 (2015) は、国内研究におけるスタイルがおおよそ『個人の、一言語内の複数の変種の変種の使い分け』を扱うもの (p.9) として捉えられていることを示した。この「使い分け」については相手の属性 (出身地、性、年齢、職業など) や相手との関係 (上下、親疎など)、置かれた状況 (フォーマル・インフォーマルな場面など)、

話題、目的、メディアなど、様々な要素が要因となって行われ（渋谷 2008a; 2015）、また、スタイルを構築する要素としては、敬語やデスマス体、種々の言語項目などの個別形式に加え、「勧め方」や「誘い方」といった発話行為のレベルも含まれるとしている（宇佐美 2015; 渋谷 2008a）。

2.1 節に示した海外の研究の流れとの関連で述べると、国内研究のなかにも Eckert の言う 3 つの波に相当するアプローチをとるものが存在する。第一あるいは第二の波に該当するものとしては、日本語の敬語と欧米言語のポライトネス表現における使用動機の違いからポライトネス理論（Brown & Levinson 1987）の普遍性を否定した、井出（2006）を挙げることができる。ポライトネス理論は、人間誰しもが持つ 2 つのフェイス（ポジティブフェイス：「他者に理解され、共感されたい」というフェイス/ネガティブフェイス：「他者に邪魔されたくない、立ち入られたくない」というフェイス）に対し、それらに配慮しつつ円滑なコミュニケーションの維持に努める言語行動の在り方を示したものであり、それぞれのフェイスを損なわないための戦略的な行動（ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー/ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー）による配慮の仕方の普遍性を説いたものである。これに対し井出（2006）は、日本語の敬語を例に、相手や状況、場面などの社会的制約によって使用すべき形式が自動的に決められる「わきまえ」という概念の存在を指摘した。ポライトネス理論が他者への配慮を話し手の意志による能動的ないし戦略的な働きかけによるものとしたのに対し、井出（2006）は日本語の敬語のスタイルが所与の社会的規定のうえに成り立つもの、すなわち受動的かつ固定的な「わきまえ」によるものとしており、この捉え方は海外の研究における方向性、すなわち第三の波とは質を異にするものといえる。

その第三の波に関しては近年、国内研究のなかでもその考え方を支持するものが徐々に現れてきている。高野（2011）は北海道ニセコ町の住民のインタビュー音声から、郷土への帰属意識の現れと当該地域方言の音声バリエーションとの間に規則的關係がみられることを指摘した。またハインリッヒ（2016）は沖縄の若年層を中心としたスラング（「うちなあやまとぐち（原文ママ）」）の使用や標準語話者による「方言コスプレ」を例に、方言の意図的選択とアイデンティティとの関係を論じている。

このように日本語を対象とする国内研究におけるスタイルは、個人が一言語内に有する複数の変種を使い分けを扱うものと解釈されている点で概ね一致する一方、それを受動的・固定的事象とみなすか、あるいは能動的・創造的事象と捉えるかといった把握の仕方に関しては、双方の捉え方が併存している状態にあるといえる。こうしたスタイルの捉え方に対し、本研究がどのような立場をとるかについては、第 3 章にて詳しく述べることにしたい。

3. 社会の多様化とスタイルの関わり

続いて本節では、2 節で述べたスタイル研究の流れを踏まえたうえで、多様化する現代社会における人々とスタイル選択・運用の關係がどのように論じられてきたかを概観する。

はじめに 3.1 節では、多言語話者とスタイルの関係を一個人の運用能力の観点から捉えた研究について整理する。続く 3.2 節では、複数の変種への接触や選択を求められる環境にある「移住者」に目を向け、彼らとことばとの関係がどのように捉えられてきたのかをみていくこととしたい。

3.1. 多言語話者のスタイル運用能力

多言語社会に生きる人々とスタイルの関係を論じた研究の中には、人々のスタイルの運用能力やそのメカニズムに焦点を置いたものがある。渋谷 (2008b; 2013) は Cummins (1996) や Cook (2002) らによる一個人内の言語能力のストックモデルをもとに、次掲図 1-1 のような多言語・多変種能力の基本モデルを提案した。

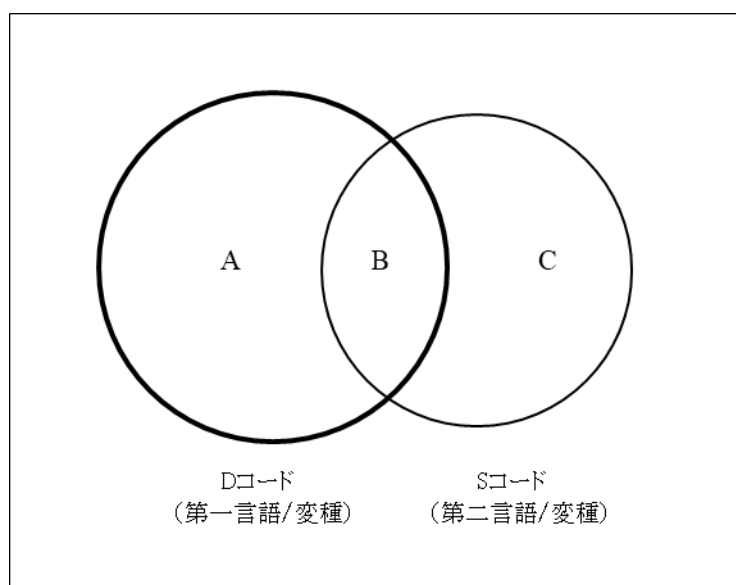


図 1-1 多言語・多変種能力の基本モデル
(渋谷 2008b:181; 2013:45 より)

このモデルによれば、我々は日常語 (Vernacular) や母語などの第一言語/変種にあたる Dominant コード (D コード: 太線の円) に加え、母語以外の様々なスタイルや第二言語/変種にあたる Subordinate コード (S コード: 細線の円) を習得するという。また、当該言語/変種が D コードであるか S コードであるかは習得の順序とは関係がなく、それらの能力の高低 (円の大きさで区別) あるいは自動化の度合い (線の太さ・線種で区別) によって決定されるという。図中の A・C は両コードが分離された、すなわち当該コードのみが持つ部分である。B は両コードが融合する部分であり、そこに含まれる言語事象や規則は両コード間の言語的距離や話者が把握する二言語間の距離、話者の S コードの能力によって異なるとしている。

渋谷 (2013:46-47) は上記モデルの具体例として、津軽に生まれ、津軽方言を母方言とし

て育ち、教育やメディアを通して共通語（本研究における「標準語」と同義¹⁾）に触れつつ当地で 18 年間を過ごしたのち、進学先の大阪で大阪方言を習得すると同時に、大学の授業等で英語と韓国語を学んだ話者を挙げた。この話者の「津軽方言と共通語」あるいは「大阪方言と共通語」を例にとると、それぞれの前者が D コード、後者が S コードに該当する。また、A・C の部分にはアクセントや一部の文法形式、俚言などが、B には統語・形態的規則や基本語彙などが含まれるとしている。

なお図 1-1 のモデルを現実にもつた個人の多言語・多変種能力に当てはめた場合、以下図 1-2 のように複数のコードが一人の話者の頭のなかで互いに融合しあってストックされている状態が想定されるという。

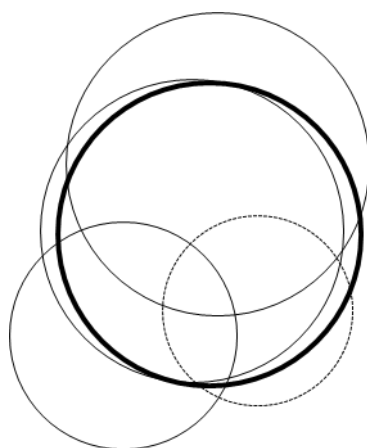


図 1-2 現実に則した個人の多言語・多変種能力モデル
(渋谷 2013:47 より)

上図は津軽方言や大阪方言、共通語に加え、韓国語や英語など話者が習得したあらゆる言語ないし変種の能力状態がまとめて示されている。当モデルを本研究で扱う関西若年層（関西に生まれ、関西方言を母方言として育ち、共通語にも触れつつ 18 年間を過ごし、進学先の大学で英語や第 2・第 3 外国語を習得：話者情報の詳細については第 3 章 4.2 節を参照）に当てはめるならば、関西方言ないし日本語を中心として、知識として有する共通語や英語、諸外国語等が融合された能力状態を想定することができよう。

現代はこのように一個人が様々な言語あるいは変種に触れ、習得する機会が多分にあり、自身の言語的レパートリー（スタイル）を豊富に有することが容易となりつつある。上述の研究は、このようなレパートリーの保持を一個人の運用能力の観点から捉えたものとまとめることができる。

なお、このように複数のスタイルや言語的レパートリーを保持しうる環境に置かれた話者としては、他地域への移住を経験した人々を挙げることができるだろう。移動手段の充

1) 本研究における各種用語の定義については第 3 章 5.1 節を参照いただきたい。

実や社会構造の変革等により移住が容易となった近現代において、移住者とスタイルの関係はどのように捉えられてきたのだろうか。次節ではこうした移住者を対象とした研究の整理を試みたい。

3.2. 移住者とスタイル

移住者とことばの関係については研究の積み重ねが豊富であり、これまで様々な地域へ、あるいは地域からの移住者を対象として行われてきた。「移住」をテーマとしていることもあり、その多くはことばの変容の過程が主要な研究対象となっている。

移住先のことばの習得・受容に着目したものとしては、全国から広島への移住者を対象とした意識調査から広島方言の習得にかかる期間等を分析した神鳥・高永（1988）や神鳥（1989; 1992）、全国から大阪・京都に移住した人々の方言受容の意識を調査したロング（1989; 1990a; b）、東京式アクセントの保有で知られる奈良県十津川村から同県天理市へ移住した話者の京阪式アクセントの習得実態を 3 世代に渡って調査した西村（1990）や同じく天理市への移住者を対象とした山村（1990）などがあり、様々な地域への移住者を対象として研究が行われている。

また、移住前のことば（母方言）の残存という観点から論じられたものについては、沖縄から大阪への移住者を対象に沖縄方言の場面別使用頻度等を明らかにした岸江・ロング（1993）や、全国から北九州の大学に進学した学生への意識調査から母方言に対するコンプレックスの地域差を示した陣内（1996）、東京・埼玉への移住が大阪出身者のことばに与える影響をアンケート調査によって示した荻野（1995）などが挙げられる。そのほか、もともと人が居住していないニュータウンへの移住者による言語変種の形成過程を追った朝日（2008）など、移住者同士の接触によることばの形成・変容に注目したものもある。

なお、上記の研究の多くは全国から地方都市への移住者を対象としたものであるが、なかには首都圏などの大都市への移住者を対象としたものも散見される。首都圏の場合、使用される言語（共通語ないし標準語）はメディアや教育等によってすでに知識としてある程度習得されていると考えられているためか、「移住先言語の習得・受容」という観点から分析されたものはあまり多くない。代わって議論されやすいのは、移住先言語としての共通語/標準語使用の有無や使い分け、及びそれらに関わる要因である。たとえば東京移住後の関西出身者を対象とした不二門（1988）は、東京語（標準語）の使い分けの意識やイメージを関西在住者のそれと比較し、話し手の東京語への評価がその使用の有無に作用することを示した。

このように、移住者を対象とした研究における関心の多くは移住先のことばの習得や受容の過程、あるいは移住前のことば（母語）の残存状況などことばの変容に関連したもので占められており、首都圏への移住者に関しては移住先のことば（標準語/共通語）使用の有無やその要因に焦点が置かれる場合が多いとまとめられる。

移住は「移住先方言」という新たなことばのレパートリー、すなわちスタイルを習得す

る機会ともいえるが、これまでの研究はこのスタイルをどのように獲得していったか、あるいは母方言のスタイルをどのように維持・忘却していったかという通時的な側面への関心が強かったように見受けられる。対して、移住先あるいは移住前のことばなど、自身の持つスタイルをどのような場合に、どのような形で運用するのかといった共時的な側面を捉えた研究はあまりみられない。首都圏移住者を対象とした不二門（1988）や荻野（1995）ではその一端が示されたものの、アンケートによる意識調査にとどまっており、実態面から捉えたものに関しては山口から京都へ移住した話者のスタイル切換えを記述した船木（2009; 2011）や、福井から関西への移住経験者の切換えを捉えた濱田（2011）などを除いてさほど例がない。

多言語・多変種化した現代社会におけるスタイルの実態を捉えるには、移住による変容過程を主な対象としてきた従来の見方に加え、移住者が自らのスタイルをどのように選択し運用するかという観点も含めた、より多角的な視点が必要になってくると思われる。

4. 本章のまとめ

本章ではまず「スタイル」に関するこれまでの研究の流れについて、海外ならびに国内研究の観点から概観した。そしてスタイルを話し手個人による能動的・創造的産物として捉える動きが海外を中心に広がりつつあること（2.1 節）、また国内では個人が一言語内に有する複数の変種を使い分けを扱うものとして概ね共通に認識されていること（2.2 節）を述べた。

これらを踏まえ、多言語・多変種化の渦中にある日本の現代社会における人々と、そのスタイル選択・運用の在り方との関係性について、個人々のスタイルの運用能力のメカニズムに注目した研究（3.1 節）や、複数の言語的レパートリーを習得する環境にある移住者を対象とした研究（3.2 節）を中心に整理を試みた。

その結果、現代社会では一個人の有するスタイルが様々あり、それらをどのように保持しているかという能力としてのメカニズムの解明が進んでいることが示された。その一方、移住者を対象とした研究ではスタイル選択という共時的な部分への注目が少ない点や、意識調査が中心である点などから、一個人内に様々あるレパートリーがどのような場合にどのような形で運用されるのかといった実態面については未だ十分に明らかにされていないことがうかがえた。

続く第2章では、本研究における主要な調査・分析対象となる関西方言話者に目を向け、ことばとの関わりにおける意識・運用・行動上の特徴がこれまでの研究のなかでどのように捉えられてきたのかを概観することとしたい。

第2章 関西方言話者の言語的特性

本章では、本論文で分析の対象とする関西方言話者の言語的特性とされてきた点を意識・実態の両面から探り、それらの特性の要因と考えられてきた点についても整理したうえで、関西方言話者とことばの関わりがこれまでどのように捉えられてきたのかを示す。

1. はじめに

本章では、現代における関西若年層の言語運用の多様性を明らかにするための前段階として、関西方言話者に特徴づけられる言語使用や行動パターンがこれまでどのようなものとして捉えられてきたのかについて、その背景にある要因とともに概観する。

まず 2 節では関西方言話者の言語使用の特徴として、主にことばの使い分けに関わるものを中心に整理する。続く 3 節では、2 節でみた関西方言話者の使用特徴の背景にある要因として主にどのようなものが考えられてきたかをまとめる。最後に 4 節で本章のまとめを述べる。

2. ことばの使い分けにみる関西方言話者の特徴

関西方言話者の言語行動のイメージとして世間一般に広く認知されている通説の 1 つに、「関西人はどこに行っても誰に対しても方言で押し通し、ことばを変えようとしない」というものがある（NHK 大阪弁プロジェクト編 1995:42; 井上 2009:52 など）。こうした通説に関連してか、ことばの使い分けや切換えを研究対象としたもののなかには、関西を対象に含めたうえでその特性について言及したものが散見される。本節ではその特性について、意識研究（2.1.1 節）と実態研究（2.1.2 節）の両側面に分けて整理することとしたい。

2.1. 意識研究

話者の意識からことばの使い分けの在り方を捉えようとした意識研究においては、他地域出身者との比較を通して関西方言話者の特徴をタイプ分けしたもの（2.1.1 節）と、関西方言話者に特有の言語行動や意識に着目したもの（2.1.2 節）とがみられる。以下、順に概観する。

2.1.1. 使い分け意識のタイプにみる関西の位置づけ

ことばの使い分けに関してはこれまで、大規模な意識調査等による地域的な類型化が度々試みられてきた。

初期の研究としては寿岳（1977）が挙げられる。寿岳（1977）の主張は調査データに基づくものではないが、自身の経験をもとに、場所（郷土またはそれ以外の土地）とその場所での使用言語の選択に地域差が存在することを指摘し、概ね以下の 3 つのパターンに分類した。

- A) 東北型：郷土では方言、郷土以外では標準語を使用する
- B) 関西型：郷土でも郷土以外でも方言を使用する
- C) 沖縄型：郷土でも郷土以外でも標準語を使用する

また、陣内（1996）は西日本を中心とした各地域の出身者が集まる北九州市内の大学生を対象に言語生活や方言に関するレポートを実施し、それによって得られた自由回答をもとに、若年層の方言使用の類型と出身地域との関係を以下のタイプにまとめた。関西はこ

のうち D) のタイプに該当する地域であるとしている。

D) 無意識的顕在化型：母方言がスムーズに出ても一向にかまわないタイプ

〈該当地域〉**関西（特に大阪）**、北九州市、福岡市

E) 中間型：①意識的顕在化型：開き直って母方言を出すタイプ

②無意識的潜在化型：いつのまにか母方言が出なくなるタイプ

〈該当地域〉準関西系、準博多系、準北九州系、広島、岡山

F) 意識的潜在化型：意識して母方言を出すまいとするタイプ

〈該当地域〉南九州（鹿児島・宮崎）、出雲

上記 D) ～F) は対象者の出身地域が限定されたなかでの類型であるが、陣内（1999）では 1994 年から 1995 年にかけて行われた全国 14 地点・2800 名を対象とした大規模な言語意識調査のデータを用い、方言と共通語の使い分けパターンの類型化が試みられている。これは場所（地元/東京）と話し相手の種類（同郷の知人/見知らぬ共通語話者）を組み合わせた 4 つの場面で方言と共通語のいずれを用いるかを尋ね、各変種の使用率の平均値の偏差からタイプ分類を行ったものである。陣内（1999）は得られたタイプとして次の 4 つの型を提示し、このうち関西（京都）は G) のタイプに該当するとした。

G) 方言開示型：どの場面でも方言使用率が相対的に高いタイプ

〈該当地域〉**京都**、東京、札幌、福岡

H) 方言抑制型：どの場面でも方言使用率が相対的に低いタイプ

〈該当地域〉仙台、千葉、那覇

I) 使い分け型：話し相手が同郷人か共通語話者かによって明確に使い分けるタイプ

〈該当地域〉広島、鹿児島、高知、金沢

J) 中間型：一貫して平均的な位置にあるタイプ

〈該当地域〉松本、大垣、広島

G) のタイプに該当する地域の方言使用率の高さについては、それぞれが日本の広域生活圏の核であり、周辺に影響を与える社会文化的力を持っていることで自方言に自信を持つようになった点が背景要因として指摘されている（陣内 1999:141）。

全国を対象とした大規模調査による方言・共通語使用の類型化は 2010 年代に入っても試みられており、そのなかで関西は次のような特徴を持つ地域としてまとめられている。

K) 近畿型：異郷の友人に対しても出身地方言の使用率が高い。方言への好感度は高く、共通語の使用率・好感度はともに低い。方言と共通語の使い分け意識は低く、方言で通す意識が強い（田中 2011a; b）。

L) 積極的方言話者：出身地の方言が好きで方言で通す傾向が強く、共通語との使い分け意識が低い（田中・前田 2012）。

M) 近畿・中国タイプ：対家族、同郷・異郷を問わず友人に方言をよく使う（田中ほか 2016）。

このように、方言および共通語/標準語使用に関しては地域ごとに違いがあり、それらがい

くつかのタイプに分けられることが明らかにされてきている。

なお、上記に挙げた研究は「関西」を一括りの地域と捉えたうえでその特徴を類型化しているが、田原（2006）では関西地域内がさらに細分化され、複数の地域の使い分けからその特徴の把握が試みられている。その内容は、佐藤（1997）で扱われた京都市の使い分け意識の結果に大阪・奈良・和歌山の三府県の結果を加えて考察されたものであり、具体的な調査場面としては『言語』別冊（1995）¹⁾ 所収の以下の5場面が対象とされた²⁾。

- ① 東京で共通語を話す見知らぬ人に道を尋ねる場面
- ② 地元の道端で共通語を話す見知らぬ人と話をする場面
- ③ 東京の電車の中で方言を話す知人と話をする場面
- ④ 地元の道端で方言を話す知人と話をする場面
- ⑤ 全国放送のテレビインタビューに答える場面

その結果、東北を中心とした地域は方言と共通語の使い分けが明確な「方言主流社会（佐藤 1995; 1996）」であったのに対し、京都を含めた近畿の4地点は共通語の使用が比較的望ましいとされる①・②・⑤の場面での共通語使用が他地域と比べて大幅に少なく、また、他地域では差が現れた③と④の場面での共通語使用についてもほとんど変化がなかったことが示された。つまり近畿圏の地域はどの場面でもあまり共通語が使用されない、すなわち基本的に方言を中心とした言語生活を送る「方言中心社会（田原 2006:187）」であることが明らかにされた。

ただし、場面間の使い分けが全くないわけではなく、使い分けられるコードが方言/共通語というよりも方言/丁寧方言という「方言内部での切換え」になっていることが特徴として指摘されている。関西方言話者が方言で押し通すとされているのは、そもそも共通語を話す機会が地域社会のなかに根付いておらず「場面の把握のしかたと対応が、関西とそれ以外の地域とで異なっている（井上 2009:52）」ためであるという。

共通語化の進む現代においては、こうした「方言中心社会」であっても共通語の影響を全く受けないというわけでは決してない。しかし田原（2006）も述べているように、その共通語や東京の流行語を「東京のことば」としてではなく「自身の方言の一部」として用いているところが、関西方言話者の「ことばを変えない」とされる所以であると考えられる。

2.1.2. 言語行動・使用意識にみる方言使用の積極性

前節から、背景や要因は異なるにせよ、関西という地域、またそこに住まう人々は他地域に比べ「方言使用を積極的に行うタイプ」として分類されてきたことがみてとれる。典型的には示されていないものの、関西方言話者のこうした特徴についてはほかの研究にお

1) 1990年代半ばに実施された、全国14地点（札幌・弘前・仙台・東京・千葉・金沢・松本・大垣・京都・広島・高知・福岡・鹿児島・那覇）2800名を対象とした言語意識調査の分析結果及び調査資料がまとめられた特集号。

2) 田原（2006）では設定場面③および④の「知人」が「友人」に変更されている。

いても複数言及がある。たとえばロング（1991）では東京移住後の関西出身者について、他地域出身者よりも母方言を残していることが指摘されている。

また、齋藤（1994）は地方出身者が共通語的コミュニケーションの場に置かれた際に、意に反して自らの地域言語特性（母方言）を出してしまうことを「自己有標化」としたうえで、それを「無標化」していくために図られる様々なストラテジー（「自己無標化ストラテジー」）について考察した。この「自己無標化ストラテジー」は行使される程度が地域によって異なり、「特に大阪や京都出身の男性³⁾」の中には、共通語圏であっても日常出身地の言語を使い、自己無標化ストラテジーをほとんど行使していないように見受けられる人もいる（齋藤 1994:104）」としている。他地域においても母方言を隠さず使用し続けることが、大阪・京都を含む関西出身者の特徴であることがここでも指摘されている。

また、在日外国人の方言に対するイメージや方言受容の程度を考察した備前（1996）では、比較対象として日本人被験者の意識調査の結果も示されている。そのうち、友人と話す際の標準語と方言の使い分けに関する調査結果をみると、中央部・周辺部を含む近畿出身者は「使い分けない」の回答が 80～90%を占め、他地域出身者では 10～30%を占めた「友人に合わせる」「標準語を使う」という回答は近畿出身者では 4～10%と低くなっていた。この結果は近畿地方の大学で行われた調査であることが影響していると思われるが、その点を除いたとしても「使い分けない」話者が多い点は前節で整理した関西地域のタイプと一致する。

こうした関西的言語運用の特徴は本節冒頭に示した世間一般の通説を裏付ける結果ともいえ、言語意識面において「関西的な特性」が存在することを示唆している。

2.2. 実態研究

以上にみてきた関西方言話者の言語使用のタイプ（2.1.1 節）や母方言の使用傾向（2.1.2 節）を扱った研究は、いずれも比較的多数の話者を対象としたアンケート調査等による言語意識のデータをもとに示されたものである。一方近年ではこのような人々の意識上の使い分けとは別に、2.1.1 節①～⑤のような場面に置かれた場合にどのような言語形式が実際に使用されるのかという、実態面の使い分けへの注目が高まってきている。

代表的なものとしては、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室編（2002-2005）における方言 SS (Style Shift) プロジェクトが挙げられる。このプロジェクトは様々な切換え事象のなかから日本語方言話者と日本語中間言語話者のスタイル切換えを取り上げ、その実態を記述することを目的としたものであり、日本語方言話者については全国 10 地点（青森・仙台・東京山手・東京下町・名古屋・京都・大阪・高知・山口・鹿児島）の生え抜き方言話者によるスタイル切換えの実態が自然談話データをもとに報告されている。

談話の収録は家族や親しい友人との場面（カジュアル談話）と初対面の場面（フォーマ

3) 方言と標準語の使い分け意識の男女差に関して国立国語研究所（1990）は、調査を行った三地点（豊中・宮津・豊岡）に共通して女性の方がよりはっきりと使い分けを意識しているとの結果を報告した。

ル談話)の二場面を設定して行われ、各場面は老年層と若年層の話者による以下の5つの組み合わせからなる(渋谷2002:6)。

- ⑥ 老年層生え抜き×老年層生え抜き (カジュアル場面)
- ⑦ 老年層生え抜き×若年層生え抜き (カジュアル場面)
- ⑧ 老年層生え抜き×若年層外来者 (フォーマル場面)
- ⑨ 若年層生え抜き×若年層生え抜き (カジュアル場面)
- ⑩ 若年層生え抜き×若年層外来者 (フォーマル場面)

⑥・⑦・⑨はカジュアルスタイルを引き出すための場面で、生え抜き同世代間(⑥・⑨)と生え抜き異世代間(⑦)で調査がなされている。⑧と⑩はフォーマルスタイルを引き出すための場面で、初対面同士で設定されている。

京都と大阪の調査結果を分析した辻(2003)及び細谷(2004)では、主に老年層を中心に、フォーマル場面でも方言要素を用いる傾向にあることが述べられている。特に細谷(2004:55)では大阪市方言話者が同じ生え抜きの話者と、あるいは外来者と話す場合のそれぞれの場面でのスタイル切換えについて論じられており、そのなかで他地域の話者と大阪市方言話者との違いについて述べている。それによると、他地域の話者は相手が共通語話者であれば共通語形式を用い、方言話者であれば共通語形式と方言形式のいずれもが許容されるような運用であるとしている。対する大阪市方言話者は反対に相手が共通語話者の場合はいずれの形式が出ても構わず、方言話者の場合は方言形式を用いるよう注意を払う傾向にあるとしており、こうした点から他地域の話者が「共通語話者を意識した切換え」を行うのに対し、大阪市方言話者は「方言話者を意識した切換え」を行っていることを指摘した。このように共通語話者に対する方言形使用の許容度が他地域の話者と比べて低いという結果は、2節冒頭に示した「関西人は方言で押し通す」という通説を裏付けるものともいえるだろう。

2.3. 使い分け調査における場面設定

2.1.1節に挙げた佐藤(1997)や田原(2006)、あるいは2.2節に示した大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室編(2002-2005)のように、話者の使い分けの意識あるいは実態を異なる場面ごとに捉えようとした研究に目を向けると、その使い分け場面の設定の仕方に関してやや偏りがみられることに気づく。

方言と共通語の使い分けの意識を調査した佐藤(1997)と田原(2006)における場面の設定を再度振り返ると、次のように整理できる。以下①'～④'は2.1.1節の①～⑤の⑤を除いた各場面のうち、a) 場所、b) 相手の話すことば、c) 相手との関係を抽出したものである。

- | | | | |
|----|-------|--------|----------|
| ①' | a) 東京 | b) 共通語 | c) 見知らぬ人 |
| ②' | a) 地元 | b) 共通語 | c) 見知らぬ人 |
| ③' | a) 東京 | b) 方言 | c) 知人・友人 |
| ④' | a) 地元 | b) 方言 | c) 知人・友人 |

a) ～c) の要素はそれぞれ東京/地元、共通語/方言、見知らぬ人/知人・友人のように対立軸が2つずつ設けられているが、田原（2006:179）にも言及があるように、b) と c) の組み合わせは b) が共通語であれば c) は見知らぬ人、b) が方言であれば c) は知人・友人というような形で固定されている。これらはすなわち、共通語を話す人＝見知らぬ人、方言を話す人＝知人・友人という前提のもとで調査が行われたことを意味しており、方言はカジュアル場面で、共通語はフォーマル場面で話されるもの、という認識が根底にあることを示唆するものである。

また、2.2 節に挙げた大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室編（2002-2005）の設定場面⑥～⑩についても、家族や友人とのカジュアル場面では生え抜きの母語話者が、初対面でのフォーマル場面では外来者が対者として設定されている。

これらの場面設定の方法はいずれもカジュアル場面を方言話者同士の会話に限定しており、「外来者（方言話者以外の話者）とのカジュアル場面」については対象としていない点で共通する。しかし各地域間の移動が容易に行われるようになった現代社会においては、他地域出身者同士の交流も以前に増して盛んであるといえる。ことばの切換えの全貌を明らかにするためにも、今後は「共通語を話す友人・知人」あるいは「方言話者以外の話者とのカジュアル場面」についても積極的に検討し、言語運用の実態を幅広く捉えていく必要があると思われる。

なお、全国を対象とした大規模調査による方言・共通語使用の類型化を試みた田中（2011a; b）、田中・前田（2012）、田中ほか（2016）では、使い分けの一場面として「異郷（他地域出身）の友人」との場面が設けられているが、意識上の使い分けの把握にとどまっており、実態面でどのような使用が行われるのかに関してはまだ十分な蓄積があるとはいえない。したがってこれらの点を実証的に示していくことが、本研究で果たすべき課題の1つであると考えられる。

3. 関西的特徴の要因

2 節では、関西が世間的に認知されているイメージと同様に「方言使用を積極的に行う」地域として分類・把握されていることを意識・実態の両面から整理した。本節では、第Ⅱ部以降において関西若年層のスタイル運用の在り方やその動機を考察していくための前提として、関西方言話者がそうした特性を持つ要因として何が背景にあるとされてきたのかを整理しておく。

第一の要因として従来から度々指摘されるのは、東京あるいは東京のことばへの対抗・反抗の意識である。榎垣（1954）は関西方言話者が東京のことばを「なかなか自由に使えない」（p.15）要因の1つとして、関西という地域社会からの抵抗が強いことを挙げており、東京から帰った関西人が東京のことばを使うことは「なまいき」に映りやすいとしている。また、ロング（1990b）は関西出身者が東京（関東）に対して抵抗意識を抱いていることを、関西（京阪）地域に移住した関東出身者の実際の経験に基づく意見から提示した。東京に

移住した関西方言話者の言語意識を分析した不二門（1988）は、東京のことばへの評価が移住後の言語使用に影響すると指摘し、たとえ移住したとしても、東京弁に反感を持ち続ければ関西弁を話し続けるという可能性を示した。

このような東京あるいは東京のことばに対する反抗意識の背景として、東京のことばでは言いたいことがうまく表現できない、よそよそしくて情が移らない、といった不満が影響しているとの指摘もなされている（榎垣 1954:16; NHK 大阪弁プロジェクト編 1995:66-69）。

第二の要因として、自身の母方言に対する愛着や自信が他地域と比べて強いことが挙げられる。友定・陣内（2004）は「関西（大阪）のことばが好きか」との質問に対し「好き」「どちらかといえば好き」と回答した割合について、広島・高知・福岡・名古屋・東京が約 50%強にとどまるのに対し、大阪が 90%以上と圧倒的に高いことを示した。こうした大阪出身者の大阪志向度の高さについては荻野（1995）にも言及がある。また、Long（1999）では関西方言話者が他地域の話者と比べて自身の地元の方言を「感じのよい」ものと認識する傾向にあることを、方言認知地図を用いて示している。

なお、ロング（1990a）は大阪在住の他地域出身者における関西方言受容の要因として、大阪への志向はあまり関係せず、むしろ母方言が出ることにに対する「恥ずかしさ」のような否定的なものが要因である可能性を述べている。それに対し関西出身者の場合は、2.1.1 節でも示したように同じ「移住先での母方言使用」という状況に置かれたとしても恥ずかしさなどはなく、出身がどこであるかがわかって一向に構わないタイプが多いとされている（陣内 1996:101-102）。関連して、加藤（1999:132-134）では全国放送のインタビューで母方言が流れた場合に、京都と福岡では「恥ずかしい」などのマイナス評価的な回答が低いことから、両地点では「方言に対する自信のようなものさえ感じられる」とまとめている。これらの事例は、関西出身者が自身の母方言に対して強い自信や誇りを抱いていることを示すものである。

以上、関西方言話者に顕著にみられるという積極的な方言使用の背景には、東京への対抗意識と母方言への強い愛着や自信が背景にあることを従来の研究から整理した。

4. 本章のまとめ

本章では関西方言話者に特徴づけられる言語的特性について、主に方言と共通語の使い分けを対象に、意識・実態の両側面から整理した。その結果、関西方言話者は他地域出身者に比べると、意識・実態ともに方言使用に対する積極性がみられることが明らかとなった（2 節）。また、このような意識や実態が示される背景・要因として、東京あるいは東京のことばに対する対抗意識及び母方言への強い愛着・誇り・自信が関係していることを述べた（3 節）。

このように方言使用に積極的という特徴を有しているとされながらも、一方では共通語化の進行や社会構造の変化に伴う他地域出身者との交流の増加等により、方言以外の変種を使用する状況が存在することもまた事実であろう。この点に鑑み第 3 章では、ここまで

の各章から浮かび上がる問題点を提示したうえで、複数のスタイルを有すると考えられる現代の関西若年層のスタイル選択、ならびに運用の在り方の解明に向けた本研究が取り組むべき諸課題について、調査の概要と合わせて述べることにしたい。

第3章 本研究の目的と調査の概要

本章では第1章及び第2章で概観した内容を踏まえ、そこから示される問題のありかと、それらに対する本研究の課題を提示する。加えて、課題を明らかにするために本研究がとるべき調査方法と扱うべき調査対象について検討したのち、実際に行った調査の概要について述べる。また、本研究で用いる各種用語・概念ならびにデータの文字化方法についても合わせて説明する。

1. はじめに

本章では、本研究の目的と調査の概要について述べる。はじめに 2 節では、第 1 章ならびに第 2 章で概観した内容から得られた問題のありかを整理し、それらを踏まえた本研究の目的を提示する。続く 3 節では研究目的に沿うための調査のデザインとして、調査方法並びに調査対象の検討を行い、4 節ではそれに基づき実施した調査の概要について述べる。5 節では本論で使用する用語・概念の整理を行い、最後に 6 節で談話データの文字化の方法について述べる。

2. 問題のありかと本研究の目的

第 1 章ではスタイルに関するこれまでの研究の流れを国内外のものに分けて概観した。また同時に、多言語・多変種化の渦中にある日本の現代社会における人々とそのスタイル選択・運用の在り方との関係性について、複数の言語的レパートリーを習得する環境にある移住者や、個々人のスタイルの運用能力のメカニズムに注目した研究を中心に整理を試みた。また第 2 章では、スタイルの選択と運用に携わる現代社会の構成員の一端として関西方言話者に焦点を置き、その言語的な特性として従来から指摘されてきた点を意識研究及び運用研究の両側面から整理した。また、その特性が育まれた要因として捉えられてきた点も合わせて述べた。

各章で概観してきた内容から、問題のありかとして以下の点を指摘する。

- i) 国内研究においては、一個人が様々に有する言語的レパートリーたるスタイルがどのような場面でどのように選択され、どのような形として実現されるのかを実証的に示したものがまだ蓄積途中の段階にある（第 1 章 2.2 節）。
- ii) 特に複数のスタイルに接触する機会が多いと考えられる移住者を対象とした研究では、移住前後のことばの変容過程などの通時的側面への関心が大半であり、移住者が自身の属するコミュニティ内でどのようなスタイルをどのように運用するかといった共時的側面の追究はあまりなされてこなかった（第 1 章 3.2 節）。
- iii) 現代の地域社会では学校教育やメディア等の影響により、特に若年層を中心に、地域方言スタイルだけでなく標準語スタイルもが潜在的なレパートリーとして保有されていると考えられる。しかし関西方言話者を対象としたこれまでの研究では、方言スタイルのモノリンガルの使用に注目が集まる傾向にあり、潜在的な標準語スタイルの運用という観点から捉えたものが少ない（第 2 章 2.1・2.2 節）。
- iv) 出身の異なる友人と親しくなることは現代においてさほど珍しくなく、今後も盛んになっていくと予想されるが、ことばの場面別の切換えや使い分けを扱った研究では、母方言話者以外の話者とのカジュアル場面（友人場面）を対象とする調査・分析があまり進んでいない（第 2 章 2.3 節）。

上記の問題点に対し、本研究では以下の課題を明らかにすることを目的とする。各課題番号 I) ～IV) は上記 i) ～iv) にそれぞれ対応する。

- I) 一個人のなかに様々あるスタイルは、実際にどのような形で運用されているのか。具体的には、どのような言語項目が場面間の切換えの対象となるのか。切換えに与りやすい、あるいは与りにくい項目はどのようなものか。
- II) 移住者は所属するコミュニティ内でどのようにスタイルを活用・選択しているか。ことばの運用に移住者としての特徴は現れるか。それはどのようなものか。
- III-1) 方言と標準語の両スタイルを有していると考えられる関西若年層は、いずれのスタイルでも用いられうる環境に身を置いた際に、どのような言語運用の在り方を選択・実行するのか。特に、潜在的に保有されているスタイル（標準語スタイル）は実際にはどのように実現されるのか。
- III-2) 従来の多言語・多変種話者の運用モデルに対し、現代の関西若年層のスタイル運用のメカニズムはどのようにモデル化できるか。
- IV) 関西若年層は他地域出身の友人（母方言以外の話者）に対し、どのような言語運用を行うか。それは地元関西の友人に対する運用とどのように異なるか。

次節以降では、上掲の課題を明らかにするための調査方法ならびに調査対象についてそれぞれ検討したのち、それらに基づいて実施した具体的な調査の概要について述べることにする。

3. 調査方法・対象の検討

本節では、前節に提示した課題を明らかにするための調査のデザインとして、どのような調査方法を用いればよいか（3.1 節）、また、どのような話者を調査対象とすべきか（3.2 節）について検討する。

3.1. 調査方法

人々の話すことばが実際の生活のなかでどのように運用されているかを知るためには、当事者にとって可能な限り普段通りの、より自然な状態での運用を観察する必要がある。したがって本研究では、制約事項等を特に設けない自然談話収録の方法をとることが妥当であると考ええる。

2 節で述べた通り、本研究は現代の関西若年層の多くが本来的に有していると思われる方言スタイルと標準語スタイルの運用の在りようを明らかにすることを目的の 1 つとするものである（課題Ⅲ-1）。特に、これまでは方言スタイルの使用を中心としたモノリンガルの運用に目が向けられる傾向にあった関西方言話者が、潜在的に持っているであろう標準語スタイルをどのように実現させるのかという点に本研究の関心がある。それを明らかにするためには、談話収録に際し、関西若年層の持つこの 2 つのスタイルを引き出すための場面設定を検討する必要がある。

そこで本研究では、関西以外の地域出身者を相手とする場面（対他地域出身者場面：以下〔他郷〕）と、同じ関西出身者を相手とする場面（対同郷出身者場面：以下〔同郷〕）の 2

つの場面を設定する。〔他郷〕の対者の設定にあたっては、関西若年層が持つ標準語スタイルの運用を最大限に引き出すうえで、より適切と考えられる相手を話者自身に選定してもらう。また〔同郷〕の対者については、反対に方言スタイルが最大限に現れうると考えられる相手を選定してもらうこととする。調査対象ならびに対者の選定基準については3.2節で詳しく述べる。

また、スタイルを話者自身による能動的なものとして捉えるようになってきた近年の研究動向（第1章2節参照）を考え合わせると、関西若年層のスタイル運用のメカニズムを明らかにするためには実際の談話データの分析に加え、話者本人が自身のスタイル（言語使用）をどのようなものと認識しているかといった意識面も合わせて複合的に検討していく必要があると考えられる。したがって本研究では自然談話の収録に加え、話者の言語意識に関する質問（面接）調査の方法も取り入れることとする。

3.2. 調査対象

続いて本節では、どのような話者を調査対象とすればよいかについて検討する。はじめに本研究の主要な調査対象となる関西若年層の選定基準について述べたのち（3.2.1節）、前節で言及した2つの場面の対者について検討する（3.2.2節）。

3.2.1. 主要な調査対象（関西出身若年層）

繰り返しになるが、本研究では現代の関西若年層の潜在的な標準語スタイルの運用の在り方を通して、モノリンガル的に捉えられがちであった関西方言話者の言語運用の新たな側面を示すことを目的の1つとしている。この点を明らかにするためには先にも触れた通り、標準語スタイルの表出がもっとも起こりにくいと考えられる場面と、もっとも起こりやすいと考えられる場面の二場面（あるいは、方言スタイルの表出がもっとも起こりやすい/起こりにくい場面）を設定し、それぞれの使用実態を比較する必要がある。

標準語スタイルがもっとも起こりにくい（方言スタイルが起こりやすい）場面としては、出身地である関西の特に成育した地元地域において、地元の友人を相手にした場合が妥当と考えられる。一方の標準語スタイルがもっとも起こりやすい（方言スタイルが起こりにくい）場面については、関西以外の他地域のうち経済・文化・威信の面で特に影響力の強い首都圏地域において、関西以外の地域（特に首都圏）出身の友人を相手にした場合が有力であろう。これら2つの場面を合わせ持つ話者として本研究では、「首都圏地域に移住した関西若年層」を主要な調査対象として設定する。

なお現代に入り、関西地域在住でありながら首都圏出身者と話す場面は決して珍しいことではなくなっているが、本研究がこうした関西在住者を対象としなかったのは次のような理由による。関西在住者の場合、共通語話者（見知らぬ人）と話す際の場所が東京であれ地元であれ、方言と共通語の切り換えは基本的には行われたいとの結果が先行研究からも示されており（国立国語研究所 1990; 田原 2006）、潜在的な標準語スタイルの運用能力

を十分に引き出せない可能性が否めない。関西在住者ではなく首都圏移住者を対象とするのは、このような事態を防ぐためである。

また本研究では移住者のなかでも、首都圏在住歴が比較的短い話者を対象とする。首都圏在住期間が長期に及ぶ話者の場合、標準語スタイルを知識として持つ段階から活用可能になる段階への移行（「スキルの自動化」：阿部 2006:25）がある程度進行・完了した、いわば二言語（方言）使用者となっている可能性が高く、本研究の関心事である「潜在的な」能力による運用可能性を正確に測ることが難しいと思われるためである。これまで知識としてしか保有されてこなかった標準語スタイルが実際の場面のなかでどのように運用されるのかを明らかにするため、本研究では移住年数が短く、かつ標準語スタイルを有する友人を持つ段階に入ってきたと思われる大学2～3年生を調査対象として選定する。

ここまで、首都圏に移住した関西若年層を対象とする点、ならびにその理由について述べた。関西以外の地域でも使用する言語形式が変わらない、あるいは移住後も方言形式が残る傾向にあるとする従来の指摘が、現在の関西若年層にどの程度当てはまるのかという点を検証するうえでも、「移住を経験した関西方言話者」を研究対象とする意義はあるものとする。なお以後、上述の主要な研究対象（首都圏に移住した関西若年層）について言及する際は、「**関西出身若年層**」と称する場合がある。

3.2.2. 各場面の対者

続いて本節では〔他郷〕と〔同郷〕の各場面において、どのような話者を対者とすべきかについて検討を行う。3.1節で触れたように〔他郷〕は関西出身若年層の標準語スタイルの表出を期待して設けた場面であるため、その対者には、

- (1) 日常的に標準語の運用がみられる首都圏での生活のなかで親しくなり、
- (2) 標準語スタイルを有している者

という条件を付けたうえで関西出身若年層本人らに選定してもらうこととした。(2)を加えたのは、仮に(1)を満たしていても、たとえば同じ関西出身者であった場合に標準語スタイルを用いない可能性があることを危惧したためである。

なお、これらの条件に当てはまる話者としては、話し手（関西出身若年層）が当該話者（対者）のことばを標準語スタイルとして認識しているかどうかという点を重視した。話し手にとって「標準語スタイルである」と思える対者であれば、その出身地がどこであるかに関わらず彼らの標準語スタイルを引き出すことは可能であると考えられる。したがって(2)の「標準語スタイル」を思わせる要素として、たとえば東京式のアクセント（京阪式ではないことがわかるアクセント）を保有しているなど、関西出身若年層本人らにとっての「標準語スタイル」が実現されている相手を対者として選定してくるよう依頼した。後掲表 3-2 の〔他郷〕の対者の欄に静岡県出身者（Oz）が含まれているのは、この点によるものである。

なお調査時、Ozを対者とする関西出身若年層ZはOzの出身地である静岡県について、

首都圏を構成する地域の1つとして認識していた。この点からもZがOzを標準語スタイル保有者として捉えていたことがうかがえる。また、結果論ではあるがOz本人も自身のことばを首都圏のことば、あるいは標準語であると内省しており、実際の談話データからもその他の首都圏出身者(Ox、Oy)の言語使用と大きな違いは確認されなかったことから、本研究ではOzの談話データを分析対象に含めることとする。

一方の「同郷」に関しては、反対に方言スタイルの表出が期待される場面であるため、その対者として地元(関西)の親しい友人を選定してもらう。ここでも対者が関西出身若年層本人らにとっての「(関西)方言スタイル」保有者であれば、彼らの方言スタイルを引き出すことは可能であると考え、関西圏の出身であることを基本的な条件とする以外に対者の出身地に関して制限を設ける等はしないこととする。

なお、次節に示すように本研究が対象とする話者は対者も含めすべて女性であるが、これは可能な限り「方言スタイルが出にくい(切換えが生じやすい)」場面を設定するためである。すなわち、従来から男性と比べると切換える傾向が強い(国立国語研究所1990ほか)と指摘されてきた女性のみを対象とすることで、潜在的な標準語スタイルの在り方をより捉えやすくするという狙いのもとに設定した。また同時に、変数をできるだけ抑えるという目的もある。

変数を抑えるという点でさらにいえば、調査協力者は各場面の対者を含め、いずれも同一の大学に在籍している者を対象としている。移住後あるいは進学先の環境の違いによってことばの運用に違いが生じる可能性を防ぐためである。

4. 調査の概要

続いて本節では3節で検討した内容を踏まえ、実際に行った調査の概要について述べる。まずは調査の具体的な内容について、協力者確保に至るまでの経緯とともに示す(4.1節)。続いて調査対象とする関西出身若年層及び各場面の対者の話者情報と、収録したデータの談話情報を提示する(4.2節)。

4.1. 調査内容

自然談話収録調査では、あらかじめ調査協力者全員に同意書を渡し、調査への同意を得たうえで実施した。各場面それぞれ約1時間ずつ収録し、その間調査者(筆者)は退出した。談話を極力自然な状態に保つため、会話促進のための話題カードの提示等はせず、協力者には普段通り自由に話してもらうよう依頼した。また、携帯電話やスマートフォンの操作に対する制限等も特には行わなかった。

収録調査の実施後、質問調査として話者の言語意識に関する質問ならびにフェイス情報の聞き取りを、面接の形で談話協力者全員に実施した。言語意識調査に関しては、分析の中心となる関西出身若年層に対し、ことばの実際の運用と話者の言語意識にどのような相関関係がみられるかを明らかにすることを目的に、当該場面における自身のことばに対す

る認識やそのことばの使用動機等を中心に質問した。

また、〔他郷〕と〔同郷〕の対者に対しては、関西出身若年層本人の言語意識との異同を確認するため、相手（関西出身若年層）のことばに対する印象や移住前後の変化¹⁾について尋ねた。これらの調査の具体的な質問内容については、以下表 3-1 に示す通りである。

表 3-1 質問内容

場面	回答者	質問内容
〔他郷〕	関西出身若年層	(1) 先ほどの友人（他郷の友人）との会話についてお伺いします。あなたの話していたことばは、全体的にみて方言的（関西弁的）だったと思いますか、それとも標準語的（東京のことば的）だったと思いますか。
		(2) 先ほどの友人に対することばは、同郷の友人に対することばと比べて何か違いがありますか。（あれば）どのような違いがありますか。なぜ違いがあると思いますか。
	対者	(1) 先ほどの会話において、相手の話すことばにどのような印象を受けましたか。（とても方言的・ときどき方言が入っている・全然方言的でない、など）
〔同郷〕	関西出身若年層	(1) 先ほどの友人（同郷の友人）との会話についてお伺いします。あなたの話していたことばは、全体的にみて方言的（関西弁的）だったと思いますか、それとも標準語的（東京のことば的）だったと思いますか。
		(2) 先ほどの友人に対することばは、他郷の友人に対することばと比べて何か違いがありますか。（あれば）どのような違いがありますか。なぜ違いがあると思いますか。
	対者	(1) 先ほどの会話において、相手の話すことばにどのような印象を受けましたか。（とても標準語的・ときどき標準語が入っている・全然標準語的でない、など）
		(2) 地元でいたときに比べ、相手のことばは変わったと思いますか。どのように変わりましたか。

なお、これらの言語意識調査の詳細な結果に関しては、各話者のスタイル運用のメカニズムについて考察する第 8 章において改めて言及することとしたい。

4.2. 話者情報・談話情報

次に本節では、調査対象の話者情報ならびに収録した各データの談話情報を提示する。それに先立ち、ここで調査協力者を得るまでの経緯について簡単に触れておく。まず首都圏にある A 大学において、教員や全国各地域の出身者で構成されている学生寮の管理者に依頼し、協力者収集の旨ならびに筆者の連絡先等を記載したポスターやチラシを掲示してもらった。しかしこの方法では協力者を確保することができなかったため、次に教員に依頼し、授業内連絡等で調査の件を学生に通達してもらった。その結果、後掲の話者を含む複数の協力者を得ることができた。

続いて調査に参加した各協力者の話者情報に移る。本研究は異なる二場面の言語運用を

1) 移住による変容に関わる内容については、関西出身若年層の移住前の言語状況を知る〔同郷〕の対者のみに尋ねた。

対照するものであるため、主要な研究対象である関西出身若年層 1 名につき 2 種類の談話を収録することになる。したがって本研究で実施した調査の協力者は、①関西出身若年層（主要な研究対象）、②〔他郷〕における対者、③〔同郷〕における対者に分けられる。各協力者の情報を以下の表 3-2 に示す。表中の X・Y・Z が上記①、Ox・Oy・Oz が②、Kx・Ky・Kz が③にあたる話者である²⁾。

表 3-2 話者情報

	話者 ID	性別	調査時 年齢	職業	出身地	外住歴
①	X	女性	21	大学生	和歌山県有田市	18-現在:東京都
	Y	女性	20	大学生	大阪府堺市	18-現在:東京都
	Z	女性	21	大学生	大阪府池田市	12-18:箕面市、18-現在:東京都
②	Ox	女性	21	大学生	東京都杉並区	なし
	Oy	女性	20	大学生	神奈川県川崎市	0-2:高知県、2-4:東京都
	Oz	女性	20	大学生	静岡県三島市	18-現在:東京都
③	Kx	女性	21	大学生	和歌山県有田市	18-現在:大阪府
	Ky	女性	20	大学生	大阪府堺市	0-3:大阪市
	Kz	女性	21	大学生	兵庫県宝塚市	なし

また、①～③の組み合わせによって得られた各話者 2 談話ずつの、計 6 談話の談話情報を次掲表 3-3 に示す。

表 3-3 談話情報

場面	談話 ID	調査協力者	協力者間の関係	調査日時	調査場所	合計録音時間	文字化時間
〔他郷〕	D01	X-Ox	大学からの友人	20160629	東京(空き教室)	64 分 14 秒	62 分 03 秒
	D02	Y-Oy	大学からの友人	20160702	東京(空き教室)	61 分 05 秒	56 分 41 秒
	D03	Z-Oz	大学からの友人	20180124	東京(空き教室)	65 分 09 秒	62 分 59 秒
〔同郷〕	DK1	X-Kx	幼なじみ	20170210	東京(空き教室)	63 分 21 秒	61 分 19 秒
	DK2	Y-Ky	高校からの友人	20170331	大阪(喫茶店)	62 分 38 秒	60 分 30 秒
	DK3	Z-Kz	小学校からの友人	20180223	大阪(喫茶店)	60 分 41 秒	59 分 33 秒

調査は 2016 年 6 月から 2018 年 3 月にかけて実施した。調査場所は〔他郷〕ではいずれも東京都内に位置する某大学内の空き教室を使用した。〔同郷〕では DK1 のみ東京の空き教室となっているが、これは Kx が東京にいる X のもとへ遊びに来た際に協力してもらった

2) 〔他郷〕の話者 ID は“other area”の頭文字 O と X～Z を組み合わせたものである。〔同郷〕の話者 ID は X～Z と同じ地域出身という意味で「関西 (Kansai)」の頭文字 K と X～Z を組み合わせている。

めである。空き教室はこの両名以外が使用しないようにし、外部からの影響が収録に及ばないように考慮した。結果として、東京という場所による影響がデータから感じられるようなことは特になかった。

DK2 及び DK3 はいずれも各話者の成育地にある行きつけの店で収録した。喫茶店での収録は環境としては空き教室とは異なるが、人の出入りの多くない時間帯・場所を選ぶなど周囲の環境が影響しないよう工夫した。また、店員などの第三者の介入を防ぐため、飲食物の注文や食事等はすべて済ませたうえで収録を行った。

ここまで、調査の概要について述べた。次節及び 6 節では、本論文で使用する概念や用語、ならびにデータの文字化方法等について説明する。

5. 各種用語・概念に対する本研究の立場

本節では、本研究で使用する各種用語ならびに諸概念について整理する。まず 5.1 節では、本研究の主要な問題意識に関わる「標準語」やそれに対応する「方言」などの用語に関して、先行研究を踏まえつつ、今一度本研究の立場を明らかにしておく。続く 5.2 節では、第 1 章にて概観したスタイル研究の潮流を踏まえ、「スタイル」をめぐる諸概念に対する本研究の捉え方を述べる。

5.1. 「方言」と「標準語」

本節では場面間の言語運用の異同を観察するうえで必要となる、言語変種に関わる用語について規定しておく。具体的には「方言」や「標準語」などの言語体系、及びそれらの体系を構成する「方言形」や「標準語形」などの言語要素を指し示す用語について整理する。これらの用語や概念は高木（2006）に詳細がまとめられており、本研究でもそこに挙げられている規定に概ね従うものとする。次頁の表 3-4 は高木（2006:14-16）で述べられている用語をまとめ直したものである。表は言語体系として「方言」と「標準語」があり、前者を構成する要素として「方言形」と「共通形」、後者を構成する要素として「共通形」「標準語形」「東京語形」が含まれることを示している。

表 3-4 体系・要素における各用語の定義

体系		要素	
方言	地域的差異のある言語要素を含む言語変種	方言形	地域差のある言語要素 例) 確認要求形式「ヤン」、間投助詞「ナ」、副詞「ハンナリ」
		共通形	地域差のない言語要素のうち、対応する方言形がないもの 例) 名詞「山」「鳥」
標準語	東京で話されていることばを基盤とし、全国共通の言語要素も含む言語変種	標準語形	地域差のない言語要素のうち、対応する方言形があるもの 例) 確認要求形式「じゃない」、間投助詞「ね」
		東京語形	標準語の要素のうち、文体的に低いもの 例) 確認要求形式「ジャン」、間投助詞「サ」

高木（2006:14-16）をもとに作成

ここで、「標準語」という用語を用いることについて説明を加える。高木（2006）は「標準語」の位置づけについて、時代を経るに従って以下のようなステップで変化してきたことを指摘している。

- a) 近代国家確立に伴う言語面の統一を目的とした、書きことばとしての使用。
- b) 徴兵・動員・疎開・出稼ぎ等に伴う他地域出身者との直接的接触による、あらたまった場面での話しことばとしての使用。
- c) 地域社会の構成員の多様化による、「よそもの」を相手としたカジュアルな要素も含み込んだ話しことばとしての使用。

a)b)のように従来、標準語は規範的な言語であり文体的価値の高いものと捉えられてきた。したがって地域社会における変種の使い分けを考える際、標準語はフォーマルなスタイルで、方言はカジュアルなスタイルで用いられる、というスタイルを軸とした考え方が提示されてきた（真田 1993:33-35、真田 1996:5-10）。しかし近年、c)のように社会構造やライフスタイルの変化に伴い、他地域出身者とのくだけた場面での話しことばとしての性格も含み込むようになったことで、これまで検討されてこなかった「スタイルの低い標準語（高木 2006:13）」の存在を視野に入れる必要が生じてきている。

以上の経緯から、高木（2006）では標準語から文体的価値の高いものとしての制限を除き、カジュアルな場面でも用いられる要素を含む場合にも「標準語」のラベルを用いている。カジュアル場面における言語運用の実態を捉える本研究もこの立場に立ち、「方言」と対立する体系としての「標準語」、「方言形」と対立する要素（形式）としての「標準語形」という用語を用いることとする。なお先行研究のなかには本研究における「標準語」とおおよそ同義のものとして「共通語」という用語を用いているものが多いが、以後引用する際は混乱を避けるためすべて「標準語」に統一する。

5.2. 「スタイル」をめぐる諸概念

続いて、第 1 章で示したスタイル研究の流れを踏まえ、本研究における「スタイル」に

関する諸概念について見解を述べておく。本研究では基本的に、日本語を対象としたこれまでのスタイル研究における定義に則り、スタイルを「個人が一言語内に有する、様々な場面に応じて使い分けることばのレパートリー」と定義する。その様々あることばのレパートリーのうち、本研究が議論の対象として位置づけるのは、方言ないし標準語といった地域変種的要素の反映されたものである。すなわち、各種言語項目の（関西）方言形を基調とした「方言スタイル」及び非方言形（標準語形、東京語形）を基調とした「標準語スタイル」に焦点を絞ったうえで、それらの運用の在り方を探ることを研究の目的とする。このようにスタイルを限定したのは、社会構造の変革等に伴い複数の変種を保有する地域構成員が増えつつあるなか、特に方言のモノリンガルの運用傾向が強いとされる関西出身者の運用の実態をみるうえで適した尺度であると考えたことによる（第2章参照）。

また、本研究の議論の中心を担う「スタイル切換え」という事象については、次のように考える。宇佐美（2015）はこれまでの日本語におけるスタイル研究の基本的特性として、スタイルを「ある場面で使用されることば全体を総称して言う場合が多い」（p.9）と指摘している。先に述べた「一個人が場面等に応じて使い分けるもの」というスタイルの定義も、スタイルが個々の形式のみを指すのではなく、それらを含む包括的な概念として捉えられていることを示している。これらの点を踏まえると、「スタイル切換え」は一個人が様々な有するスタイル（＝ことば全体）を、相手や状況、目的等の場面によって切換えるという行動そのものであるとの解釈が可能である。

以上を踏まえ本研究では、次に示す例（3）のように相手の属性（出身地）を軸とした場面間のスタイルの異なりを「スタイル切換え」と捉えることとする。下記（3）は同一話者が発したものとし、以下傍線部分が方言的要素を、二重傍線部分が非方言（標準語/東京語）的要素を表す。

（3）本研究における「スタイル切換え」の例

〔同郷〕昨日な、そこでどえらい事故あつてん。 ⇒ 方言スタイル

〔他郷〕昨日ね、そこですごい事故があったの。 ⇒ 標準語スタイル

上記の〔同郷〕における下線部の各形式は関西方言的要素であるため、この例に限れば、同場面は方言形を基調とした方言スタイルが選択されていることになる。対する〔他郷〕は下線部がそれぞれ非方言的要素を指すことから、これらを基調とした標準語スタイルによって実現されていることを示す。このように本研究では、個々の言語要素の使われ方に基づいてそれぞれの場面におけるスタイルを判断している。当該発話がある特定のスタイル（すなわち「ことば全体」）であるかどうかは、そのスタイルを特徴づけている言語項目（スタイルマーカ（渋谷 2008a:18））が何であるか、それらにどのような共通特性があるか（方言形か非方言形かなど）によって判断する必要がある。こうした理由により、本論では個々の言語要素の分析に主軸を置いたうえで、スタイル及びスタイル切換えを論じることとする。

また本研究では、上述の「スタイル切換え」と「スタイルシフト」を区別する立場をと

る。次例は本研究におけるスタイルシフトの例である。

(4) 本研究における「スタイルシフト（移行）」の例

〔他郷〕昨日ね、そこですごい事故あってん。

(4) は方言的要素と非方言的要素が 1 つの場面のなかで併用されている点で (3) と異なる。このように同一場面において性質の異なる形式が併用される場面内の切換え事象について、本研究では「スタイルの移行」あるいは「シフト」と称することとする。

なお「スピーチレベルシフト」といった表現は、主にデスマス体及び非デスマス体の使用等を対象とした「同一相手との同一会話内で、一時的にシフトしたり、元に戻ったりする現象」を扱う研究において、「全体的なスタイル」の切換えと区別して用いられる術語とされる（宇佐美 2015:10）。本研究はデスマス体の使用・不使用にみるようなフォーマル度を捉えるものではないが、異なる要素の一時的な出入りに着目しているという点では、(4) に似たような方言形・非方言形という異なる要素の併用もまた「スピーチレベルシフト」に類する事象といえるだろう。したがって本研究では「シフト」ないし「移行」という術語を適用することとした。

一方、スタイルという事象そのものをどのように捉えるかという点、すなわち能動的であるか受動的であるかといった部分（第 1 章 2 節参照）に関しては、第 4 章以降の各論で示す実際のデータとその分析結果を踏まえて議論すべきものと思われる。本研究が分析対象とする関西若年層のスタイル及びその運用の在り方は、彼らが日本語母語話者である以上は井出（2006）の言う「わきまえ」の概念が適用されうる。あるいは話者によっては自己のアイデンティティの表出を目的とした能動的とも取れる用い方を行う可能性もあろう。この点に関してはいずれの立場も踏まえたうえで、第 8 章にて詳細を議論する。

6. 文字化の方法

最後に本節では、本論文で扱う談話データの文字化の方法として、表記と文節の切り出し方（6.1 節）ならびにデータを示す際に用いる具体的な記号（6.2 節）について整理しておく。文字化については国立国語研究所（1995; 2002）及び工藤（2004）をもとにまとめられている高木（2006）を参照した。

6.1. 表記と文節の切り出し方

表記は漢字・かな混じりを基本とする。外来語にはカタカナ表記を用い、数字は原則としてアラビア数字を用いる。ただし「二束三文」や「千里の道も一歩から」などのような熟語や慣用表現に含まれる数字は漢数字とする。漢字・かな・記号は全角、英数字は半角とする。

本研究では音声の細かな違いについては分析の対象としないため、音声記号は用いない。長音に関しては、副詞「ああ」「そう」「こう」「どう」、動詞「言う」「いう」、方言形容詞「ええ（良い）」などは「あ・い・う・え・お」を添え書きする。「あー」「へー」「んー」

といったあいづちやフィラー、ワ行五段動詞のウ音便形や形容詞の音便形などに現れる長音については長音付「ー」で表記する。長音付はその長さに応じておおよその拍数分「一」を付加する。また、助詞の「は」「を」「へ」は読みやすさを考慮して「は」「を」「へ」と表記する。

発話は次例のように行頭に発話番号と話者 ID を付し、発話との間に全角コロン「:」を挟んで区切る。そして、どの話者のどの場面の発話であったかを発話末の〈 〉内に改めて示す。

(5) DO1 で 100 発話目に位置する X の発話:「100X: 発話内容 〈X [他郷]〉」

各発話は談話協力者のターンごとに改行するが、あいづちなど話し手の発話を遮らない程度の聞き手の発話は改行せず、() 内に聞き手の話者 ID とともに記したうえで、話し手の発話に埋め込む形をとる。ただし、質問や確認に対する応答として用いられる「うん」「そう」などは独立した発話と捉え、改行して示す。

発話は基本的に句読点を適宜用いた一続きの形で提示するが、分析方法の都合等により第 5 章及び第 6 章では文節ごとの分かち書きとする。分かち書きの手順として、文節と文節の間に全角 1 字分の空白をとる。空白による区切りは以下 (6) ~ (8) の箇所に設け、それ以外の部分はあいづちの繰り返し(「うんうん」「そうそう」など)を含め区切らないものとする。

(6) 主語・主語の前後、述語の前後

(7) 修飾成分、被修飾成分、終止成分、引用成分、接続成分、成立成分、独立成分の前後

(8) 形式名詞の前後

6.2. 談話データに用いる記号

既述の通り、談話データの文字化は一部の章を除き、原則として句読点による区切りを入れた一続きの示し方をとる。データを示す際に用いる諸記号は以下の通りである。

- 、 文中でポーズのある箇所に付ける。
- 。 発話文末につける。
- ? 上昇イントネーションと判断した箇所に付す。
- … 語尾が言いよどむなどして、文が途中で終了した場合に付す。
- # 聞き取り不能であった部分を示す。推測される拍数分だけ用いる。
- () 発話中に相手があいづちを打った場合に () に入れて示す。その際、あいづちした相手の ID を共に付す。
- ‘ ’ 複数の読み方があるものを漢字で表す場合や、地名(市町村、山、川、場所名)などで読み方が難しい場合、必要と思われる場合には読み方をひらがなで‘ ’に入れて示す。

- 「 」 発話中に、話者以外の人物の発話が引用された場合、その引用部分を「 」でくくる。
- 『 』 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの（漢字の読み方を説明する箇所や本の題名など）を『 』でくくる。
- 〈 〉 固有名詞など、話者のプライバシーに関わる箇所は〈 〉でくくり、〈人名〉〈学校名〉などのようにして表す。
- （＋） 文が途中で終わっているが、文脈から話者の意図する発話が分かり、補う必要がある場合に（＋）に示す。
- { } 笑いながら発話したものや、笑いなどの非言語行動は{ }のなかに{笑いながら}{笑い}{ささやくように}{息を吸いながら}{咳}などのように説明を付す。
- ／間／ 話の流れのなかで「間」が感じられた箇所に／間／あるいは／少し間／と表記する。基本的には沈黙の後に誰が発話したのかが分かるように沈黙を破る発話の冒頭に示し、沈黙自体が何かを意味しているような場合は一発話文として扱い、独立した行に示す。
- 《 》 方言形や音韻変化形、有声音化形など、標準語訳が必要な場合には《 》に示す。意味の説明や意識なども同記号内に記す。
- 【 】 文脈を理解するうえで必要な情報があれば【 】に示す。

第Ⅱ部 本論：関西若年層のスタイル運用の実態

第Ⅱ部では各論として、関西出身若年層 X・Y・Z が出身地のそれぞれに異なる対者に対しどのようにスタイルを実践するのかについて、複数の言語レベルに分けて考察する。

はじめに第4章では語彙レベル及び文法レベルの運用の実態を明らかにし、続く第5章では音声レベルとしてアクセント項目を対象に考察する。第6章及び第7章ではより大きな単位として談話レベルの運用に着目し、前者では発話の引用方法について、後者では談話の展開方法について取り上げる。

第4章 語彙・文法項目にみる運用の実態

本章では関西出身若年層3名による場面間あるいは場面内のスタイル運用の実態について、語彙及び文法レベルの項目を対象に分析・考察を行う。

1. はじめに

本章では首都圏に移住した関西出身若年層 X・Y・Z のカジュアル談話におけることばの運用の実態について、語彙及び文法項目を対象に分析・考察する。まず2節で全項目の使用結果から場面間の運用の全体像を提示したのち、主に以下の観点に沿って議論を進めることとしたい。

A) 個々の話者はどのような切換え行動を行っているか (3 節)

B) それぞれの場面でどのような運用が行われているか (4 節)

A) は、話者一人ひとりの切換えの全体像ならびにそこから得られる切換えのタイプ、全話者に共通する傾向など、場面間のスタイル運用の詳細を把握するために設けた観点である。B) は、「他郷」と「同郷」のそれぞれの場面における対者の運用と比較することで、移住者に特有の運用の特徴を導き出すことを目的とするものである。

扱う語彙項目・文法項目に関しては先行研究（高木 2006; 細谷 2004; 船木 2011 ほか）ならびに本調査で得た談話データの観察をもとに、関西方言と標準語で対になる形を持ち、かつ量的にも分析に耐えうると判断したものを選択した。項目内容の詳細については各節で述べる。

本章の構成は次の通りである。まず2節で語彙・文法各項目の分析結果を提示し、その結果をもとに3節にて話者別の切換えのタイプ及び共通点を明らかにする。4節では個々の場面ごとの運用の詳細を考察し、5節でまとめを行う。

2. 各項目の分析結果

はじめに2.1節で語彙項目の分析結果を示し、続く2.2節で文法項目について述べる。以後両項目ともに、関西方言由来の形式については「方言形」、標準語/東京方言由来の形式については「非方言形」と称する。

2.1. 語彙項目

本節で扱う語彙項目は、基本的には高木（2006:163-164）に挙げられている関西方言形の語彙項目リストから X・Y・Z 全員に使用が認められたもの、及びそれらに対応する非方言形（標準語形）を1対とした計7対14語（アカン/だめ、ホンマ/本当、エー/いい、チャウ/違う、オル（イテル）/いる、メッチャ/すごい（すごく）、ヨー/よく）を対象とする。

各語の話者別・場面別の使用実数を切換えの明瞭な順にまとめて示したものが、次頁表4-1である。なお、他者ないし自身の過去の発話等を引用したものについては分析から除外した。

表 4-1 語彙項目の話者別・場面別出現数一覧

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
アカン(※1)	－	2	－	8	2	7
だめ	2	－	5	－	2	－
ホンマ(※2)	－	15	2	26	4	6
本当	10	－	30	2	22	－
オル/イテル	－	2	－	18	3	7
いる	27	－	30	1	17	3
メッチャ/ムッチャ	18	30	6	25	22	7
すごい/すごく	15	1	25	3	1	3
チャウ	－	－	－	2	7	3
違う	6	6	11	4	6	3
ヨー	－	－	－	2	－	2
よく	5	1	2	1	1	3
エエ	－	1	－	－	－	－
いい	31	37	45	59	33	26

(※1) 方言形はカタカナで、非方言形(標準語形)はひらがなで表記する。

(※2) 副詞の形(ホンマニ/本当に)も含む。

表全体をみると各項目の使用の在り方は三者三様だが、共通の傾向もみてとれる。たとえば「アカン/だめ」「ホンマ/本当」「オル(イテル)/いる」の3対は、話者によっては一方の場面でしか用いられておらず、比較的明瞭に切換えられている項目といえる。

「メッチャ/すごい(すごく)」は両場面での使用が認められるが、場面によって使用数に偏りがあることから、先の3対ほど明瞭ではないものの、切換えに与りやすい項目といえるだろう。

「チャウ/違う」「ヨー/よく」は話者によって運用にばらつきがみられた項目である。Xは両場面において両項目ともに非方言形のみを用い、Yは〔同郷〕のみ方言形チャウ及びヨーを用いた。Zは「チャウ/違う」に関しては両形式を両場面と同程度用いており、切換えていない様子がうかがえる。一方の「ヨー/よく」はYと同様に〔同郷〕のみ方言形を用いた。

「エエ/いい」に関しては三者とも両場面では非方言形にほぼ一本化しており、切換え項目とはみなしにくいことが明らかとなった。

続いて話者ごとの使用に注目してみると、語によって違いはあるものの、XとYは場面で比較的明瞭に切換えている様子がうかがえる。対するZは〔他郷〕での方言形や〔同郷〕での非方言形など、当該場面での出現が本来的には期待されない形式の使用がいくつ

かの語でみられ、他の二者に比べるとやや変則的な切換え方となっている。

「メッチャ/すごい (すごく)」を例にみると、X の〔同郷〕では「メッチャ」30 例に対して「すごい (すごく)」が 1 例にとどまる一方、〔他郷〕では両形式の使用数にさほど偏りがない。この結果は X が〔他郷〕では「メッチャ」を抑え、代わりに「すごい (すごく)」を用いようとする切換えの仕方が現れているといえる。Y の場合は〔他郷〕では「すごい (すごく)」の使用数が、〔同郷〕では「メッチャ」の使用数が一方を圧倒していることから、Y にとっての両形式は対を成しており、切換えの対象となる項目であると考えられる。

なお「メッチャ」に関しては現在、首都圏地域においても俗語的な表現として浸透しつつあることが指摘されており、実際に〔他郷〕の対者 $O_x \cdot O_y \cdot O_z$ にも使用が確認された。特に O_y と O_z は「メッチャ」を「すごい (すごく)」以上に使用しており、「メッチャ」の浸透率の高さがうかがえる。この点を踏まえると、〔他郷〕で「メッチャ」を抑えようとする X や Y の上述の行動は、『メッチャ』は関西方言形式であり首都圏では用いられない』との意識からくる過剰修正による結果とも解釈できる。

Z に関しては、〔同郷〕では「メッチャ」:「すごい (すごく)」の数が 7:3 であるのに対し、〔他郷〕では 22:1 となっている。前者については数が少ないため解釈が難しいが、後者では明らかに「メッチャ」の使用が優勢であることから、Z は X や Y とは異なり、〔他郷〕であることを理由に「すごい (すごく)」の使用に切換えようとはしていない様子が見えうかがえる。

以上、本節では 7 対 14 語の語彙項目の使用実態を分析し、全体として切換えられやすいにくいと思われる語の検討、ならびに各話者の運用の特徴について述べた。

2.2. 文法項目

続いて本節では文法項目の使用結果についてまとめる。分析の対象とする項目は、断定形式、動詞否定形式、否定疑問形式¹⁾、推量形式、ノダ相当形式、間投助詞、終助詞の計 7 項目である。それぞれの運用の実態を以下各節で順に述べる。なお、語彙項目と同様、発話の引用にあたるものは分析から除外した。

2.2.1. 断定形式

断定形式に関しては、主にダとヤの使用が三者に共通してみられた。また、Y にのみジャの使用が認められた²⁾。各話者の場面ごとの使用数を以下の表 4-2 に示す。

1) 本章では否定疑問の形 (ジャナイ、チャウ/チャ (ウ) ン) ならびにそれに由来する形 (ジャン、ヤン (カ)) を合わせて「否定疑問形式」と呼ぶ。なお、これらの形式及び推量形式 (デショ、ダロ、ヤロ) には確認要求的表現としての用法が存在するが、本章ではあくまでも形態面の運用に注目するため、否定疑問形式と推量形式に分けてラベルを付している。

2) 関西方言におけるジャは話し手のマイナス感情・評価の意を含むモーダルな側面を担う形式であり、ダやヤなどの他の断定形式とは必ずしも等価ではない (上林 2019b 参照)。

表 4-2 断定形式の話者別使用数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
ダ	178	4	183	1	63	3
ヤ	-	70	-	132	50	87
ジャ	-	-	-	1	-	-

X は〔他郷〕では非方言形のダのみを使用し、ヤやジャなどの方言形は用いていない。一方〔同郷〕ではヤが多数を占めるものの、ダの使用もわずかに認められる。ジャに関して X はいずれの場面でも使用していない。

- (1) 679X : なんかさ、普通に大学入って TOEIC 受けるもんダと思ってたんダけど、もうなんかずるずる来て今まで、みたいな。{笑い} 〈X〔他郷〕〉
- (2) 608X : あれ、いつ行ったんやろ。7月‘なながつ’かな。あ、んまヤ《ほんまや＝本当だ》あれヤ。ユニバ行ったときヤ。 〈X〔同郷〕〉
- (3) 746X : なんかこうゆう授業ダった。でも最後の日だけ。 〈X〔同郷〕〉

Y も X と同様に〔他郷〕ではダのみであり、方言形の使用はみられない。一方〔同郷〕では各形式の使用が認められた。もっとも多いのは方言形のヤであり、わずか1例ではあるがジャの使用も観察された ((6) 参照)。

- (4) 007Y : 【アルバイト先が】デパートの直通の、そのデパート、駅直のデパートの中にあるんダよ。んで雰囲気いいし、きれいダし、制服かわいいし、暇そうダったから応募したの。 〈Y〔他郷〕〉
- (5) 372Y : 【Ky の行動をほめながら】いいやつヤな。い、いい人ヤな、ほんまに。ほんまにいい人ヤ。そう、だからそうゆうのが大事よ、人生。 〈Y〔同郷〕〉
- (6) 882Y : 【不満げに】学生には金がないんジャ。 〈Y〔同郷〕〉

対する Z の〔他郷〕は、ダの数が上回っているもののヤも 50 例と一定数みられ、X・Y の運用とは異なる結果をみせている。以下に示すように、〔他郷〕におけるヤは逆接のケド節や原因理由のカラ節のほか、ノダ相当のネンに前接する形で頻出した。

- (7) 118Z : え、なんか広めのところとめっちゃ狭いこと極端ヤから、そうそうそうそう。そヤねん。 〈Z〔他郷〕〉
- (8) 220Z : 逆にあたし、あれ、なんかべちょべちょになるから無理ヤけど、あたしジェットコースター好きヤねんやん。 〈Z〔他郷〕〉

なお次例のように、ケド節やカラ節での出現はダにも確認されたことから、そこにヤとの棲み分けがあるわけではなく、一見するとダとヤの使い分けには規則性がないようにも思える。

- (9) 422Z : で、写真送ってきてもらったのが、なんかまあまあ微妙で。まあまあ微妙だったんダけど。「誰」みたいな。ほんとにこんな顔してなかったんダけど。 〈Z〔他郷〕〉

- (10) 114Z:【フローリングの写真をみせながら】リビングはこんな感じやねんけど、廊下とか全部白【のタイル】ダから、もうお風呂上がりとかめっちゃ寒い。

〈Z〔他郷〕〉

ただし、先に述べたようにヤはノダ相当の方言形式ネン・テンに接続する形で頻出したのに対し、ダがそれらを伴うような例は得られなかった。つまり Z の〔他郷〕でのダとヤは全くの自由変異なのではなく、出現環境による制約によって使用がシフトされていると考えられる。

続いて〔同郷〕での使用をみると、ここでもヤが中心であり、ダの使用は 3 例にとどまった。以下に両形式の実現例を示す。(11) (12) がヤ、(13) がダの例である。

- (11) 598Z: だって Kz さー、どっちかゆうと細身ヤからさ、【体型のことを】ゆったら嫌味になるやん。「なんかちょっと太ってきてー」「それ全然太ってへんやん」とかなるとき、あれヤから。

〈Z〔同郷〕〉

- (12) 726Z: んー、てかもうなんか、じょ、女性化したってのも変ヤけどさ、結構太ってはるやろ、あの子。

〈Z〔同郷〕〉

- (13) 246Z: や、普通にお父さんダからっていうのでべつにこう、何？ちっちゃい頃、247Kz: ま、でも時代もあるんちゃん《あるんじゃないの》。

- 248Z: あ、それもあるな。え、なんかでもなんか、なんてゆうの？【お父さんは】一人っ子ダから割と、なんての《なんていうの》、自分を中心に考えんねやん《考えるんだよ》。

〈Z〔同郷〕〉

ヤに関してはカラ節にもケド節にも現れており、出現環境に偏りはさほどみられないが、対するダの 3 例はいずれもカラ節内においてのみ使用されていた。関連して接続詞ダカラ・ダケドの使用数を確認したところ、前者が 7 例であったのに対し、後者は 1 例もみられなかった。以上から、Z にとってダはカラと結びつきやすい形式として捉えられていると推察される。接続詞ダカラの使用が許容されていることによって、非方言形の使用が期待されない〔同郷〕であってもカラ節であればダが現れやすい、という環境が Z のなかにあるものと考えられる。

2.2.2. 動詞否定形式

動詞否定形式における実現形と使用数は次掲表 4-3 のようになった。

表 4-3 動詞否定形式の話者別使用数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
ナイ	82	－	105	1	53	12
ヘン・ヒン	－	－	－	45	5	20
ヤン	－	6	－	－	－	－
ン	－	36	1	23	4	8

X は〔他郷〕では非方言形ナイのみを用い、方言形は使用していない。

(14) 525X : なんか 2 年ぐらいたたナイと安定しナイんだって。〈X〔他郷〕〉
〔同郷〕では反対に方言形ヤン・ンのみを用い、非方言形の使用はみられなかった。なお、ヤンは和歌山県方言を中心に、主に一段動詞や可能動詞の否定形として用いられる方言形式であり(村内 1962:386, 400-401)、X もヤンを一段動詞・可能動詞のみで用いていた((15) 参照)。一方のンは五段動詞・サ変動詞・カ変動詞で用いられるのが従来型だが、X も例に漏れずこれらの活用型においてンを用いており((16) 参照)、一段や可能など他の活用型での使用はみられなかった。こうした従来の運用を保持する行動に関しては〔同郷〕の対者(Kx)と若干の相違がみられたが、詳細は 4.2 節で述べる。

(15) 378X : え、なんか追加できヤン。〈X〔同郷〕一段〉

(16) 320X : ま、予約せンでもいけるかな。〈X〔同郷〕サ変〉

Y に関しては〔他郷〕での方言形及び〔同郷〕での非方言形が各 1 例ずつにとどまり((17) (19) 参照)、基本的に〔他郷〕では非方言形、〔同郷〕では方言形を用いるという X と同様の運用の仕方であった。なお、近年では大阪をはじめとする近畿中央部の若年層の間でもヤンの使用が多くみられるようになったとの報告がある(鳥谷 2015; 村中 2014 ほか)が、Y からは観察されなかった。

(17) 543Y : 【京都の碁盤の目のような街並みについて】京都ってこんなんじゃん。
縦線、横線じゃん。知らンけど。〈Y〔他郷〕〉

(18) 341Y : 乗れナイしさ、乗ったら進まナイしさ、遅延は遅延じゃん。
〈Y〔他郷〕〉

(19) 930Y : 【給料が】もうあと 1100 (+円) とかさ、1200 (+円) ぐらいのさ、お店があればそこで働くといいかもしれナイ。〈Y〔同郷〕〉

(20) 127Y : なんかさ、仲いいのはかめヘン《構わない》けどさ。〈Y〔同郷〕〉

(21) 133Y : ま、その、ま、公私混同とまではいかンけど、サークルでもこの子、普段の生活でもこの子、全部このメンバーみたいな。〈Y〔同郷〕〉

Z については、各場面で非方言形と方言形の使用が一定数みられた。〔同郷〕では方言形 28 例に対し非方言形 12 例と、X・Y に比べ場面内の切り換えが緩やかである((22) 参照)。

(22) 308Z : や、また返信返ってこナくなってんけどー。昨日の夜の 10 時から。

309Kz : まだやろ。

310Z : え、なんかなー、え、たまにするねん。たんまーに《たまに》、24 時間空けて返してくんねん。「なに、なんなん？」みたいな。「忙しいんやったらほんまに切って」って思うのに、切らヘンねん。謎。

〈Z〔同郷〕〉

非方言形ナイに関して、高木(2006:77-79)は「いる」や「見る」のような一段動詞の 2 拍語ないし 3 拍語ではナイの使用率が高まることを指摘したが、Z の〔同郷〕での非方言形 12 例のうちそれらに該当するものは「(かも) 知れない」の 1 例を除くほかにはみられ

ず、むしろナイが接続しにくいとされる五段動詞による実現が大半を占めた。

なお、その 12 例の出現環境を形態面から分類すると次表のようにまとめられる（分類の基準は高木（2006）表 5-2・表 5-4 に依拠³⁾）。

表 4-4 Z の〔同郷〕における非方言形ナイの形態別使用例（全 12 例）

形態分類	用例	後続形態
基本形 (～ナイ)	(23) 278X：女だらけだから、わから <u>ナイ</u> 。 (24) 202X：もう洗濯物さ、1 回じゃ済ま <u>ナイ</u> ねやんか。 (25) 342X：ほんまに忙しいんか、なんか知ら <u>ナイ</u> けど、 (26) 418X：手上げるってなったらさ、《略》「うーん、どうしよ」とかなるかも知ん <u>ナイ</u> けど。 (27) 352X：でも 3 月になら <u>ナイ</u> と、もう何も動かんけどな。 (28) 664X：もう〈友人〉とかまで遡ら <u>ナイ</u> と【わからない】。 (29) 750X：めっちゃ知ら <u>ナイ</u> 人が【いる】。この人誰？	なし（言い切り） 文末詞相当表現 従属節 1（逆接節） 従属節 1（逆接節） 従属節 2（条件節） 従属節 2（条件節） 連体節（名詞）
-kaQ 形 (～ナカッ-)	(30) 152X：なんか、どこかは聞か <u>ナカッ</u> た。	用言（助動詞）
-ku 形 (～ナク-)	(31) 078X：今日はそんなに描か <u>ナク</u> て、てか今日どこにも行っていないから。 (32) 098X：描か <u>ナク</u> ても、はっきりしてるもん。 (33) 308X：また返信返ってこ <u>ナク</u> なつてんけどー。 (34) 722X：あたしももう、フェイスブック更新し <u>ナク</u> なつたし。	従属節 1（並列節） 従属節 2（譲歩節） 用言（変化） 用言（変化）

高木（2006:71）は関西若年層のナイの使用について、基本形（～ナイ）及び-kaQ 形（～ナカッ-）での出現率が 1 割以下とン・ヘンに比べ圧倒的に低く、反対に-ku 形（～ナク-）としての出現は全体の 4 割と比較的多数を占めるとした。これはつまり、関西若年層の間でナイが使用される場合には「～ナク-」の形として実現されることが多いことを意味している。しかし表 4-4 によると、Z の〔同郷〕での非方言形ナイは基本形での出現が 7 例と最も多く、-ku 形は次点の 4 例であった。この結果から Z はナイを-ku 形としてのみならず、従来の関西若年層の使用にはあまり現れなかった基本形としても、比較的頻回に使用していることがわかる。

3) 形態分類における各形式は以下のように定義される（高木 2006:68）。

基本形：いわゆる終止形及び終止形と同形のもの。

-kaQ 形：過去表現「～ナカッ-タ」や仮定表現「～ナカッ-タラ」など「カッ」という形態を持つ活用形のこと。

-ku 形：「～ナク-テ」「～ナク-ナル」など「ク」という形態を持つ活用形のこと。

また、後続形態におけるそれぞれの説明は以下の通り（高木 2006:74-75）。

なし（言い切り）：主節末で、文末詞などが後続しない言い切りの形。

文末詞相当表現：主節末で、文末詞またはそれに相当する表現。

用言：助動詞や変化構文を作る「～ナル」など。

従属節 1：理由・逆接の副詞節や並列節など、従属度が相対的に低いもの。

従属節 2：条件節や譲歩節、付帯状況の副詞節、テ形理由節など、従属度が相対的に高いもの。

連体節：名詞・形式名詞。

また後続形態に関して、従来では言い切りや文末詞、用言、従属節 1 が後続する際にはもっぱらン・ヘンが用いられ、ナイの使用率は非常に低いという結果が示されている（高木 2006:75 図 5-3⁴⁾）。しかし Z のナイに関しては、12 例のうち 8 例（表 4-4 ゴシック箇所参照）がこうした後続しづらい要素を伴って実現していた。

このように動詞の活用型や形態分類、後続形態などの複数の視点から観察すると、Z の非方言形ナイは出現環境に左右されることなく使用される自由変異的側面を持つようにも思われる。ただし前掲表 4-4 によると、ナイの-kaQ 形（～ナカッ-）による実現数はわずか 1 例にとどまり、従来の関西若年層の傾向と同様にきわめて少ないことがわかる。これは -kaQ 形がナイにとって実現しにくい環境であるということが Z の使用にも反映されていることを意味する。また後続形態に関しても、他の動詞否定形式と比較した場合、先に示したもののうち言い切りの形（後続要素なし）や文末詞、従属節 1 についてはン・ヘンがナイ以上に多く使用されていた（次掲表 4-5）。

表 4-5 Z の〔同郷〕における動詞否定形式の後続形態別使用数

	なし	文末詞	用言	従属節 1	従属節 2	連体節
ナイ	1	1	3	3	3	1
ン・ヘン	10	6	1	11	-	-

この結果はすなわち、同じような出現環境に置かれた際に、ナイよりも方言形ン・ヘンの方がより多く選択されたことを意味する。

上記に加え、ナイが（「かも知れない」を含め）動詞「知る」の否定形として用いられる傾向にある点（表 4-4 (24) (25) (28)）、あるいは後続しづらい要素とはいえ逆接節（(24) (25)）や条件節（(26) (27)）、変化の「～ナル」（(32) (33)）のように、似た環境で実現されている例が散見される点などから、非方言形ナイはただ脈絡なく自由に用いられているというよりは、出現しやすいしにくい環境に従って Z がその使用をシフトさせていることがうかがえる。

ここまで Z の〔同郷〕における動詞否定形式をみてきたが、対する〔他郷〕では非方言形が上回るなか、次掲のような方言形に関しても 9 例が観察された。

(35) 412Z : いや、わからンわ。え、それでさ、なんか【返事が】帰ってこなくてってゆうのがちょっと目にみえるから嫌やねんなー。 〈Z〔他郷〕〉

(36) 098Z : 【地元の空気の汚さについて】星みえるけど、微妙にしかみえヘンもん。 〈Z〔他郷〕〉

これらの例の接続環境については、(36) のような文末詞あるいはそれに相当する表現の後続が 4 例と約半数を占めていた。この結果から、用例数が少ない中であっても方言形の実現しやすい環境というものが存在し、それに従った運用が行われていると推察される。

4) ここでの分類は基本形の用例のみが対象となっている。

2.2.3. 否定疑問形式

標準語の「～ではない(か)」に相当する否定疑問形式については、ジャナイ・ジャン・ヤンカ・ヤン・チャウ・チャ(ウ)ンの6形式が得られた。各話者の使用数は次掲表4-6の通りである。なお、表ではヤンカ・ヤンを「ヤン(カ)」とし、チャウ・チャ(ウ)ンもまとめて示した。なお、ヤナイ(カ)や(ヤ)ガナなどの従来の方言形については三者とも使用はみられなかった。

表 4-6 否定疑問形式の話者別使用数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
ジャナイ	17	1	25	7	7	10
ジャン	6	–	83	–	10	–
ヤン(カ)	–	14	1	44	16	53
チャウ・チャ(ウ)ン	–	3	–	6	–	2

Xは〔他郷〕では非方言形であるジャナイとジャンのみを用い、反対に〔同郷〕では方言形が多数を占めた。

(37) 503X:【就活の時期が】なんか早まるとかいう噂もあるジャン。〈X〔他郷〕〉

(38) 800X: え、じゃあ授業取れるヤン。え、いけるヤン。 〈X〔同郷〕〉

Yも同様に〔他郷〕では非方言形を、〔同郷〕では方言形を中心とした明瞭な切換えをみせた。ただし〔同郷〕では(41)のように、非方言形ジャナイの使用も目立った。

(39) 805Y:【S店が空いている理由】でさー、なんかその、ドトールとかさ、に押されてさ、ちょっと影にいるジャン。だからさ、人いないんジャナイ？

〈Y〔他郷〕〉

(40) 492Y: せやけど、その状態で何度高校行かしてもしゃーないんチャン《仕方ないんじゃないの》。 〈Y〔同郷〕〉

(41) 744Y: え、でもそれいい方ジャナイ？いいタイプの、こう、反抗ジャナイ？

〈Y〔同郷〕〉

ジャナイの〔同郷〕での使用はX・Zにもみられ、関西若年層への浸透を指摘した従来の見解(高木2006)に一致する結果となった。他方の非方言形ジャンに関しては〔他郷〕での使用は頻繁であるのに対し、〔同郷〕での使用は三者ともみられなかった。対応関係にあるヤン(カ)の影響が根強いいためか、ジャンの〔同郷〕での使用への抵抗が垣間みえる。

Zは〔他郷〕では(42)(43)のように非方言形に限らず方言形も積極的に用いており、その切換えはX・Yほど厳密ではない。〔同郷〕では方言形が中心だが、上述の通りジャナイに関しては〔他郷〕に増して使用が認められた((44)参照)。

(42) 448Z: なんか普通、朝起きたときに返すジャン、ラインって。〈Z〔他郷〕〉

(43) 468Z: あ、ちょいちょい病むヤン、あの子。 〈Z〔他郷〕〉

- (44) 284Z：てか、お母さんもお母さんでたぶん避けてるんジャナイ？だって「女チームで出かけます」みたいな感じヤン。だからお母さんもお母さんで、あれジャナイ？
 〈Z〔同郷〕〉

2.2.4. 推量形式

推量形式として得られた形式はデショ・ダロ・ヤロの3形式であった。話者別の使用数の内訳は次の通りである。

表 4-7 推量形式の話者別使用数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
デショ	4	－	20	－	1	4
ダロ	12	－	11	－	11	－
ヤロ	－	16	－	39	3	11

X は〔他郷〕では非方言形のみを、〔同郷〕では方言形のみを用い、明確に切換えていた。

- (45) 903X：そうそう、訛りなんダロね。たぶんオーストラリアの。〈X〔他郷〕〉

- (46) 722X：【以前撮った写真をみて】なんで撮ったんヤロ、これ。〈X〔同郷〕〉

Y も X と同様に〔他郷〕での非方言形使用、〔同郷〕での方言形使用を遵守している。

- (47) 689Y：なんでこないだん《この間の》とこ、辞めたんダロ。〈Y〔他郷〕〉

- (48) 580Y：弟的には、ぼこる《殴る》ってゆったらそっちなんヤロな。その、おとなしい子なんヤロな。
 〈Y〔同郷〕〉

Z は〔他郷〕では方言形ヤロも用いる一方で〔同郷〕では非方言形デショを用いるなど、X・Y に比べ幾分変則的な運用をみせている。

- (49) 644Z：うーん。あの頃に帰りたい。なにが違ったんヤロ。 〈Z〔他郷〕〉

- (50) 370Z：え、A【友人】彼氏いるデショ？だって今。 〈Z〔同郷〕〉

なお、関西では比較的丁寧なスタイルの形式とされているデショの使用は、〔他郷〕を中心に三者に共通して認められた。

- (51) 807X：切られるんデショ？もう「はい、あなた無理」って。〈X〔他郷〕〉

- (52) 695Y：18 歳（＋を）夜勤に残すんだよ？おかしいデショ。 〈Y〔他郷〕〉

- (53) 718Z：あー、それしんどいねー。すごい疲れたデショー。 〈Z〔他郷〕〉

2.2.5. ノダ相当形式

ノダ相当形式に関しては、説明の機能を基本とするネン・テンに対応するもののみを分析の対象とした⁵⁾。得られた形式とその使用数は次表の通りである。

5) 説明の機能以外には、疑問を表すノヤンに加え、「そうなんだ」といった応答詞に現れるンダヤンヤなどがあり、いずれも場面間で切換えられていることが確認できた。なお次例に示す通り、原則としてこれらの場合に用いられるノダ相当形式には、ネンあるいはテンを適用することができない。

表 4-8 ノダ相当形式の話者別使用数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
ノ	20	2	60	－	26	－
ンダ	47	－	74	－	16	－
ン	－	11	－	3	－	－
ンヤ・ネヤ	－	11	－	21	－	2
ネン・テン	－	4	－	52	30	51

Xは〔他郷〕では非方言形ノ・ンダのみを使用し、〔同郷〕ではノの使用が2例みられたほかはすべて方言形を使用していた。

(54) 429X: 【通っていたミッション系の高校について】なんかミサって好きなノ。

なんかミサ大好きなノ。 〈X〔他郷〕〉

(55) 780X: その、記念週間つって【大学が】9連休になんノ。 〈X〔同郷〕〉

(56) 478X: これはね、あれなンよ。失敗したンヤ。 〈X〔同郷〕〉

Yは〔他郷〕では非方言形のみ、〔同郷〕では方言形のみを用いており、その切換え方は非常に厳密である。

(57) 007Y: 【アルバイト先について】で、15分歩いて〈K駅〉に行くノ。で、その〈K駅〉の入ってる《略》駅直のデパートの中にあるンダよ。んで、雰囲気いいし、きれいだし、制服かわいいし、暇そうだったから応募したノ。

〈Y〔他郷〕〉

(58) 213Y: でも、な、ちょ《ちょっと》いい子ではあんネンけど、ちょっと鈍感やネン。だからもう、彼氏もできちゃって、楽しくて仕方なくて、周りみえてへんネヤと思うネンな。

〈Y〔同郷〕〉

Zは〔同郷〕では方言形のみを用いているが、〔他郷〕では非方言形(59)に加え、方言形ネン・テンの使用が目立った(60)。

(59) 382Z: なんか向こうがトイレ行ってる間に、眠くて今のうちだけ寝こうと思って寝てたノ。《略》それがまず3時ぐらいだったノ。「うん、大丈夫だよ」みたいな。もうすぐ切れるだろうと思ったノ。

〈Z〔他郷〕〉

(60) 178Z: うちさ、妹が今大学受験で、2月25(十日)まではあれやネン。なんかあの、うん、あれ、二次試験があるから、そう。それがなかったら泊めてあげれテンけどね。

〈Z〔他郷〕〉

(a) 【今日の授業が休講であることを聞いて】え、そうな {の／ン／*ネン} ?

(b) 【今日の授業が休講であることを聞いて】あ、そうな {んだ／ンヤ／*ネン}。

2.2.6. 間投助詞

間投助詞に関しては、非方言形ネ・サ、及び方言形ナ の 3 形式が得られた。各形式の使用結果は以下の通りとなった。

表 4-9 間投助詞の話者別使用数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
ネ	18	11	13	5	17	8
サ	47	23	145	73	114	85
ナ	—	6	—	16	—	3

〔他郷〕では三者に共通して方言形ナは観察されず、非方言形ネ・サのみが使用されている。なかでもサの使用が特に盛んである。

(61) 345X : なんか月曜 1 限からサ、ベトナム戦争のサ、映像みせられてサ、
〈X 〔他郷〕〉

(62) 057Y : でサ、【アルバイトを辞める人が】一人二人だったらサ、その子たちが
頑張れなかったで済むけどサ、さすがにそんな何人も、やせ、辞めてたらサ、
【店長のパワハラがその】理由ん《に》なっちゃうじゃん。〈Y 〔他郷〕〉

(63) 588Z : うーん。え、でもサ、この前 6 時間電話したのにサ、「今日なにしてる？」
とかまた聞いてきたらサ、ちょ《ちょっと》しつこい？

589Oz : いつ電話したの？

590Z : えーつとネ、きの《昨日》、一昨日 ‘おととい’。 〈Z 〔他郷〕〉

一方の〔同郷〕は方言形ナの使用が三者ともにみられるが、それを凌ぐ形で非方言形の使用が目立っている。ここでもサが多用されており、当該形式が関西において非方言形として認識されにくくなっていることをうかがわせる。

(64) 414X : なんかナ、そう、コインの変換になってからサ、 〈X 〔同郷〕〉

(65) 380Y : あのネ、4 月の 26 (十日) が一番最後の、だからライブなんやけど、
なんか一応そこまでは判子押しちゃってるからサ、契約書に。〈Y 〔同郷〕〉

(66) 342Z : てかもうべつにサ、ラインサ、べつに返す分にはサ、こっち被害もなにもないからサ、べつに返すけどサ、続けるんやったら「さっさと返せよ」みたいな。
〈Z 〔同郷〕〉

2.2.7. 終助詞

終助詞については非方言形としてヨ・ネを取り上げ、それぞれに形式的かつ意味的に対応する方言形デ・ナを合わせた計 4 形式を対象とした。その結果を表 4-10 に示す。

表 4-10 終助詞の話者別使用数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
ヨ	5	1	68	14	11	1
ネ	31	-	39	2	58	46
デ	-	13	-	19	4	2
ナ	1	9	-	72	6	33

X は〔他郷〕では非方言形の使用が主であり、方言形はナが 1 例のみであった。一方の〔同郷〕では方言形を使用し、非方言形はヨが 1 例のみと、X の終助詞は三者のなかでもっとも明瞭に切換えられていた。

(67) 【厳しさのあまり受講者が最終的に Ox を含む 5 人しかいなかった授業の話】

821X : やば。5 人はすごいネ。

822Ox : ん、5 人ぐらい。ほんとに 5 人しかなくて。

823X : や、Ox すごいヨ、それ。

824Ox : いや、やっぱいよ。

〈X 〔他郷〕〉

(68) 088X : あ、そっか。ハーマイオニーのこと好きやもんナ、ロンは。〈X 〔同郷〕〉

(69) 600X : 【伏見稲荷の混雑具合について】え、でも普通に行けたデ。〈X 〔同郷〕〉

Y は〔他郷〕では非方言形のみを用いた。〔同郷〕では方言形が優勢ではあるものの、非方言形も少なからず観察された。

(70) 725Y : 【店の口コミサイトをみながら】なんかすごいネ。やな《嫌な》すごい口コミあったヨ。なんか「カレーがぬるいし」みたいな。〈Y 〔他郷〕〉

(71) 115Y : すっごい怒ってたヨ。めっちゃきれてたデ。〈Y 〔同郷〕〉

(72) 449Oy : そう。ほんで《それで》しかも家帰ってこーへの《帰ってこないの》おかしい、みたいな。

450Y : ん、それ、おかしいヨ。

451Oy : そう。で、塾もさぼって。

452Y : おかしいヨ。

〈Y 〔同郷〕〉

Z はすべての形式を両方の場面で用いていた。〔他郷〕では非方言形が多いのに対し、〔同郷〕では方言形ナよりもそれに対応する非方言形ネが目立つ。場面間でみても方言形デが〔他郷〕の方に多いなど、切換えていない形式も観察された。

(73) 050Z : 近辺はさ、結構さ、なんかちょっと田舎って感じやけどさ、奥みたらめっちゃ家あんねんナ《あるんだね》。

051Oz : そう。ね、なんか住宅街よ、たぶん、ゆーて《言って》。

052Z : あー、なるほどネ。

〈Z 〔他郷〕〉

(74) 176Z : え、でもさ、おばあちゃんちからさ、また来るってなってもさ、新幹線 1 時間かかるデ。

〈Z 〔他郷〕〉

(75) 682Z: えー、すごいネ。「袖なんたら他生の縁」【ことわざ: 袖振り合うも他生の縁】てやつやナ。〈Z [同郷]〉

ここまで、各文法項目の場面間の使用実態を個別的に検討した。この結果を踏まえ、関西出身若年層 X・Y・Z の運用がどのように特徴づけられるかを次節以降で考察する。

3. 話者別にみる場面間切換えの実態

本節では 2 節に示した語彙・文法各項目の使用の全体像から浮き彫りとなった関西出身若年層の切換えのタイプ、ならびに共通する特徴についてそれぞれ述べることにしたい。

3.1. 各話者の切換えのタイプ

2 節における各項目の結果をみると、場面間の切換え方に関して、X と Y が類似した傾向をみせているのに対し、一方の Z はその二者とは異なる運用の仕方を行っていることがうかがえる。以下では主に文法項目に焦点を置き、まずは X と Y の切換え方の特徴について検討する (3.1.1 節)。続いて Z の特徴について考察したのち (3.1.2 節)、話者によるタイプの異なりの要因について考えを述べる (3.1.3 節)。

3.1.1. X と Y の場合

2.2 節で分析した文法の 7 項目について、X と Y それぞれの各場面での非方言形と方言形の使用割合を比較したものを以下の図 4-1、図 4-2 に示す。

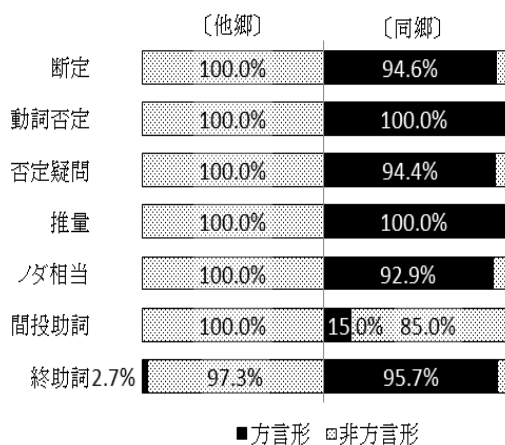


図 4-1 各項目の場面別使用割合 (X)

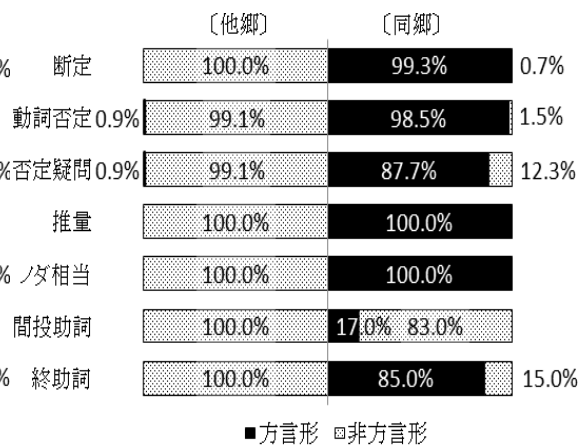


図 4-2 各項目の場面別使用割合 (Y)

両図から、X・Y のいずれも〔他郷〕ではすべての項目において非方言形が 100%に近い割合で使用されている様子がみてとれる。対する〔同郷〕では、方言形が間投助詞を除き X は 90%、Y は 80%を超える高い割合で出現していることがわかる。

使用形式が場面ごとに決められており、当該形式を使用するか否かという絶対的な基準によって示される切換えについて、大阪大学大学院による「SS プロジェクト (渋谷 2002)」

では「カテゴリーカル（不連続）」な切換えと定義されている。本研究が対象とした関西出身若年層 X・Y の〔他郷〕と〔同郷〕における切換えは、一部を除くほぼすべての文法項目においてこのカテゴリーカルな、すなわち絶対的な傾向をみせているということがうかがえる。なお 2.2 節でも触れたように、否定疑問形式及び間投助詞の非方言形のうち、ジャナイやサに関しては近年関西若年層の間で急速に使用が拡大してきているとされ（高木 2006）、それに伴って X・Y の〔同郷〕での各項目（特に間投助詞）の非方言形の使用割合も高くなっているものと考えられる。

3.1.2. Z の場合

次に、Z の切換えの実態についてみていこう。次掲図 4-3 は Z の各文法形式の使用割合を場面間で比較したものである。

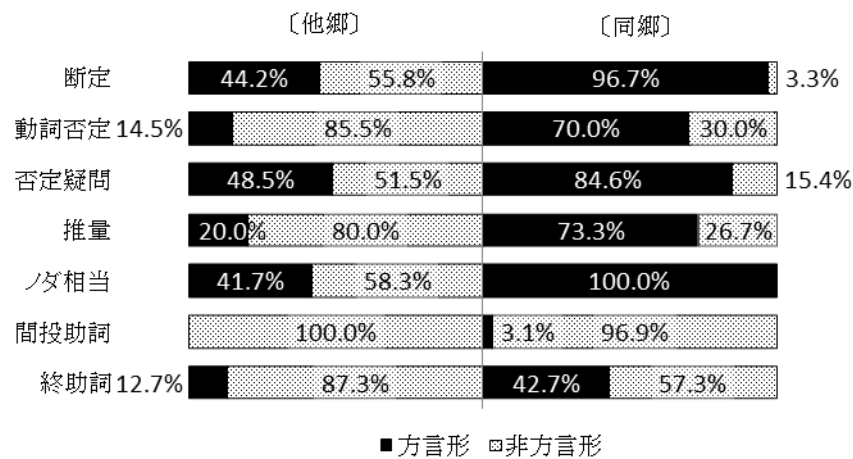


図 4-3 各項目の場面別使用割合 (Z)

個々の形式に注目すると、〔他郷〕ではいずれも非方言形の、〔同郷〕では一部の項目を除き方言形の使用割合が高くなっていることから、Z においても場面間での切換えが行われていると判断できる。ただし、その切換え方の度合いに関しては、他の二者とはかなり異なる様相を呈しており、特に〔他郷〕における方言形の割合の高さが X・Y に比べて目立つ。Z の切換えは X・Y のような絶対的な切換えというよりも、場面によって使用形式の量に差がある相対的（連続的）な切換えとみるべきであろう。

このように談話全体に占める割合のみをみると Z の切換えは明確とはいえず、従来から指摘されてきた関西方言話者の運用の特徴に沿う切換え方であるように思われる。しかし一方で、果たしてこうした方言形・非方言形の使用割合は、談話の一連の流れのなかで常に一定しているものなのだろうか。

そこで、Z の〔他郷〕での使用数の割合を談話の時間軸に沿って見てみよう。次の図 4-4 は約 60 分間の談話を 10 分ごとに区切り、非方言形及び方言形の使用比率が時間の経過と共にどのように推移したかを示したものである。

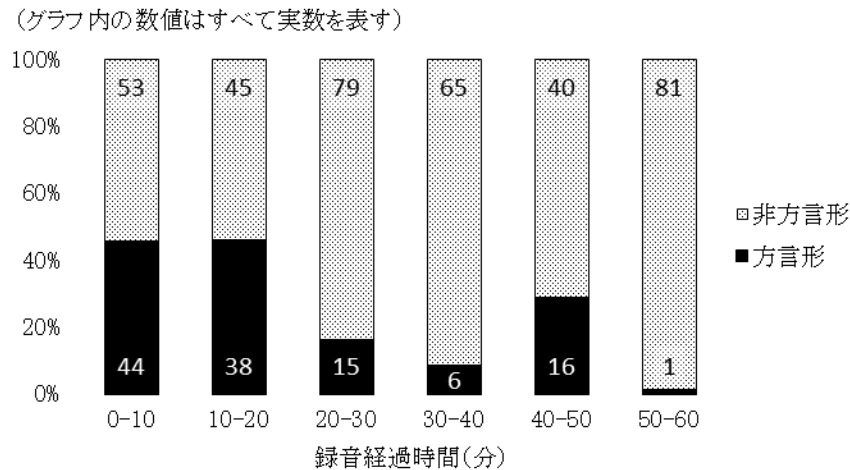


図 4-4 「他郷」における方言形/非方言形の使用割合の推移 (Z)

図によると、録音開始直後の 0-10 分の時点では方言形と非方言形の割合は概ね拮抗しており、同様の状況が 10-20 分まで続いている⁶⁾。ところが 20 分以降からその比率に変化が現れる。20-30 分の時点になると、これまで 50 前後を推移していた非方言形の数が 79 にまで上昇し、反対に 40 前後あった方言形の数も 15 にまで減少している。30-40 分になるとその差はさらに顕著になり、非方言形の占める割合が高くなっている。40-50 分では方言形が盛り返しをみせ、対する非方言形はやや下がるものの、録音終了時近くの 50-60 分になると方言形はわずか 1 例しか現れず、ほぼすべて非方言形で占められている⁷⁾。

この結果は Z の談話が録音開始後約 20 分を境に、両形式を織り交ぜた運用から非方言的言語要素が中心の運用へと転換していることを示すものである。「他郷」における Z の使用は談話全体に係る値 (図 4-3) のみをみると方言形が際立つように思われるが、時間軸に沿ってしてみると方言形が多いのははじめのうちに限られ、談話の進行に従って次第に非方言形を中心に据えた、いわば局所的な絶対的運用へと移行していくものと思われる。

こうした運用となった理由として、第一に調査開始前における調査者 (筆者) との接触が考えられる。Z と同じ関西出身である調査者との会話により方言使用が活性化され、録音開始直後に方言形が集中するも、Oz との談話が進行するなかで徐々に移住者としての普段のモード、すなわち X や Y のような標準語ベースの運用に回帰していったと予測できる。

第二に考えられるのは、話題内容の性質の違いである。非方言形の使用が多いのははじめの 20 分では様々に変化していた話題が、20 分以降はそれぞれ一定の長さで持続している印象があった⁸⁾ ことから、話題の内容やそれに対する話者の集中の度合いが関係している可能

6) 0-20 分において非方言形の方が方言形よりもやや多いのは、両場面ともほぼ非方言形のみで切り替えがみられなかった間投助詞が含まれているためである。間投助詞を除いた場合、非方言形は 0-10 分で 22 (33.3%)、10-20 分で 16 (29.6%) と、図 4-4 に示した数値よりも大幅に減少する。

7) 語彙項目の方言形も同様、録音開始直後の使用がもっとも多く、時間が進むにつれ減少していった。

8) 20 分以前の話題は、春休みの計画や実家周辺の環境のこと、実家が最近引っ越したこと、以前行ったテーマパークでの体験など、流れのなかでは関連しつつも様々に推移するという特徴がみられた。それに対し、20 分以降は基本的に恋愛をテーマにした話題が中心であり、細かな推移はあるものの、その大枠自体に大きな変化はなかった。恋愛話の合間に唯一、期末試験の評価に関する話題への小転換がみられたが、その話題導入時の Z はもっぱら方言形を用いていた。図 4-4 の 40-50 分における方言

性がある。話題と使用形式の相関関係については第8章で詳しく述べることにしたい。

以上から、 $X \cdot Y$ は使用形式が場面ごとにほぼ固定されているのに対し、 Z は当該場面に沿った形式に徐々に変化していくという異なる運用のタイプであることが示された。

3.1.3. タイプの異なりの要因

こうした $X \cdot Y$ の二者と Z の切換え方のタイプの違いはすなわち、切換えの要因となるもののレベルが異なることを意味している。〔他郷〕での運用でいえば、 X と Y は対者が非関西地域出身者であること、つまりどのような場面に身を置くかが切換えのトリガーとなっている。両者の談話全体がほぼ一貫して非方言的要素で占められているのは、この点に起因するものと思われる。

一方の Z にとって対者が非関西地域出身者であることは切換えに直ちに影響はしていない。むしろどのような話題で談話を進めるかという、場面よりもさらに細かいレベルにまで達することが切換え発動の条件になっていると考えられる。同じ関西地域の出身であるにもかかわらず、このようにタイプの違いが生じるのはなぜか。個人差としてしまうのは簡単だが、ここではより客観的な事象から考えうる要因を挙げておきたい。

まず Z のタイプが他の二者と異なるのは、 Z の〔他郷〕の対者 Oz が非関西地域出身者のなかでも唯一首都圏出身でないことが関係している可能性がある。本論は関西若年層の標準語スタイルの運用可能性の解明を目的の1つとしているため、対者が東京式アクセントの保有者であれば、出身がどこであるかは基本的に問わないことにしている(第3章3.2.2節)。 Oz の出身地である静岡県は首都圏に隣接しているとはいえ、経済・文化的勢力及び顕在的威信の強さにおいてやや規模が下がることは否めない。 Z は Oz を自身と同じ「一地方社会」の出身者とみなし⁹⁾、方言要素の多い運用を行ったとも解釈できる。より都心に近い首都圏出身者との談話であれば、 Z も $X \cdot Y$ と同様に場面をトリガーとした明瞭な切換えを行った可能性は否定できない。

また、場面レベルで切換えを発動させた二者のうち X に関しては、和歌山県の出身であることがその要因として挙げられる。田原(2006)によると大阪・奈良・和歌山・京都のうち、和歌山と京都では地元以外の地域出身者と地元以外の場所で話す際、標準語またはそれに準ずることば(準標準語: 田原では「準共通語」)に切換えられる傾向があるという。この点から考えると、和歌山出身の X にとって〔他郷〕は切換えを行うのに適した条件が備わっているといえ、結果的に先述のような明瞭な切換えにつながったものと考えられる。

Y の切換えの明瞭さの要因については現時点で有力な見解を持ち合わせておらず、また、上述の X や Z の切換え方の要因に関しても未だ推測の域を出ない部分が多い。切換えのタ

形の微増は、この話題によるものである。その後再び恋愛話に移行する際は方言形がほとんどみられなくなっている点から、話題と使用形式には何らかの関連があるものと思われる。詳細は第8章で論じる。

9) 調査当時、 Z は静岡県を首都圏(関東地方)に含まれる一地域と捉えていた(第3章3.2.2節参照)。しかし Oz が自身と同じく地方出身者向けの学生寮に住んでいることや、談話内で Oz の地元が自身のそれに比べ田舎である旨の話をしていたことなどから、 Oz の地元が都心から離れたところに位置しているということも同時に認識していたと思われる。したがって Z は Oz について、顕在的威信の強い地域というよりは、自身と同じ一地方社会の出として捉えていた可能性が高いと考えられる。

タイプの違いがなぜ生じたかについては、話者自身の言語意識等を踏まえた多角的な調査・分析を行う必要がある。Z の対首都圏出身者場面での調査も合わせ、今後の検討課題としたい。

なお、このようにタイプの違いがあるとはいえ、三者とも結果的に〔他郷〕が非方言形中心の運用となっていることは、第2章で取り上げたこれまでの先行研究のなかで指摘されている従来の関西方言話者の運用パターンにはあまりみられなかった特徴といえる。

3.2. 各話者に共通する切換え方の特徴

3.1 節では、関西出身若年層 X・Y・Z の場面間の切換えのタイプについて、X・Y の二者と Z で若干の相違があることを示した。一方、三者に共通する切換え方の特徴も存在する。次掲の表 4-11 は、当該場面で本来的には使用が見込まれない形式（〔他郷〕での方言形・〔同郷〕での非方言形）の出現数を話者ごとに示したものである。

表 4-11 当場面で本来使用が見込まれない形式の出現数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
断定形式	－	4	－	1	49	3
動詞否定形式	－	－	1	1	9	12
否定疑問形式	－	1	1	7	16	10
推量形式	－	－	－	－	3	4
ノダ相当形式	－	5	－	4	56	14
間投助詞	－	34	－	78	－	93
終助詞	1	1	－	16	10	47
計	1	45	2	107	143	183

X と Y の使用に注目すると、〔他郷〕における方言形がそれぞれ計 1～2 例程度とわずかなのであるのに対し、〔同郷〕における非方言形は一定数存在することが確認できる。Z は X・Y に比べると〔他郷〕における方言形をかなりの数で使用しているが、合計数のうえではやはり〔同郷〕における非方言形が上回っている。これらの結果はむろん、間投助詞サや否定疑問形式ジャナイのように非方言形が自身の方言の中にすでに取り込まれ、それらを「非方言形」として意識しないまま用いている可能性によるものであることも否めない。しかし特に X・Y についてはその点を差し引いても、〔同郷〕での非方言形使用の方が〔他郷〕での方言形使用よりも許容されるようである。

細谷（2004）は大阪市方言話者の切換えの特徴として、方言話者に対しては方言形を用いるよう注意を払い、反対に標準語話者に対しては方言形と標準語形のいずれを用いても構わないとする「方言話者を意識した切換え」を行っている可能性を示した。これに対し X・Y は、標準語話者（〔他郷〕の対者）には標準語・東京語形（非方言形）の使用を遵守

し方言形を極力抑える反面、方言話者（〔同郷〕の対者）にはいずれの形式も許容するという「標準語話者を意識した切換え」になっている。この点で X・Y は細谷（2004）が対象とした関西方言話者とは特徴を異にする切換えを行っているといえるだろう。

また X・Y ほど明確に現れてはいないものの、Z の切換えにも類似の傾向がみられる。次の図 4-5 は図 4-4 に示した Z の〔他郷〕における各形式の使用割合の推移に加え、〔同郷〕における推移も合わせて示したものである。

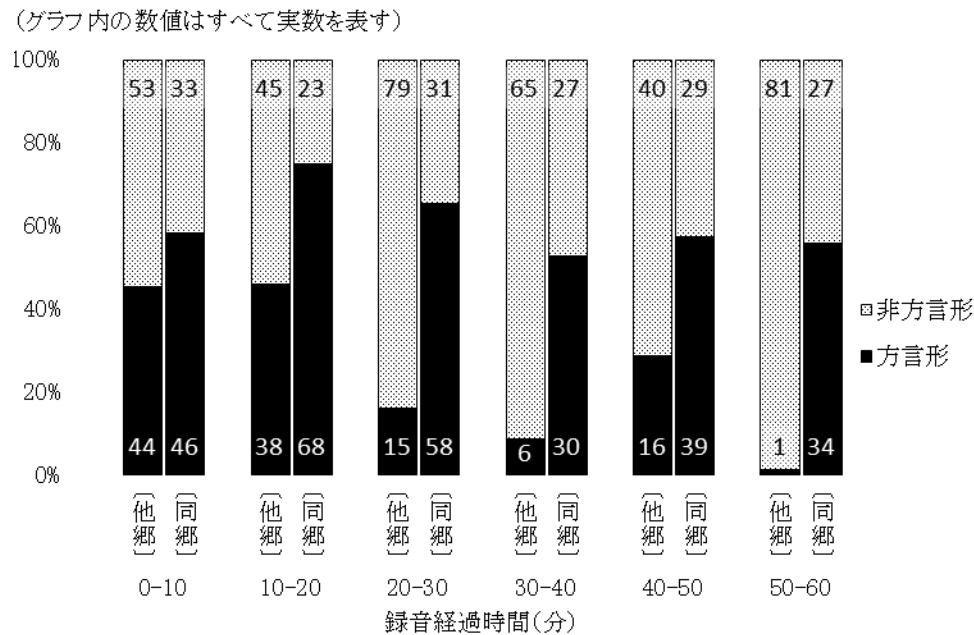


図 4-5 両場面における方言形/非方言形の使用割合の推移 (Z)

これによると 20-30 分以降、〔他郷〕では両形式の使用数の差が徐々に開いていくが、〔同郷〕ではいずれも一定の比率を保ったまま推移しており、〔他郷〕ほど大きな開きはない。この結果から、〔他郷〕では方言形を極力控えて非方言形を積極的に使用し、〔同郷〕ではいずれの形式を用いても構わないという X・Y にも共通する姿勢が現れたものと解釈できるだろう。

以上、本節では関西出身若年層 X・Y・Z に共通の切換え方の特徴として、〔同郷〕の対者よりも〔他郷〕の対者をより意識した切換えを行っていることを明らかにした。また、この特徴がこれまでの指摘にみる関西方言話者の特徴とは異なるものであることを述べた。

4. 場面別の運用にみる移住者としての特徴

次に本節では X・Y・Z の移住者としての運用の特徴をみるため、個々の場面に目を向け、各場面の対者の運用と比較しながら分析する。はじめに 4.1 節で〔他郷〕での運用について検討し、続く 4.2 節で〔同郷〕での運用を分析する。

4.1. 「他郷」での運用

「他郷」の場合、X・Y は談話全体を通して、Z は談話の序盤を除いて非方言形の使用が非常に多いことを 3.1 節で確認した。その非方言形のうち否定疑問形式ジャンや間投助詞サなど、方言形に対応形式があり、かつ文体的に低いいわゆる「東京語」由来とされる形式（以下「東京語形」）が三者に共通して複数観察された。以下の表 4-12 は三者のジャンとサの使用数を「他郷」の対者（Ox・Oy・Oz）と比較したものである。

表 4-12 東京語形の出現数（「他郷」対者との比較）

	X	Ox	Y	Oy	Z	Oz
ジャン	6	11	83	11	10	11
サ	47 (2.0%)	12 (0.7%)	145 (5.6%)	7 (0.8%)	114 (4.4%)	28 (1.7%)

ジャンに関しては特に Y が対者 Oy の使用数を大きく上回っており、Z の使用数も対者 Oz とほぼ同数を成している。また、サについては三者全員が対者をはるかに凌ぐ結果を示した。これは実数としてのみならず、付きうる文節すべてに間投助詞が付いた状態を 100% とした場合に占める割合（表中の括弧内参照）からみても、同様の傾向がうかがえる。

関西方言話者にとってのこれらの形式は、対応する形式が関西方言に存在することとも関連してか「東京のことば」としての認識が特に強いとされ、否定的に捉えられていることも少なくない（ロング 1990b）。一方で中には対者に影響され、意に反して使用してしまうタイプの存在も指摘されている（高木 2008）。このように東京語形は関西方言話者にとって決して肯定的な形式としては捉えられてこなかったように思われるが、表 4-12 の結果をみると、X・Y・Z はそうした形式をむしろ対者と同等、あるいはそれ以上に積極的に活用しているようにみえる。

このような行動が取られた理由としては、以下の点が考えられる。形式ごとにみると、まず間投助詞サの多用に関しては先にも述べた通り、若年層を中心に関西でも使用が一般的となりつつあるため、他の標準語・東京語形に比べて使用しやすい側面があると推察される。また、「他郷」では用にくい方言形ナに代わり、その位置をサによって代用したとも考えられる。

ジャンに関しては、対応形式である方言形ヤン（カ）を置換させた結果によるところが大きい。特に Y の場合、「同郷」ではジャンは 1 例も用いられず、代わってヤン（カ）が主に用いられていた（2.2.3 節表 4-6 参照）。また「他郷」では反対にヤン（カ）の使用がほとんどないことから、両形式は Y にとってきわめて切換えに与りやすい項目といえる。両場面ともに否定疑問形式の使用頻度が多い点も関連してか、それらの対応置換の結果が表 4-12 における Y のジャンの出現数の多さに現れたと推察される。

なお視点を換え、話者の言語意識の側面からこの現象を捉えてみると、また違った動機が浮かび上がる。談話調査後に行った質問調査のなかで、「（移住後に訛りを指摘された経

験から) 自分の方言使用によって場を乱したくない」「方言使用を指摘されることによってそれまでの会話が中断されるのが煩わしい」といった意見が三者に共通して得られた(詳細は第 8 章参照)。これらの内省から、X・Y・Z は対者との会話の内容に集中するためにその阻害要因となる方言形の使用を控えるのと同時に、対者の使用言語(標準語)を特徴づける形式を頻回に用いることによって〔他郷〕において求められる言語的振る舞いの実践を試みたものと考えられる。換言すれば、対者のことばに近づけていくコンバージェンスの現れとも捉えることができるだろう。

以上、関西出身若年層 X・Y・Z の〔他郷〕における運用の特徴として、東京語形を対者と同等以上に顕著に使用していることを述べた。

4.2. 〔同郷〕での運用

続いて本節では〔同郷〕での運用の特徴について検討する。動詞否定形式を取り上げ、各話者及びその〔同郷〕における対者の使用実態を比較する。はじめに X と対者 Kx を取り上げる。それぞれの動詞否定形式の方言形を、動詞の活用ごとに分類したものを表 4-13 に示す。

表 4-13 動詞否定形式の各活用における使用分布 (X・Kx)

	五段		一段		カ変		サ変		可能		計	
	X	Kx	X	Kx	X	Kx	X	Kx	X	Kx	X	Kx
ン	32	48	—	6	1	—	3	2	—	2	36	58
ヘン	—	1	—	3	—	—	—	—	—	4	—	8
ヤン	—	—	4	5	1	—	—	4	1	12	6	21

まず五段動詞に関して、X と Kx の出身地である和歌山県有田市では従来、ンが主な否定形式として用いられる(『方言文法全国地図』(以下 GAJ) 第 80 図)。両者の使用をみると、X は従来通りンのみを用いているのに対し、Kx はわずか 1 例ではあるが、周辺地域の形式であるヘンを使用している。

(76) 638X : 知らンやん。この雑誌やからさ、わからン。 (X〔同郷〕)

(77) 585Kx : 観光としてちゃんと行かヘンやん、近すぎて逆に。(Kx〔同郷〕)

一段動詞と可能形式については、ヘンとヤンが従来の有田市方言の否定形式である(榎垣 1936; 村内 1962; GAJ 72~79 図; 大西編 2016 第 69 図)。X・Kx に目を向けると、X はいずれもヤンのみを用いているのに対し、Kx は従来は使用されないとされてきたンを用いている。

(78) 306X : 【相手が電話に】出ヤン。(X〔同郷〕)

(79) 355Kx : あれ、くそまずいから食ベンかったもん。(Kx〔同郷〕)

さらに、サ変動詞に関してはンとヘンが本来的な使用だが(GAJ 第 84 図、大西編 2016 第 71 図)、従来通りンを使用する X に対し、Kx はンを上回る数でヤンを使用している。

(80) 320X : ま、予約せンでもいけるかな。 〈X〔同郷〕〉

(81) 923Kx : これのシリーズが、たぶん中では課金しやなあかんけど、ある程度今ちょっと無料になってたと思う。 〈Kx〔同郷〕〉

以上から、生活圏を関西に置く Kx が従来の有田市方言にはない新しい形式を使用しているのに対し、現在関西を離れている X の方が伝統的な方言形式を保持していることがわかる。Kx は進学に伴い生活圏を大阪に移したことで和歌山の周辺地域の形式を新たに取込むようになったと考えられるが、和歌山から東京に移住した X にはその過程がないため、伝統方言形式を中心とした移住前同様の運用になっていると解釈できる。

伝統方言形式の保持という点に関連してさらに述べると、Kx にはヘンの使用が計 8 例みられたのに対し、X には一切みられなかった。有田市では従来、五段を除く各活用でヘンが用いられるが、X はヘンに代わりすべてヤンで統一している (表 4-13 一段・カ変参照)。X はおそらく Kx が地元和歌山出身の友人であるということを意識して、大阪を中心とする他の関西圏にも広く使用されているヘンよりも和歌山県方言としての独自色がより強いヤンをあえて選択することにより、〔同郷〕らしさを演出しようとしたと考えられる。このように地元にとどまる者以上に伝統方言形式を保持・運用すること¹⁰⁾ は、移住者に特有の特徴といえるだろう。

続いて、Y・Z 及びそれぞれの対者の動詞否定形式の運用の異同をみてみたい。次表 4-14 は五段動詞及び可能形式にヘンが接続した場合の実現形の分布を示したものである。

表 4-14 五段動詞/可能形式+ヘンの実現形

		Y	Ky	Z	Kz
五 段	ア段+ヘン	1	-	7	10
	エ段+ヘン	16	4	-	-
可 能	可能動詞否定形	-	-	-	1
	助動詞否定形	6	5	2	2

Y と Ky 及び Z の出身地を含む大阪府のほぼ全域では、五段動詞にヘンが接続する際、「行かヘン」が「行けヘン」となるように語幹末がア段からエ段にシフトした形が伝統的形式として使用される (山本 1962; 岸江 2004)。また、可能形式に関しては「行けヘン」のような可能動詞否定形よりも「行かれヘン」のような助動詞否定形の方が優勢であるとされている (山本 1962; 真田編 2018:150-152)。なお、Kz の出身地を含む兵庫県の阪神間地域では、五段動詞+ヘンにおける語幹末がア段である点が上述の大阪府方言とは異なる

10) このように対者以上に伝統方言形式を用いる一方、方言形・非方言形ともに許容される傾向にある (3.2 節) という〔同郷〕での運用特徴の不整合性について、現時点での考えを述べておく。関西でも非方言形が部分的に浸透しつつある点や、現在首都圏在住であることによる影響からか、〔同郷〕での非方言形は〔他郷〕での方言形に比べると図らずも生じやすい環境にあるといえる。こうした中、X は〔同郷〕での方言らしさを補う意味で方言形を用いる際にはより方言色の強い伝統形を使用し、非方言形使用とのバランスを取ろうとしたと考えられる。ただこの考えは推察の域を出ず、話者への聞き取り調査等を通じて検討を深める必要がある。今後の課題としたい。

(GAJ 第 80 図、酒井 2017:100)。

以上を踏まえて表 4-14 をみると、Y・Ky はいずれも五段動詞ではエ段＋ヘンの形を、可能形式では助動詞否定形を中心に用いており、従来大阪府方言の形を保持していることがわかる。以下がその例である。

(82) 382Y：ただ、顔出すと金取られるから、絶対顔出せヘン。{笑い} 絶対顔出せヘン。
 〈エ段：Y〉

(83) 101Y：だってさ、幹事長が合同【ライブ】の話持って帰ってきたのに、幹事長出られヘンって意味わからんくない？や、出ろよみたいな。なんで幹事長かつその合同ライブの主催者やのに、本人出られヘン（+ねん）。〈助動詞：Y〉

(84) 525Ky：で、提出物も出せヘンねん《出さないんだ》。〈エ段：Ky〉

(85) 693Ky：羨ましいわ。その、ちょっと手抜いて〈S 高校〉って。【Ky の弟は】手抜いたらもう、どこも行かれヘンわ。〈助動詞：Ky〉

反対に Y・Ky と同じく大阪府出身の Z に関しては、五段動詞をいずれも伝統形であるエ段ではなくア段で実現している¹¹⁾。ただし、可能形式では 2 例と僅少なながら従来の伝統形である助動詞否定形を用いている。Kz は、五段動詞では本来的な形であるア段を保持しているのに対し、可能形式では 1 例のみではあるが、従来の出現形式ではない可能動詞否定形の使用が確認できた。

(86) 244Z：あたし、お父さんみたいな人絶対合わヘンわー。〈ア段：Z〉

(87) 296Z：そやなー。でも「###」とはゆわれヘンのちゃう？〈助動詞：Z〉

(88) 527Kz：んー、てか話広がらヘンやん。そこ聞いても。〈ア段：Kz〉

(89) 143Kz：だって今までさ、組織の中に放り込まれてる、きた（+側）の人間やから、なんか、なに？なんか、んー、チームでなにかをすゝとこにいないと、やってけヘンなーと思う。〈動詞：Kz〉

続いてカ変動詞否定形に着目してみたい。次掲は話者それぞれのカ変動詞否定形のバリエーションの使用実態を示した表である。

表 4-15 カ変動詞否定形の実現形

	Y	Ky	Z	Kz
ケーヘン	7	－	－	－
キーヒン	－	－	－	－
コーヘン	－	2	1	1
コン	－	5	－	－
コヤン	－	－	－	－

11) 同じ大阪府内出身ながら Z と Y・Ky で伝統方言形の使用に差があるのは、各々の育成環境の違いが関係しているものと考えられる。Z は小学校から高校までを兵庫県内の学校で過ごしたのに対し、Y・Ky は小・中学校を大阪府中部、高校を同府南部で過ごしており、その過程で接触した人々の育成地の違い等が各々の使用形式に影響を与えたものと考えられる。

カ変動詞否定形に関して大阪府方言ではケーヘンが伝統形とされているが、近年ではコーヘンといったネオ方言形が若年層を中心に広がりを見せている（真田 1987）。この点を踏まえて表 4-15 をみると、Ky にはネオ方言形の使用が認められるのに対し、Y は伝統形であるケーヘンのみを用い、ネオ方言形は用いていないことが確認できる。

(90) 540Y : 電話とかかかってケーヘンねやったら《かかってこないんだったら》もうあんま《あんまり》家帰ってケーヘンかったり。うん。〈伝統形 : Y〉

(91) 493Ky : やー、たぶん高校行かしたら帰ってコーヘンと思う。{笑い} とうとう帰ってこんくなると思う。帰る日の方が少ないやろ。〈ネオ方言形 : Ky〉

このように関西にとどまっている話者は新形式を活用し、反対に現在関西を離れている話者は古い伝統的な形式を保持する、という構図が先述の X・Kx のみならず、Y・Ky にもみられたのである。なお、Z・Kz からはネオ方言形のみが観察されたが、いずれも 1 例ずつと少なく伝統方言形を有している可能性も否定できないため、ここでは結果の提示にとどめておく。

また、近年奈良・和歌山由来の否定形式ヤンをカ変動詞に接続させた「コヤン」が近畿中央部の若年層にも浸透してきているが（鳥谷 2015; 日高 2014; 村中 2014）、和歌山出身の X・Kx を除く他の話者からは観察されていない。Y や Z にとっての新形式コヤンが両者にみられない点は、裏を返せば新しい形よりも伝統的な形がより志向されていることを示唆しているともいえる。ただし対者 Ky・Kz にも同じようにコヤンの使用がみられなかったことから、この点に関しても可能性の提示にとどめたうえで、今後の継続的な調査・検討を課題としたい。

5. 本章のまとめ

本章では、首都圏在住の関西出身若年層が出身の異なる友人を相手にした場合（〔他郷〕）と出身の同じ友人を相手にした場合（〔同郷〕）のことばの運用について、語彙・文法項目を対象に考察した。その結果、場面間の切換えの実態として、

a-1) 使用形式が場面ごとに固定された絶対的に近いタイプ (X・Y) や、全体としては連続的だが談話の進行に伴い当該場面に沿った形式に移行していくタイプ (Z) があること

a-2) 全話者に共通して、標準語話者（〔他郷〕の対者）をより意識した運用が行われていること

を明らかにした。また、移住者に特有の運用の特徴として、

b-1) 〔他郷〕では東京語形が対者と同等あるいはそれ以上に積極的に使用されること

b-2) 〔同郷〕では伝統方言形が特に志向され、その使用は関西在住の対者以上に顕著な場合があること

を述べた。

以上から、本研究が対象とする首都圏在住の関西出身若年層 X・Y・Z は、個人差はありながらも場面間で性格の異なる運用を行っていることが示された。特に a-2) のように

〔他郷〕の対者に対し非方言形の使用が遵守される点は、換言すればこれまで地元関西で過ごすなかで培われてきた知識としての標準語能力が、実際の使用の場で如何なく発揮されていることを示唆するものである。三者は語彙・文法レベルにおいては潜在的な標準語能力を比較的スムーズに運用することができているといえるだろう。

また、X・Y・Zを移住者としての観点からみたb-1)及びb-2)は、話者自身の置かれている場面を顕著に特徴づける言語形式の運用が、話者自身によって選択されていることを示すものである。すなわち、対者が他地域出身者であれば東京語形を、同じ地域出身であれば方言形のうち当該方言らしさがより現れた伝統方言形を用いることで、「その場面らしさ」を最大限に体現しようとする運用の在り方が移住者には存在すると考えられる。

切換え項目としては、本章で扱った語彙・文法項目は話者の意識にも上りやすく、操作しやすい項目であると考えられる。第5章では変化が生じにくく、かつ関西方言話者にとって「方言らしさ」を体現する要素と位置づけられてきたアクセントに着目し、場面間における運用実態の解明を試みる。

第5章 アクセントにみる運用の実態

本章では関西出身若年層 X・Y・Z が場面間でどのようにスタイルを運用しているかについて、音声のレベルから明らかにしていく。特に、関西方言話者にとって「方言らしさ」を表す主要なマーカーとして位置づけられてきたアクセントに着目して考察を行う。

1. はじめに

関西方言話者にとって、アクセントは「関西方言らしさ」を示すマーカーとして重要な役割を担う言語要素である（高木 2006; 関西弁事典 2018 ほか）。ゆえに、形態面における標準語・東京語形の使用はあっても、アクセントまで含めての切換えが観察されることは若年層であれ、きわめて少ないとされている（高木 2008）。また、関西方言話者は関西地域以外の他地域出身者に関西方言を（下手に）真似されることをよく思わない節があり、アクセントなどの音調面に関しては特に、少しでも違和感があれば即座に訂正を要求するなどの光景が度々みられる。その関連として、関西方言話者はマスメディア上に流れる自方言のクオリティに対してもっとも厳しく（金水ほか 2014）、「方言コスプレ」に対する受けとめ方もネガティブであるとされている（田中 2011a）。これらは自身の方言への愛着の高さ所以の行動（友定・陣内 2004; 井上 2009）であると同時に、関西方言話者にとってのアクセントの重要性をうかがわせる事例である。

では実際に関西方言話者が親しい友人を前にしたとき、相手が他地域出身者であったとしてもアクセントを変えることは全くないのであろうか。また、このような場面での運用は、相手が同じ関西地域出身の友人である場合とどのように異なり、あるいは一致するのであろうか。本章はこの2つの異なる場面間におけるアクセントの運用の在り方について、分析を試みるものである。

本章は以下の構成に従って進める。まず2節でアクセントの運用を分析するうえでの方法について検討し、本研究における枠組みを提示する。続く3節で使用実態を俯瞰的な視点から検討し、4節で話者ごとに個別的に分析する。5節ではそれらの実態から導き出された関西出身若年層の切換えの特徴について、引用発話におけるアクセント使用の視点から考察を加え、6節で本章のまとめを行う。

2. 分析方法

関西出身若年層 X・Y・Z の〔他郷〕と〔同郷〕におけるアクセントの運用について検討するにあたり、本章では岩根（1998）及び高木（2006）で用いられた「方言文節量」の手法を援用する。本節ではこの手法の概要について説明し（2.1 節）、それを踏まえたうえでの本研究における枠組みを提示する（2.2 節）。なおアクセントの判断基準として、関西方言における京阪式アクセントについては中井（2002）を、標準語における東京式アクセントについては金田一・秋永（2001）及びNHK 放送文化研究所編（2016）を参照した。

2.1. 方言文節量

「方言文節量」とは談話全体に占める方言量について、文節を単位に算出する方法のことであり、総文節数に対する方言文節数の比率から、その談話がどの程度方言的か否かを測るためのものである。この方法を提示した岩根（1998）は、

- ① 形態的に方言形であるものが1つ以上含まれ、かつ方言アクセントで実現されている場合

- ② 形態上は標準語と同形だが方言アクセントで実現されている場合
- ③ 形態・アクセントが標準語と方言でいずれも同形だが、同一発話文中の他の文節が方言文節である場合

において該当する文節を「方言文節」として認定し、形態とアクセントの2つの側面から総合的に文節を判断しようとした。

高木（2006）はこれに改良を加え、形態面から判断される方言文節とアクセント面から判断される方言文節を区別し、前者を「方言 F (=Form) 文節」、後者を「方言 A (=Accent) 文節」とした。またこれらに該当しないものをそれぞれ「非方言 F 文節」、「非方言 A 文節」とした¹⁾。形態面とアクセント面を区別することで、岩根（1998）では扱われなかった

- ④ 形態上は方言形を含んでいるが東京式アクセントで実現されている場合

- ⑤ 東京式アクセントでも方言アクセントでもない語を含む場合

も含め、すべての文節の網羅的な分析を考慮に入れたものといえる。

こうした方言 F・非方言 F などの形態面を基準に判断する文節と、方言 A・非方言 A などのアクセント面を基準に判断する文節について、高木（2006:158-160）では次のように定義されている。

- ⑥ 方言 F 文節：方言形が1つ以上含まれる文節

例) 私 全然 わからん²⁾。

非方言 F 文節：標準語形や共通形だけで構成される文節

例) 私 全然 わからない。

- ⑦ 方言 A 文節：京阪式アクセントで実現されている文節

例) 私 全然 [わから] ない³⁾。

非方言 A 文節：京阪式以外のアクセントで実現されている文節

例) 私 全然 わ [から] ない。

また、形態・アクセントともに標準語と方言で同形である場合に、岩根（1998）は同一発話文中の他の文節の性質によって当該文節が方言文節か否かを判断した(③)のに対し、高木（2006:160）は次のように規定した。

- ⑧ 当該文節内の方言形の有無によって方言 A 文節か否かを判断する

例) お【と】 うさんやと 思う。 ⇒ 方言 A 文節

お【と】 うさんだと 思う。 ⇒ 非方言 A 文節

お【と】 うさんと 行く。 ⇒ 非方言 A 文節

以上の基準をもとに談話を構成する個々の文節を分類し、談話全体がどの程度方言的か否かを形態・アクセントの両面から判断した結果、アクセントが関西若年層にとっての「方

1) 各文節について言及する際は、以後「方言 F」「非方言 A」などの略称を用いる。また、形態面から判断する文節及びアクセント面から判断する文節はそれぞれまとめて「F 文節」「A 文節」と呼ぶ場合がある。

2) 例は筆者の作例である。該当する文節をゴシックで示し、形態面における関西方言形には太線を、標準語形/東京語形には二重下線を付した。

3) アクセント表記は沖（2017）に倣い、[を大幅な上昇、] を大幅な下降とする。

言らしさ」を担う要素としてより重要であることが指摘された（高木 2006:168）。

岩根（1998）による方言文節の認定基準をより明確化し、文節を形態面とアクセント面に区別した高木（2006）の手法を本研究でも踏襲することとし、次節ではこの手法を援用した本研究における分析の枠組みについて述べる。

2.2. 本研究の枠組み

前節で整理した通り、高木（2006）は形態面では「方言 F 文節とそれ以外」、アクセント面では「方言 A 文節とそれ以外」というように、「方言」を軸とした分類を行った。これは、談話内における「関西方言らしさ」の現れに焦点を置くためである。

本研究では〔他郷〕と〔同郷〕におけるアクセントパターンの違いに着目するため、「関西方言らしさ」だけでなく「標準語/東京語らしさ」の算出もポイントとなる。したがって本章では非方言 F にあたる文節を「標準語 F」と「共通 F」に分け、さらに関西方言的要素と標準語的要素の両方を含んだ文節を新たに「混交 F」として区別した。また、非方言 A にあたる文節を「標準語 A」と「共通 A」とし、加えていずれにも当てはまらないものとして「その他 A」を設けることとした。各文節の判断基準は以下の通りである。F 文節は⑨に、A 文節は⑩に示した。

⑨ 方言 F 文節：関西方言形が 1 つ以上含まれる文節

例) 先月 旅行 行ってん。

標準語 F 文節：標準語形または東京語形⁴⁾ が 1 つ以上含まれる文節

例) 先月 旅行 行ったんだ。

共通 F 文節：標準語・関西方言ともに同形の成分で構成されている文節

例) 先月 旅行 行った。

混交 F 文節：関西方言形と標準語形/東京語形が併存する文節

例) 先月 旅行 行ってんよ。

⑩ 方言 A 文節：京阪式アクセントで実現されている成分が 1 つ以上含まれる文節

例) これ 【見て】。

標準語 A 文節：東京式アクセントで実現されている成分が 1 つ以上含まれる文節

例) これ 【見て】。

共通 A 文節：標準語・関西方言ともに同じアクセントで実現されている文節

例) さっき 【見た】。

その他 A 文節：いずれのアクセント型にも該当しない成分で実現されている文節

例) さっき 見【た】。

なお⑩の A 文節に関して、実際の談話内の実現形の中にはいずれの文節に分類すべきか判断に迷うものが散見される。たとえば文節の構成成分が一方の変種由来であり他方の変

4) 東京語形を「標準語文節」に含めることには異論が出るかもしれないが、本章では東京語形と標準語形を関西方言形の対立軸として捉えたいため、便宜上区別せずいずれにも「標準語文節」のラベルを付す。

種には存在しない場合、あるいはそれと両変種に共通のものが組み合わさって文節を成しているような場合である。本章ではこのような成分あるいは文節について、当該変種において日常語として用いられているか否かという観点から、方言/標準語 A であるかその他 A であるかを判断する。以下の例を参照されたい。

- (1) それは あ [か] ん。 【LHL (従来は HHH)】 ⇒ その他 A
 (2) 今日は し [んど] い。 【LHHL (従来は LLHL)】 ⇒ 標準語 A
 cf. 今日は た [のし] い。 【LHHL (東京式)】

(1) (2) は関西方言由来の語形が京阪式以外の型で実現された例である。標準語にはもともと存在しない語形であるため、本来であればいずれも「その他 A」と判断すべきところであるが、(2) の語形〈しんどい〉に関しては近年首都圏を中心に全国的に広がりを見せていることから(田中 2005)、他地域出身者の日常語として認定する。日常語であるとしたうえで(2) の実現形をみると、cf. に挙げたような〈楽しい(た [のし] い)〉や〈嬉しい(う [れし] い)〉などの他の 4 拍形容詞の標準語におけるアクセント型(東京式アクセント)と同様の型で実現されている。したがって(2) は標準語 A と認定できるものと考えられる。一方で(1) の〈あかん〉のように関西地域での使用が根強く、未だ全国的な日常語としての地位までには至っていないものについては、関西方言におけるアクセント型(京阪式アクセント)での実現形以外は「その他 A」に含めることとする。

また、前節で述べたように形態・アクセントともに標準語と方言で同形の場合、高木(2006)は同文節内に方言形があればその文節を方言 A と規定している。しかしこれは、「京阪式アクセントで実現されている文節」であるかどうかをアクセントからではなく形式から判断したことになるため、厳密な分類とはいいいく。そこで本研究では上記⑩にも示したように「共通 A」の枠を設け、標準語と関西方言でアクセントが同形となるものはこの枠に入れることとした。詳細は以下の通りである。

- ⑩ アクセント面において標準語と関西方言とで同形になる場合は、形態面が何かを問わず「共通 A 文節」に入れるものとする

- 例) お [と] うさんやと 思う。 ⇒ 方言 F・共通 A
 お [と] うさんだと 思う。 ⇒ 標準語 F・共通 A
 お [と] うさんと 行く。 ⇒ 共通 F・共通 A

以上に述べてきた枠をもとに、次節では関西出身若年層 X・Y・Z が各場面の談話のなかで方言文節及び標準語文節をどの程度実現させているのかについて、形態・アクセントの両面から明らかにしていく。なお引用発話については 5 節で別途詳細を述べることとし、3 節と 4 節の分析からは除外するものとする。

3. 形態面・アクセント面における文節量の場面間比較

本節では 2.2 節の枠組みを基準に、各場面でのどの種類の文節がどの程度実現されているのかを俯瞰的に検討する。次頁図 5-1・図 5-2 は各場面における全話者分の文節量、すなわち総文節数に対する当該文節数の割合を形態面とアクセント面に分けて示したものである。

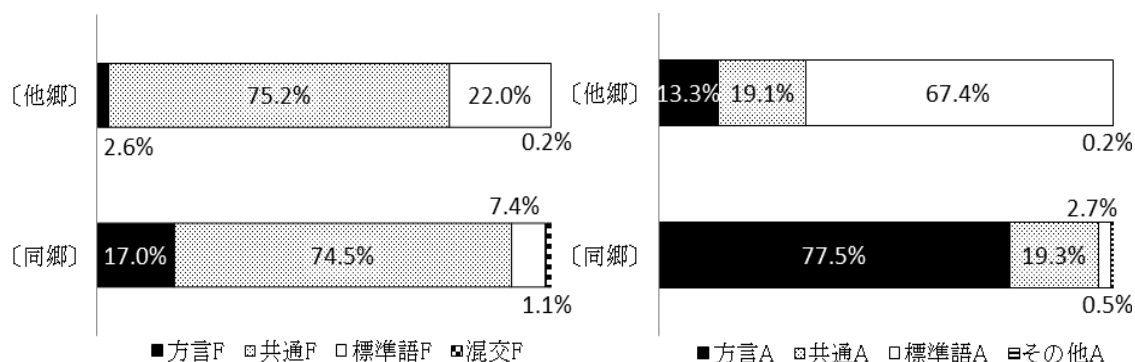


図 5-1 形態面 (F) の文節量内訳

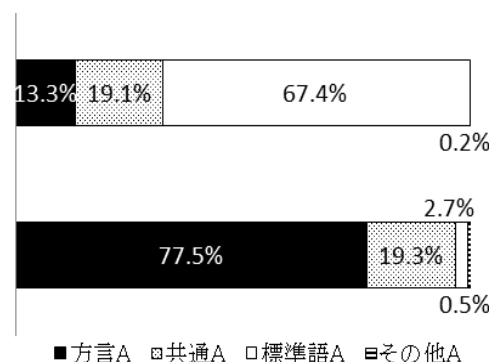


図 5-2 アクセント面 (A) の文節量内訳

図 5-1 によると、形態面では〔他郷〕〔同郷〕の別に関わらず共通 F が多数を占めていることがわかる。一方図 5-2 のアクセント面では共通 A は両場面とも 19%程度にとどまり、代わって方言 A や標準語 A など、両変種に固有の成分を担う文節が各場面で大勢を占めている。これは談話における「方言らしさ」や「標準語らしさ」が形態面よりもアクセント面に現れやすいことを示唆する結果であり、高木（2006:168）の指摘とも合致する。

ただし、高木（2006）における関西若年層の方言 F 文節量が平均 30.7%、方言 A 文節量が平均 91.3%であったのに対し、X・Y・Z の〔同郷〕における方言 F 文節量は 17%、方言 A 文節量は 77.5%といずれも大幅に低くなっている。文節の認定基準の違いが影響しているものと思われるが、共通語化の進行が影響している可能性もある。

次に、形態面・アクセント面それぞれの文節量を場面間で比較してみたい。形態面については〔他郷〕では標準語 F が 22%、〔同郷〕では方言文節が 17%を占めている。先述の通り形態面では共通 F が多いため、これらの割合は全体からすると少ないようにみえるが、反対に〔他郷〕における方言 F や〔同郷〕における標準語 F がいずれも 10%に満たないことを考えると、場面間で切換えがなされているものと判断できる。

アクセント面に関しては〔他郷〕では標準語 A が、〔同郷〕では方言 A が 70%割前後を占めるのに対し、〔他郷〕での方言 A 及び〔同郷〕での標準語 A の割合は低くなっている。この結果から、アクセント面は形態面以上に場面による切換えが顕著であるといえる。

4. 話者別にみるアクセントの切換えの実態

3 節では形態面及びアクセント面それぞれの文節量を算出し、X・Y・Z の場面間の切換えの全体像を提示することを試みた。本節では話者個々人の切換えの詳細に迫ることとし、具体的には形態面における各文節（方言 F・共通 F・標準語 F・混交 F）がどのアクセント型（京阪式・共通・東京式・その他）で実現されたかという点に着目して分析を行う。

以下、X・Y・Z の順に節を設け、それぞれのアクセントの実現の仕方について述べていく。なお、本節以降の各用例において注目すべき文節は下線で示すこととし、京阪式アクセントによる実現を実線で、共通アクセントによる実現を点線で、東京式アクセントによる実現を波線で、その他のアクセントによる実現を二重下線で示す。

4.1. X の場合

まず本節では X を対象に、そのアクセントの実現の仕方に注目する。以下の表 5-1 は X の形態面における各文節が、京阪式・共通・東京式・その他のうち、どのアクセント型で実現されているかを場面別に示したものである。網掛け部分は当該場面での実現が期待される型を指す。

表 5-1 X の F 文節におけるアクセント内訳

	〔他郷〕				〔同郷〕			
	京阪式	共通	東京式	その他	京阪式	共通	東京式	その他
方言 F	－	17	6	－	221	18	－	2
共通 F	29	374	1684	4	780	232	16	6
標準語 F	4	71	438	－	56	23	1	－
混交 F	－	－	3	－	17	1	－	－
計	33	462	2131	4	1074	274	17	8

合計欄によると〔他郷〕では東京式が、〔同郷〕では京阪式が多数を占めており、全体の傾向として X は場面間でアクセントを切替えていることがえる。特に〔他郷〕での京阪式（33 例）や〔同郷〕での東京式（17 例）のように、当該場面では本来的に使用が期待されないアクセントの実現数においても後述の Y や Z と比べて少ないことから、X は三者のなかで切替え方がもっとも明瞭な話者であるといえる。

続いて F 文節ごとのアクセント使用をみる。まず方言 F に関しては、〔同郷〕ではその大半が京阪式で実現されているのに対し、〔他郷〕では東京式での実現例が複数観察された。

(3) 155X : だ] から そ [つろんで な] ンか し [んど] い お [も] いを し [な] かったって ゆっ [て] た。

(だから卒論でなんかしんどい思いをしなかったって言った。)

〈X〔他郷〕東京式〉

(4) 783X : え [いがを みた] いたか ゆっ [た] ら え [いが み] せてく [れた] りとか。

(映画をみたいとか言ったら映画みせてくれたりとか。)

〈X〔他郷〕東京式〉

(3) (4) の下線部の文節はそれぞれ〈しん [ど] い〉、〈[ゆっ] たら〉が本来的なアクセントだが、3 節でも述べたように、これらは近年関西地域以外にも浸透がみられる項目である（田中 2005:171）⁵⁾。このように現在では全国的に使用されうる形式であることが、方言 F の東京式での実現を可能にしたと考えられる。

〔他郷〕の方言 F における共通アクセント 17 例はすべて関西方言由来の語〈めっちゃ〉

5) X の〔他郷〕の対者である O_x にも使用が確認できた。

及びその変異形であった。〈めっちゃ〉類の関西方言における従来のアクセントは①めっ[ちゃ (LLH) と②めっちゃ (LLL) の 2 種類だが、①は近年首都圏を中心に全国でも用いられる型と思われることから、本章では①を共通、②を京阪式として扱う。ただし後続語とのつながりで考えた場合、次掲 (5) (6) のように本来の関西方言であれば②になるところを①で実現された例が少なからずみられた。

(5) 097X : あ [たしも] めっ [ちゃ] 迷っ] てきた。 〈X [他郷] 共通〉

cf. めっちゃ [迷ってき] た。 〈従来の京阪式〉

(6) 625X : めっ [ちゃ] 怖] いよね。 〈X [他郷] 共通〉

cf. めっちゃ [こ] わいよね。 〈従来の京阪式〉

このように、X は単語単位でみると共通アクセントを含む〈めっちゃ〉も、後続語との関係からみると従来現れるべき関西方言の型とは異なる使用を行っていることがわかった。なお後述するが、同様の傾向は Y・Z にもみられた。

続いて共通 F に示された X のアクセントの内訳をみると、両場面ともに共通アクセントも目立つものの〔他郷〕では東京式、〔同郷〕では京阪式が主として用いられており、場面による切換えがなされている様子がうかがえる。一方で、次例に示すように、本来的には使用が期待されない〔他郷〕での京阪式及び〔同郷〕での東京式の使用数が 4 種類の F 文節のなかではもっとも多いのも特徴的である。

(7) 437X : [じゅういちが] つとか な [ん] か 亡 [く なった かた] を い [の] る ための [ミ] サとか。

(11 月とかなんか、亡くなった方を祈るためのミサとか。) 〈X [他郷] 京阪式〉

(8) 198X : 〈店名〉 いっ [かい] 行 って、 [あいてな] かったら、

(〈店名〉 1 回行って、開いてなかったら、) 〈X [同郷] 東京式〉

この点については、共通 F が関西方言あるいは標準語としてのマーカーを持たないため、当該形式にどのアクセント型を付与すべきかの判断を迷わせたことが要因として考えられる。その他のアクセントが共通 F に目立って観察される点も、同様の理由が考えられる。

(9) 905X : そ [れを な] ンか [い] ま [住] ンでる [区] の [な] ンか [せん] きよの と [ころ] に 持っ [てっ] て 開 [けてもらって]、

(それをなんか今住んでる区のなんか選挙の所に持ってって開けてもらって、)

〈X [他郷] その他〉

(10) 854X : 飲み [た] い。《略》 [で] も [いっかい] 飲んでみ [た] い。

(飲みたい。でも 1 回飲んでみたい。)

〈X [同郷] その他〉

標準語 F に関しては〔他郷〕での東京式、〔同郷〕での京阪式という本来的な期待に沿った実現の仕方が遵守され、該当しない例は両場面を通してわずかであった。なお、形態的に標準語形であるにもかかわらず〔同郷〕では京阪式で実現されている例が多いのは、間投助詞サ・ネや確認要求形式ジャナイ、関西方言の語形「エエ」に対応する「イイ」など、近年関西地域においても使用が浸透している形式を含む文節が多い点が要因として考えられる。

- (11) 212X : 〔これサ〕ー 普通 〔に バックグラ〕 ウンドとして 〔聴ける〕 ん？
 (これさー、普通にバックグラウンドとして聴けるん？)

〈X〔同郷〕京阪式〉

- (12) 922X : え あ 〔と〕 なに 〔が〕 い 〔い〕 ？ 〔カ〕 メラ。
 (え、あと何がいい？カメラ。)

〈X〔同郷〕京阪式〉

Xは〔同郷〕において、形態的に標準語形であってもアクセントを京阪式にすることで〔同郷〕という場面らしさを演出している。他方、先の方言Fにおける記述でも述べたように、〔他郷〕においては形のうえで方言形であっても、東京式にすることで〔他郷〕らしさを生み出している。Xにとってアクセントは「当該場面らしさ」を引き出す重要な要素であるということができるだろう。

最後に混交Fでのアクセントの実態について述べておく。混交Fの用例は少なかったが、共通Fや標準語Fと同様に〔他郷〕では東京式、〔同郷〕では京阪式でほぼ実現されていた。関西方言と標準語双方の要素が併存するという形態的環境においても、それをどのアクセントで実現するかについては各場面で明確に決められていることが明らかになった。

- (13) 773X : 〔も〕 う ぜ 〔んぜんだ〕 わ。 ゆ 〔るす〕 ぎた。
 (もう全然だわ。ゆるすぎた。)

〈X〔他郷〕東京式〉

- (14) 954X : 〈アプリ名〉さ ー 〔その色の や〕 つが 〔みつからん〕 のよね。
 (〈アプリ名〉さー、その色のやつがみつからんのよね。)

〈X〔同郷〕京阪式〉

ここまで、Xの各F文節におけるアクセントの実現形について個別的に検討した。文節の種類によって微妙な違いはあれ、Xのアクセントは場面間で比較的明瞭に切換えられていることが明らかになった。

4.2. Yの場合

続いて本節では、Yの各F文節におけるアクセントの実現パターンについて検討する。Yのアクセントの分布を場面別に示すと、次掲表5-2のようになった。

表 5-2 YのF文節におけるアクセント内訳

	〔他郷〕				〔同郷〕			
	京阪式	共通	東京式	その他	京阪式	共通	東京式	その他
方言F	4	7	17	－	479	46	1	－
共通F	48	469	1438	7	1572	436	70	11
標準語F	6	78	681	3	126	30	6	－
混交F	－	－	4	－	18	－	－	－
計	58	554	2140	10	2195	512	77	11

合計欄によると〔他郷〕では東京式が、〔同郷〕では京阪式が中心に現れており、Y も X と同様に場面間の切換えが明瞭なタイプであることがみてとれる。〔同郷〕での東京式がやや多い点が X とは異なるが、この点については後述する。

まず方言 F でのアクセントの内訳をみてみると、〔同郷〕では京阪式での実現が多数を占めるが、〔他郷〕では東京式での実現がもっとも多い。〔他郷〕で同様の傾向をみせた X は関西以外の地域にも浸透がみられるものを東京式で主に表していたが、Y の場合はそれらに加え、次例のように関西地域内を中心に使用が認められるものについても東京式で表していた。

(15) 081Y : しょ [一もなくない?] 〈Y〔他郷〕東京式〉

(16) 797Y : ス [タバは な] ンか あ [ほ] あ [ほっぽ] いから [い] い。

(スタバはなんかアホ、アホっぽいいからいい。) 〈Y〔他郷〕東京式〉

方言 F の共通アクセントについては、〈めっちゃ (LLH)〉が両場面を通して複数例観察された。

(17) 155Y : リ [ンパ節] 炎 めっ [ちゃ] 痛] いよね。 〈Y〔他郷〕共通〉

cf. めっちゃ [い] たいよね。 〈従来の京阪式〉

続いて共通 F におけるアクセントの実現形については、〔他郷〕では東京式、〔同郷〕では京阪式を中心とした切換えがみられた。これは X の傾向とも一致するが、Y の〔同郷〕は東京式の値が 70 例と、X の 16 例に比べややまとまった値が現れている。この 70 例のうち 23 例は、役職名など日常語としては用いられにくいと思われる用語で占められていた。以下がその例である（該当箇所をゴシックで示す）。

(18) 339Y : か [んじ] 長 ラ [イブ係] 長 企 [画係] 長 みたいな。 こ [うほう係] 長みたいな。 か [かり] ちょうの ... [や] つらが [バッシングして
る] け そい [つ] らを ... [よ] うは。

(幹事長、ライブ係長、企画係長みたいな。広報係長みたいな。係長のやつらがバッシングしてるわけ、そいつらを、要は。) 〈Y〔同郷〕東京式〉

こうした役職名は Y の所属するコミュニティ（大学のサークル）内で使用されている専門用語とみられることから、Y はこれらを移住後に用いるようになった（習得した）と考えられる。そのため〔同郷〕で話題にする際にも、習得した専門用語をそのまま、ある種引用する形で用いたことにより、東京式が現れたものと推察される。なお (18) をみると、こうした役職名を含んだ文節を除くほかの文節については、いずれも共通アクセントあるいは〔同郷〕の期待形式である京阪式で実現されていることがわかる。

標準語 F に関しても方言 F・共通 F と同じく〔他郷〕では東京式、〔同郷〕では京阪式が大半を占めた。なお形態的に標準語形であることは本来、京阪式が実現しにくいことが予想されるが、Y の〔同郷〕の京阪式 126 例は X と同様、間投助詞サ・ネや終助詞ヨ、確認要求形式ジャンイなど、関西地域にも浸透されてきた形式を含む文節が多数を占めた。

(19) 319Y : ほんま [は] そ [こ] に [おりた] かった 子が かわい [そ] う
ジャンイ? 〈Y〔同郷〕京阪式〉

混交 F については、〔他郷〕では東京式のみ、〔同郷〕では京阪式のみで実現されており、形態面から分類した 4 種類の文節のなかでは切換えがもっとも明瞭に示されていた。

- (20) 541Y : わ [か] んじゃない? あ〔んな〕んだから。 [きょ] うとって こ
〔んな〕んじゃん。
(わかんじゃない? あんなんだから。京都ってこんなんじゃん。)

〈Y〔他郷〕東京式〉

- (21) 964Y : そ [こ] で [わかってる ひ] とに [教えら] れても [そのひ]
とは 〔わかってる〕んやからさ。
(そこでわかってる人に教えられても、その人はわかってるんやからさ。)

〈Y〔同郷〕京阪式〉

以上、本節では Y のアクセントの実現パターンについて検討した。Y は X と同様に場面間でアクセントを明瞭に切換えるタイプである。ただし、特定の分野に特化した非日常的な専門用語については切換えず、習得先の東京式を維持するという特徴がみられた。

4.3. Z の場合

最後に本節では Z を対象に、各 F 文節でのアクセントの現れ方について検討してみたい。次掲の表 5-3 は Z のアクセントの内訳を示したものである。

表 5-3 Z の F 文節におけるアクセント内訳

	〔他郷〕				〔同郷〕			
	京阪式	共通	東京式	その他	京阪式	共通	東京式	その他
方言 F	121	25	4	－	238	35	6	1
共通 F	713	383	725	3	1062	321	58	10
標準語 F	106	64	268	－	161	37	11	2
混交 F	6	1	3	－	26	6	－	－
計	946	473	1000	3	1487	399	75	13

Z の全体の傾向としては、〔他郷〕での京阪式（計 946 例）や〔同郷〕での東京式（計 75 例）など、当該場面で本来的には現れにくいアクセントの数がやや目立つ。このことから、先の二者に比べ、切換えの程度が比較的緩やかであることがみてとれる。

F 文節ごとに個別的にみていくと、まず方言 F に関しては〔他郷〕でも〔同郷〕でも京阪式を中心に用いている。なお Z は〔他郷〕での方言 F の値自体が三者のなかでもっとも高いが、その大半が京阪式での実現である。これは京阪式の出にくい〔他郷〕という環境であっても、方言的要素を含む文節に京阪式以外の異なるアクセントを付与することへのためらいが現れた結果ともいえる。ただ矛盾するようであるが、〔同郷〕での使用をみると、京阪式の出やすい環境でありながら東京式での実現が 6 例あり、X・Y の実現数（そ

れぞれ 0 例・1 例) よりもやや多く現れていることがわかった。以下がその例である。

(22) 758Z : だ [れ] かの けっ [こ] んしきでも やっ [て] たんかなー。

(誰かの結婚式でもやってたんかなー。)

〈Z [同郷] 東京式〉

(23) 312Z : や うっ [とうし] いやんな。

〈Z [同郷] 東京式〉

〔同郷〕では上記のように東京式を使用することがある一方、〔他郷〕では母方言のアクセントである京阪式を固持するという Z の運用は、母方言を残しつつ移住先方言（言語）にも影響された、移住者ならではの特徴といえるだろう。

次に共通 F については、〔他郷〕では東京式、〔同郷〕では京阪式が優勢であり、場面間で緩やかな切換えが認められる。ただし、別のアクセント型での実現数も両場面ともに目立ち、特に〔他郷〕での京阪式は X・Y に比べても非常に多い ((24) 参照)。〔同郷〕での東京式も一定数用いられていることから ((25) 参照)、先の方言 F におけるアクセントパターンに類似した移住者的な特徴が現れている。

(24) 102Z : な [ん] か もう よ [る] でも 空 [あか] るいみたいな [か] んじ。

(なんかもう夜でも空明るいみたいな感じ。)

〈Z [他郷] 京阪式〉

(25) 020Z : [男の] あの [な] か いい 子 [が な] なんか いっ [こ] うえ
やねんけど、

(男の、あの、仲良い子が、なんか 1 個上やねんけど、)

〈Z [同郷] 東京式〉

また、標準語 F も共通 F と同じように実現されたアクセントの分布が場面間で緩やかに異なっている。なお、方言 F の場合は〔他郷〕においても京阪式が保たれる傾向にあることを先に述べたが、標準語 F に関しては東京式の出現が見込みにくい〔同郷〕での実現数が 24 とやはり少なく、Z の場合次例のように、形のうえでは標準語・東京語形であってもアクセントは京阪式が充てられやすい傾向にあることがわかった。

(26) 278Z : [女だ] らけだから [わから] ない。

〈Z [同郷] 京阪式〉

(27) 080Z : え [やっ] ぱ 今日 [さ] ー ま [ゆ] げ ない [ひ] とみたいじ
やない? 《略》 [これがね 浮いてる] でしょ。

(え、やっぱ今日さー、眉毛ない人みたいじゃない? これがね、浮いてるでしょ。)

〈Z [同郷] 京阪式〉

各 F 文節の〔他郷〕での京阪式の実現数が X・Y に比べて多いことも合わせて考えると、Z にとって京阪式の保持は優先順位の高い事項であり、切換えの対象となりにくいことがうかがえる。

混交 F は方言 F 同様に〔他郷〕〔同郷〕を通じて京阪式での実現がもっとも多く、明瞭な切換えがなされたとは言にくい。ただし〔他郷〕では東京式による実現もわずかにみられることから、場面を意識した使用が行われたと解釈できる。

(28) 122Z : [ト] トロみたいな [か] んじ つっ [た] ら あ [れや] けどさ。

(トトロみたいな感じつったらあれやけどさ。)

〈Z [他郷] 東京式〉

(29) 368Z : [で] も [な] ンか [かれてきに] は [な] ンか あ 支 [店が]
ち [がう] ねん [うちん と] こと。

(でもなんか彼的には、なんか、あ、支店が違うねん、うちんとこと。)

〈Z〔他郷〕東京式〉

以上から Z は京阪式/東京式を両場面ともに一定数使用する、切換えの緩やかなタイプであり、先に示した二者とは性格の異なる実現の仕方を行っていることが明らかになった。ただし、Z と X・Y のタイプ間にまったく接点がないかという点、必ずしもそうではない。以下に示す図 5-3 は、Z の〔他郷〕での京阪式/東京式による実現数が、録音時間の経過に従ってどのように推移したかを表したものである。約 60 分の談話を 10 分ずつの計 6 つのブロックに区切り、各ブロックでの実現数及び割合を算出した。

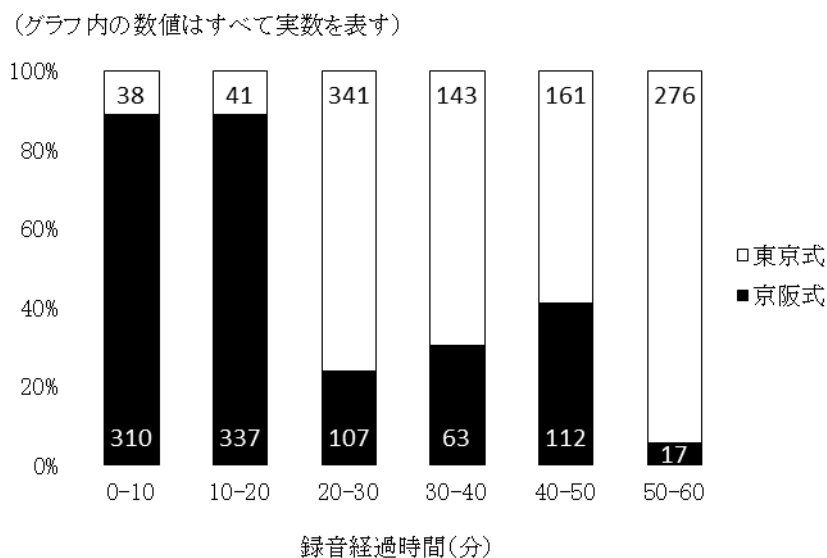


図 5-3 〔他郷〕での京阪式/東京式アクセント使用の推移 (Z)

図によると、京阪式による実現は録音開始直後からの約 20 分間に特に集中してみられ、20 分以降は反対に東京式が半分以上の割合を占めて推移していることがわかる。つまり 20 分以降のみに目を向けると、Z のアクセントの実現パターンは東京式中心である X・Y のパターンと共通しているとも解釈できる。この傾向は第 4 章の図 4-4 に示した文法項目の時間別推移の傾向とも一致していることから、談話の進行に伴って次第に「標準語モード」へと転換していくタイプであることが推察され、録音開始当初から「標準語モード」になっていた X・Y との違いが見出せる。つまり X・Y の二者と Z のタイプの違いは、単に厳密か緩慢かといった切換えの程度にあるというよりも、当該場面で期待されるモードに至るタイミングが関係していると考えられる。こうした Z の場面内におけるスタイル移行の要因については、第 8 章で詳しく論じることとしたい。

ここまで、X・Y・Z それぞれのアクセントの場面別運用について検討した。

5. 引用発話におけるアクセント使用

4 節の結果を改めて整理すると、 $X \cdot Y$ は場面（対者）によって京阪式と東京式を厳密に使い分けるタイプであることが明らかとなった。一方の Z の切換え方は数全体からみると幾分緩慢だが、談話の進行に従い徐々に当該場面で期待されるアクセント使用に移行していくタイプであることが示された。本節では三者のこうしたタイプの違いを踏まえたうえで、切換えのさらなる特徴を捉えるため、これまで分析から除外していた引用発話の文節（引用文節）を対象に、そのアクセントの実現パターンを分析する。

なお本論文では、発話内容の実在・非実在、あるいは引用元の属性如何に関わらず、あたかも実際に発話されたかのような形で実現されたものをすべて「引用発話」とする（詳細な基準は第 6 章 2 節を参照）。本節ではそのうち、他者あるいは自身が過去に実際に発した（と考えられる）発話を引用した文節のみを取り出し、それらにどのようなアクセント型が適用されているか、すなわち $X \cdot Y \cdot Z$ が他者あるいは過去の自分の発話をどのように「模倣」したかについて、模倣対象の出身地域の違いという観点から明らかにする。

まず 5.1 節で三者全体の運用の実態を示したのち、5.2 節では類似の運用をみせた X と Y について、5.3 節では Z について個別的に検討する。

5.1. 模倣対象の違いによるアクセント使用の実態

本節では、引用ないし模倣する対象の属性の違いによって使用アクセントにどのような違いが現れるか、さらにその違いが〔他郷〕と〔同郷〕の各場面ではそれぞれどのように反映されているかについて、三者全体のデータから示すこととしたい。

模倣対象（引用元）については、談話内の文脈等から判断できたものを対象に、関西出身者（以下「**関西人**」）とそれ以外の者（以下「**その他**」）に分類した。なお「**関西人**」には $X \cdot Y \cdot Z$ 本人も含まれるものとする。次掲図 5-4 は、各場面の引用文節における京阪式・東京式アクセントの実現数を模倣対象別に分けて示したものである。

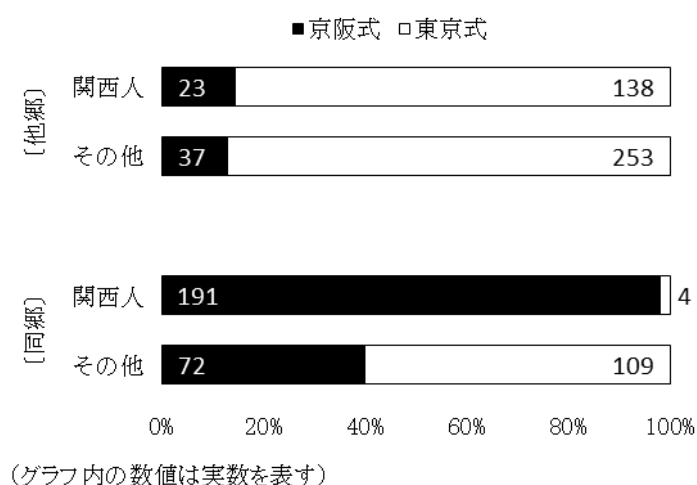


図 5-4 模倣対象別アクセント使用の場面間比較

図によると、〔他郷〕における引用文節は模倣対象の別を問わず東京式で実現されたものが多く、その値はいずれも 8 割近くを占めている。〔他郷〕では関西人の発話を引用する場合であっても東京式の使用が選択されやすいといえる。

対する〔同郷〕では、関西人を模倣する際は京阪式の使用が圧倒している一方で、その他の相手についてはおよそ 6 割（109 例）の引用文節が東京式によって実現されている。つまり〔同郷〕では関西人以外の人の発話を引用する場合、それを京阪式に置き換えるなどはせず、対象の使用したアクセントをあくまでも忠実に模倣・再現しようとする傾向にあると考えられる。この点は、関西若年層が話題の人物の発話を明示するために東京式を用いることがあるという高木（2006; 2008）の指摘にも一致するところである。

以上から X・Y・Z は、引用文節に関していえば〔他郷〕では模倣対象に関係なく東京式を用い、〔同郷〕では模倣対象によって使用アクセントを変えるという、アクセントの運用の仕方そのものを切替えていることが明らかとなった。次節以降では各話者の具体的な運用について検討する。

5.2. X と Y の場合

本節では X と Y の使用についてみていく。以降に示すのは、用例を場面と模倣対象別に示したものである。各用例末尾に話者 ID・場面・模倣対象の別（関西人/その他）を表記し、引用箇所はすべてゴシックで示す。まずは二者の〔同郷〕における例をみてみよう。

(30) 674X : 撮っ [て] い [い] ですかとか [ゆっ] て。

〈X〔同郷〕 関西人〉

(31) 674X : [い] いわよとか [ゆわ] れて。

〈X〔同郷〕 その他〉

(32) 357Y : 自分が ..もっ..と [信頼されとっ] たら 出 [れ] たんやでって [ゆ
ったっ] たけどな。

〈Y〔同郷〕 関西人〉

(33) 161Y : そ [れは い] ま た [のし] んでいる ひ [と] たちが た [のし]
く な [くな] るから [ど] うかと お [も] うとか [言いだ] したらしく
くて。

（それは今楽しんでいる人たちが楽しくなくなるからどうかと思う、とか言い出したらしくて。）

〈Y〔同郷〕 その他〉

上記例から、〔同郷〕での X・Y は関西人の発話（(30) (32)）を模倣する際には京阪式を、その他の相手の発話（(31) (33)）を模倣する際には東京式を用いていることがわかる。特にその他を対象とする場合、その発話を忠実に再現しているであろうことは引用後の X・Y 自身の地の発話（(31)「ゆわれて」、(33)「言い出したらしくて」）が京阪式に戻っている点からもうかがえる。

続いて〔他郷〕での引用発話例を以下に示す。

(34) 951X : [な] んか ま [いと] し] お [んな] じ かんじだよ] とか ゆっ [て]。

（なんか毎年同じ感じだよ、とか言って。）

〈X〔他郷〕 関西人〉

- (35) 071X : そっ 〔ちの ほ〕うが ら 〔く〕 ですよ とか ゆっ 〔て〕。
 (そっちの方が楽ですよ、とか言って。) 〈X〔他郷〕 その他〉
- (36) 191Y : 〔か〕 えって きてんの … 〔ご〕はん 行 〔こー〕 って ゆ 〔われた〕 から、
 (帰ってきてんの、ごはん行こーって言われたから、) 〈Y〔他郷〕 関西人〉
- (37) 029Y : 〔ちよっ〕と お 〔こら〕 れてる から 事 〔務所〕 は 〔い〕 んない ほ
うが 〔い〕 いよー って ゆ 〔われて〕 て、
 (ちょっと怒られてるから事務所入んない方がいいよーって言われてて、)
 〈Y〔他郷〕 その他〉

上記例によると、〔他郷〕ではその他の話者の発話((35)(37))のみならず、関西人の発話((34)(36))までもが(X・Y 本人の地の発話を含め)東京式で引用されている。〔他郷〕ではたとえ引用元の発話者が関西出身者であったとしても、京阪式の使用が許容されにくいことがうかがえる。これは東京式による引用が許容される〔同郷〕の結果と大きく異なる結果である。

語彙・文法項目を取り上げた第4章ではX・Yの運用について、対者が関西方言話者の場合は方言形と標準語形のいずれが出ても構わないとする一方、対者が標準語話者(非方言話者)である場合は標準語・東京語形の使用を遵守し方言形の出現を極力抑える「標準語話者を意識した切換え」となっていることを指摘した。上述の分析から、同様のことがX・Yの引用文節におけるアクセントにも当てはまると思われる。〔他郷〕すなわち対標準語話者場面において、「関西人の発話を引用する」という京阪式の期待される環境でありながら東京式を選択しているという点に、X・Yの〔他郷〕の対者への意識が現れていると考えられる。

5.3. Zの場合

続いてZの引用発話におけるアクセント使用に着目してみたい。以下はZの〔同郷〕における例である。

- (38) 068Z : わた 〔し〕 も 〔前から〕 〔思とっ〕 た けど 〔髪の毛〕 毛 〔金髪のと〕 きは 〔た〕 しかに 〔ちゃ〕 らい な とは 〔思う〕 けど なんで 〔そ
んな 髪の毛〕 毛 〔暗〕 く なっ 〔て〕 も 〔ちゃらい〕 感 〔抜〕 け へんの
って 〔ゆわ〕 れて、
 (私も前から思とったけど、髪の毛金髪のときは確かにチャライなと思うけど、
 なんでそんな髪の毛暗くなってもチャライ感抜けへんの？って言われて、)
 〈Z〔同郷〕 関西人〉
- (39) 336Z : な 〔ん〕 か あ 〔そのは〕 なし 知 って 〔る〕 わ みたい な。 … 〔て〕
か 〔そんと〕 きの 〔写真〕 持 って 〔る〕。 〔み〕 たい ？ って 〔ゆわ〕
れて、
 (なんか、あ、その話知ってるわ、みたいな。てかそん時の写真持ってる。みた
 い？って言われて、)
 〈Z〔同郷〕 その他〉

(40) 340Z: えー 「い」い 言「い方」 す「るね」 みたいな。

〈Z〔同郷〕その他〉

Z の場合は X・Y と異なり、〔同郷〕では模倣対象が関西人・その他の別に関わらず基本的に京阪式で実現されている例が多くみられた ((38) (39) 参照)。その他の相手を東京式で示す (40) のような例も中にはみられたが、数は非常に限られた。

次に〔他郷〕での使用を以下に示す。

(41) 026Z: ぎゃ「くに」 の「こっ」て 「な」に する「の?」って ゆ「われて、
(逆に残って何するの? って言われて、)

〈Z〔他郷〕関西人〉

(42) 206Z: 〈友人名〉が、あ 「宇宙系 好」 きやし あ 「それ」 やったら 「乗
れる 乗れる」 みたいな。 で 「それ」 っ て 「怖」く な 「い」 ? っ て 「聞
いたら、

〈Z〔他郷〕関西人〉

(43) 360Z: と 「もだちに」 ゆっ 「た」 ら あの 「な」 ンか で「んわした」 い
っ て で「んわした」 いっ て ゆ 「え」 ば 「い」 いのよ 「い」 いんだよっ
て ゆ「われた」 から、

(友達に言ったら、あの、なんか電話したいって、電話したいって言えばいいの
よ、いいんだよって言われたから、)

〈Z〔他郷〕その他〉

(44) 368Z: 彼的には なんか そこの バイト内で 付き合うのも 全然 いいと
思ってるし、 なんか で 支「店が 違う ほ」 うが 付き合い「や」 すい
よね みたいな。 っ て ゆっ てきて、

〈Z〔他郷〕その他〉

〔他郷〕では関西人・その他ともに、Z 本人の地のことばも含め東京式で実現される例が比較的多数を占めた ((41) (43) 参照)。ただし (42) のように本来的な京阪式で再現された箇所や、あるいは (44) のように京阪式と東京式が混在した箇所も少なからず散見されることから、X・Y に比べると〔他郷〕でのアクセント使用は幾分多様といえる。

まとめると、引用発話において Z は〔同郷〕ではほぼ京阪式のみを、〔他郷〕では東京式優勢だが京阪式も使用するという切換え方を行っており、細谷 (2004) のいう「方言話者を意識した切換え」を行う従来型のタイプに近い話者といえるだろう。

6. 本章のまとめ

本章では関西出身若年層 X・Y・Z の場面によるアクセントの切換えについて、「方言文節量」の手法を援用し分析・考察を行った。本章で明らかになったことは以下のようにまとめられる。

- a) 三者全体の傾向として、形態面では場面の別に関わらず両変種に共通の形 (共通 F) の使用が、アクセント面では場面によって各変種に固有の型 (京阪式/東京式) の使用が多数を占める (3 節)。
- b-1) X・Y は形態的に方言文節であっても〔他郷〕では東京式あるいは従来の関西方言とは異なる型で、〔同郷〕ではほぼ京阪式を中心として実現されるという切換えの明瞭なタイプである (4.1 節、4.2 節)。

b-2) X・Y の引用発話に関しては、〔同郷〕では模倣対象の違いによってアクセントを使い分けるのに対し、〔他郷〕では誰が対象であっても東京式を中心に用いる「標準語話者を意識した切換え」がなされた (5.2 節)。

c-1) Z は談話全体でみると両場面ともに京阪式/東京式を用いる切換えの緩やかなタイプであるが、談話の進行に伴い当該場面に沿ったアクセント使用へと徐々に移行していくという特徴を持つ。また、本来出現が見込みにくい〔同郷〕での東京式の使用など、首都圏への移住の影響をうかがわせる運用もみられる (4.3 節)。

c-2) Z の引用発話に関しては、〔同郷〕では模倣対象が誰であれ基本的に京阪式が、〔他郷〕では東京式優勢だが一部京阪式も使用される従来型の「方言話者を意識した切換え」がなされた (5.3 節)。

前章では文法項目の切換え方について X・Y と Z で異なるタイプに分けられることを述べたが、本章で取り上げたアクセントも同様に、X・Y のように場面間の切換えが明瞭かつ標準語話者への配慮が目立つタイプと、Z のように切換えが比較的緩慢で方言話者への配慮が目立つ従来型のタイプに分けられることが示された。いずれにしても、対者の違いによる切換えは、関西方言話者にとって「方言らしさ」を体現するのに重要な位置を占めるアクセントにも及びうることで、本章の結果によって明らかになった。これにより、潜在的な標準語の運用能力は語彙・文法項目のみにとどまらず、変化に与りにくいとされる音声 (アクセント) のレベルに対してもダイナミックに発揮されることが示された。

次章以降では対象とする切換え項目を談話レベルにまで広げ、引き続き関西出身若年層 X・Y・Z のスタイル運用の実態に迫ることとしたい。まず第 6 章では、本章 5 節で取り上げた引用発話にさらに注目し、その用い方に場面間でどのような異同が見出せるのかを明らかにしていく。

第 6 章 発話の引用方法にみる運用の実態

本章ならびに第 7 章では談話レベルの項目を対象に、関西出身若年層 X・Y・Z の場面ごとのスタイル運用の在り方に迫る。そして各話者の標準語スタイルの運用能力がどの言語レベルにまで及ぶのかを明らかにする。本章ではその一環として、他者あるいは自身の過去の発話などを現在の発話のなかに取り入れる際の示し方、すなわち「発話の引用方法」に着目し、その場面間の運用の異同について考察する。

1. はじめに

関西出身若年層 X・Y・Z の〔他郷〕と〔同郷〕におけるスタイル運用の実態について、前章までは語彙・文法・アクセントといった個別具体的な言語事象を対象に考察を行ってきた。本章以降の各節では分析項目を談話レベルにまで引き上げ、より大きな言語単位においても、先の個別事象と同様に切換えがなされるのか否かについて検討していく。

まず本章では談話レベルの項目の 1 つとして、「発話の引用方法」に目を向けることとしたい。近年ではことばの地域差に関して、個々の形式に加え、挨拶の仕方やあいづちの打ち方、談話の展開の仕方など、より広範なレベルにおいても違いがみられることが指摘されている（沖 2006; 船木 2016; 琴 2005a ほか）。他者あるいは自身の過去の発話や感情、思考等を引用するという行為もまた例外ではなく、特に関西方言話者はある出来事について、登場人物のことばづかいや声音に至るまで忠実に再現・模倣しながら説明する傾向にあることが指摘されている（真田編 2018:181）。本章では、本研究が対象とする関西出身若年層 X・Y・Z がこうした関西方言話者特有の引用方法をどの程度保持しているのか、また、語彙・文法・音声レベルでは場面間で切換えを行う傾向にあった三者が、発話の引用という談話レベルの項目においてはどのような運用を行っているのかに注目し、考察を行う。

本章の構成は次の通りである。まず 2 節で本章の分析の枠組みとして、分析方法及び具体的な分析項目について述べる。3 節では発話の引用方法における場面間の運用の実態について、話者ごとに分析・考察を行う。4 節は本章のまとめである。

2. 分析の枠組み

本節ではまず、発話の引用方法を分析する際の枠組みについて説明する。はじめに 2.1 節で引用発話の認定基準や引用発話数の量的な算出方法について述べ、続く 2.2 節で 3 節以降の分析の中心となる項目を提示する。

2.1. 分析方法

引用発話が具体的にどのようなものを指すのかを示した認定基準や、談話全体に占める引用発話数の算出方法については、首都圏若年層と関西若年層の発話の引用方法を対照した上林（2019a）にて詳細を述べた。本節ではそこで述べた内容を簡潔にまとめたうえで、本章における分析方法として適用することとしたい。まず 2.1.1 節で引用発話の認定基準を、次に 2.1.2 節で引用発話数の算出方法を整理する。

2.1.1. 引用発話の認定基準

本研究における発話の引用とは、過去に実在した内容であれ、架空の内容であれ、「まるで実際に発話されたかのような形で当該談話内に実現させること」を指す。したがって次掲（1）実際に発された（と思しき）発話のほか、（2）実際に発されたものではない発話、（3）今後発される可能性のある発話、（4）発されることを仮定した発話などのように、「実

際に発されたかのようにみせかけた発話」も引用発話として含めることとする。

- (1) 相談してみたけど、「だめだよ」って言われた。
- (2) あれはさすがに「だめだよ」って思った。
- (3) こんなじゃたぶん、「だめだよ」って言われるだろうな。
- (4) もし「だめだよ」って言われたらどうするの？

また、引用発話と認定するためのより具体的な形式面の基準として、加藤（2010）や藤田（2000）による次の5つのパターンを援用する。

- (5) ガ・ニ・ヲ等の助詞を伴い名詞句としておさまるもの。
例）「バカヤロー」には、正直おどろいたよ。
- (6) もっぱら言い切りで、動詞的述語句としておさまるもの。
例）ヒゲの男が、「オイ、コラ」。
- (7) 引用句「～ト」によって導入されるもの。
例）誠は、「こんにちは」と言った。
- (8) 引用的提示句「～トハ」によって導入されるもの。
例）この忙しい時に「帰りたい」とは何事だ。
- (9) 引用的連体句「～トイウ」によって導入されるもの。

例）「武蔵が来たぞ」という声／「負傷者が三人出る」という騒ぎ

なお（9）の後者の例のように実際の発話形式とは考えにくいものに関しては、引用発話とは認定しないこととする。ただし次掲（10）の下線部のように、終助詞やフィラー、ダロウ・デハナイカ・カナなどのモダリティ形式の挿入、あるいは声音や語末音の長さの変更など、実際の発話に相当するマーカーが確認された場合には、引用発話として認めることがある。

- (10) 「あ、負傷者が三人出たよー」っていう騒ぎ

引用発話に関わる術語については加藤（2010）を援用し、引用されたことばを表す部分を「引用部（次例下線①）」、それに後接する「ト」や「ッテ」、「ミタイナ¹⁾」などの諸形式を「引用標識（下線②）」、さらにその後続く述語にあたる箇所を「述部（下線③）」と呼称する。

- (11) 誠は、「①こんにちは」②と ③言った。

2.1.2. 引用発話数の算出方法

続いて本節では3節以降の量的分析に備え、談話全体に対する引用発話の出現頻度の算出方法について簡潔に述べる。

まず、分析は「発話」を単位に行うことを前提とする。発話の認定基準については談話内の「実質的発話」の数値化を試みたカーター他（2013）を参照・援用した。その手法は

1) 発話や思考内容を「ミタイナ」によって直接引用的に提示する用法については前田（2004）やメイナード（2005）にも指摘があり、談話内での引用発話を捉えるうえで有効な標識であると考えられる。

談話内の各文あるいは複文にみられる述語（終止形、テ形、コピュラ等を含む）をカウントするというものであり、本章ではこれに加え、質問や同意要求等への回答としてのあいづちや、疑問文や聞き返し等による上昇調のイントネーションを伴うものについてもそれぞれ一発話として数える。なお、あいづちの繰り返し（「うんうん」「そうそう」など）は個々に区切らず、一発話とする。また発話が途中で遮られるなど、文として不完全なものについては分析から除外する。

以上の方法を本章で用いる実際の談話例に当てはめると、次の（12）のようになる。下線を施した箇所は、上述のカウントすべき要素を表す。これらの要素を引用部として含む一文全体を「引用発話」とし、**ゴシック**で示した。発話間は「/」で区切り、各ターン末にそれぞれの「引用発話数 / その他の発話数 / 総発話数」を示した。なお、以降の各用例はみやすさを考慮し、文節ごとの分かち書きとしている²⁾。

(12) 349K2 : んで その 他 の サークルでは 出させてもらえるらしいねん。 /

あっち なんで **俺** こっちで 出れないんだろうみたいな。 /

一番 下手くそな サークルやのに / **なんで** **俺** **ここで**

出れないんだろう / つって。 / (2 / 3 / 5)

350K1 : 浮くし。{笑い} / (0 / 1 / 1)

351K2 : うん。 / **でも** **もう** いいのー / つってた。 / **もう** いいのー。 /

そんな いいんかーと / 思って あたしは。 / そうかそうかと /

思って。{笑い} / **俺**はね **だから** **自分が** 認めてもらえる

とこで いたいから / **それで** いいのーつて。 / (6 / 4 / 10)

352K1 : まー 間違い ないやろ。 / (0 / 1 / 1)

以上から、(12) の総引用発話数は 8、その他の発話の総数は 9、総発話数は 17 となり、(12) に占める引用発話数の割合は $8 \div 17 \times 100 \div 47.1\%$ と算出される。これは (12) の約半数が引用発話によって占められていることを表す。

2.2. 分析項目

本節では関西出身若年層 X・Y・Z の発話の引用方法における場面間の運用の実態を探るための具体的な分析項目について検討する。

先にも触れたように、上林（2019a）では首都圏若年層と関西若年層の発話の引用方法を対照し、相違点の抽出を試みた。明らかになった両地域の談話（それぞれ「**首都圏談話**」「**関西談話**」とする）の引用方法の違いは以下の点にまとめられる。

- a) 関西談話は首都圏談話に比べ、引用発話の使用頻度が高い。
- b) 引用発話のタイプ³⁾に関して、関西談話の〈想像引用〉の使用が首都圏談話よりも

2) 文節の切り出し方については第 3 章 6 節参照。

3) 主に次の 3 つのタイプが得られた：

① 〈実際引用〉：過去に実際に発された（と考えられる）発話を模倣・再現したもの

例) 今日の 子 も んー なんか こっちから しゃべりかけて / あ サッカー部なん

相対的に多い。また、関西談話では〈実際引用〉が、首都圏談話では〈心内引用〉が多数を占めた。

- c) 関西談話では、複数人からなる会話の再現が多く観察された。また、引用の対象が複数人であれ 1 人であれ、引用標識や述部を省略し引用部のみを連続させる使用の仕方⁴⁾が目立った。話題の対象に向けて〈心内引用〉を提示する際にも、引用標識等を省略させた直接的な提示の仕方⁵⁾が多用された。
- d) 首都圏談話では、1 人の発話を単発的に引用する使用が多く、複数人の会話の再現や連続的な引用はあまりみられなかった。引用部のみを連続させた使用も少なく、話題の対象に向けて〈心内引用〉を提示する際は引用標識等を挿入するケースが目立った。

本章では関西出身である X・Y・Z の発話の引用方法に、上記に示した関西談話的特徴がどの程度反映されているのか、あるいは〔他郷〕と〔同郷〕という場面の違いによって両地域の特徴が切換えられるのかどうかといった点に着目する。a)～d)を踏まえ、具体的には次の点を分析項目として設定する。

- A) 引用発話の使用頻度：〔他郷〕と〔同郷〕で引用発話の使用頻度に違いはあるか
- B) 引用発話のタイプ：〔他郷〕と〔同郷〕でどのタイプをどの程度用いているか
- C) 引用の仕方：複数人からなる会話の再現や、引用部のみを連続的使用及び引用標識を省略した〈心内引用〉の直接提示を各場面でどの程度行っているか

3 節ではこれら 3 項目の運用を話者ごとに分析し、X・Y・Z の発話の引用方法における場面間の運用の在り方を検証する。

3. 発話の引用方法における切換えの実態

本節では各話者の〔他郷〕と〔同郷〕における発話の引用方法の異同について、2.2 節に挙げた分析項目 A) ～C) を対象に検討する。はじめに 3.1 節で X の、続く 3.2 節で Y の、最後の 3.3 節で Z の運用についてみていくこととする。

ですかーみたいな。 / んー あたしも やってるんですよーみたいな。 /

- ② 〈心内引用〉：思考や感情などの話し手の心の内が顕在化したもの

例) ま ま コミュニケーションは 取れる 人やなとは / 思ったけど。 /

- ③ 〈想像引用〉：架空の事柄や発話について想像・空想したもの

例) その コップ かわいいわねーみたいな / 感じの おばちゃん状態やわ それ。 /

- 4) 以下がその例である。□内は引用標識あるいは述部を指し、◇は本来であれば挿入されるべき標識や述部が省略された箇所を示したものである。

例) 203Y：みんな ビラ配り 来てください。◇ / みんな 看板 作んの 来てください。◇ / 人手が足りません。◇ / 足りひんの なんですか 知らんの？◇ / なんで みんな けーへんかって / お前らが そうしてるから / 来てへんねん◇みたいな。 / 〈Y〔同郷〕〉

- 5) 以下がその例である。次例は話し手 Ky が、話題の人物 B に不満を持っているという聞き手 A の発話を受け、A に賛同する形で B に対して不満を示す場面である。

例) 266Ky：んな《それなら》 お前【=B】が やれ ◇。 〈Ky〔同郷〕〉

この発話は聞き手 A ではなく、話題の人物 B に向けたものである。本来であれば発話末に引用標識あるいは述部が位置するべきところを、省略することによって Ky 自身の感情や思考を B に直接提示しているようにみせる効果を持つ。

3.1. X の場合

本節では X の運用について検討する。表 6-1 は X の引用発話に関連する種々の値を場面別に示したものである。A) は引用発話の総使用数を、B) は引用発話のタイプ別の内訳を、C) は引用発話全体のうち引用標識や述部が省略されたもの、すなわち引用部のみで構成された発話の数と、標識・述部省略によって話し手の〈心内〉が話題の人物に直接提示された発話の数（注 5 参照）を示す。表内のこれら A) ～C) は 2.2 節に示した 3 つの分析項目に対応するものである。

表 6-1 引用発話の使用頻度及びタイプ別内訳ほか (X)

分析項目	〔他郷〕	〔同郷〕
総発話数	1300	793
A) 総引用発話数 (※1)	113 [8.7%]	43 [5.4%]
〈実際引用〉数 (※2)	55 [48.7%]	15 [34.9%]
B) 〈心内引用〉数	50 [44.2%]	27 [62.8%]
〈想像引用〉数	8 [7.1%]	1 [2.3%]
標識・述部省略数	2 [1.8%]	4 [9.3%]
C) 第三者への直接提示数	0 [0.0%]	0 [0.0%]

(※1) A) の[]内は総発話数に占める各実数の割合を示す。

(※2) B) C) の[]内は総引用発話数に占める各実数の割合を示す。

まず X の引用発話の使用頻度についてみていく。表中 A) の総引用発話数とその割合に目を向けると、〔他郷〕は 8.7%、〔同郷〕は 5.4%との結果が示された。次掲 (13) が〔他郷〕、(14) が〔同郷〕の例である。引用発話をゴシックで示す。

(13) 439X: **で なんか 受験の 前にも なんか ミサを しますとか / ゆって / 教会に 行って / なんか そう 受験 受かるように / みんなに 神父様に お祈り してもらいましょうとか / ゆって / 行って / なんか よく わかんない けど / 唱えて / いろいろ なんか その お祈りして / なんか 神父様に 頭 ぐーって されるって / ゆう 儀式? / よく わかんない。{笑い} /**
 〈X〔他郷〕〉

(14) 392X: **あたしも なんか 1 個 派遣の やつで なんか 飲み会 しますて / なん あ なんか この人の 担当の 現場 入った 人を 飲み会 しますって / あ の フル無視。{笑い} /**
 〈X〔同郷〕〉

〔同郷〕だけでなく〔他郷〕でも一定数の使用がみられる（むしろ〔他郷〕での使用率の方が上回っている）点や、場面間の使用割合にさほど顕著な差がない点などを考慮すると、X にとっての引用発話の使用は、場面間で切替えるべき項目としてはみなされていないものと推察される。

なお、上林（2019a）における関西若年層 4 名の引用発話の平均使用率が 13.6%であった

ことを考えると、X は場面に関わらず引用発話の使用自体が少なく、そもそも引用発話を多用するという従来の関西方言話者の特徴から逸れるタイプの話者であることがうかがえる。

続いて、X の引用発話がどのタイプの引用発話として実現されているか、そこに場面間の相違がみられるかを確認してみたい。表中の B) の各項目をみると、〔他郷〕では〈実際引用〉(以下〈**実際**〉)と〈心内引用〉(以下〈**心内**〉)の値がほぼ同数であった。上林 (2019a) の関西談話では〈**実際**〉がもっとも多くを占めたが、〈**心内**〉の値も決して少なくはなく、両者が拮抗している話者もいた。〈**実際**〉と〈**心内**〉が拮抗するという、関西談話にもみられたこの特徴が X の〔他郷〕に現れたということは、X が関西談話としての特徴を場面に関わらず示していることを意味する。すなわち、X にとっての引用発話のタイプは切替えるべき項目ではないことが示唆される。

同様のことは〔同郷〕での各種タイプの内訳からもうかがえる。表から、〔同郷〕での〈**実際**〉は 34.9%、〈**心内**〉は 62.8%と後者が 2 倍弱程度上回っていることがみてとれる⁶⁾。〈**心内**〉の高さは従来の首都圏談話にみられる特徴であるが、それが関西出身者との場面である〔同郷〕に現れている点から、X の場合、どのタイプの引用発話を用いるかは場面間の切替えに関与しないものと考えられる。

〈想像引用〉(以下〈**想像**〉)については上林 (2019a) の関西若年層の平均使用率が 26.1%であったのに対し X は値の高い〔他郷〕でも 7.1%と、そもそもの値が低い。総引用発話数も同様の少なさであったことを考えると、切替え以前に X の発話の引用方法は関西談話の特徴である「引用発話の使用頻度の高さ」と「〈**想像**〉の使用数の多さ」が場面に関わらず認められない、非関西的使用であると解釈できる。

最後に具体的な引用の仕方について検討する。まず表中の C) をみると、引用標識及び述部を省略した発話数は〔他郷〕で 1.8%、〔同郷〕で 9.3%と比率としては〔同郷〕の方が優勢である。ただし実数としての差は 2 発話しかなく、これを以って切替えがなされていると判断するのは難しい。また、複数人からなる会話の再現や、表 6-1 の最下段に示した標識・述部省略による第三者への〈**心内**〉の直接提示など、関西談話の特徴とされた他の項目については両場面を通じて観察されなかった。

以上から明らかになった点として、X は関西方言話者の特徴とされる発話の引用という行為そのものをさほど行わない話者であることがわかった。一方で、引用が少ないこと自体は〔他郷〕と〔同郷〕で比較的共通している点、あるいは表中の A) や B) の〈**想像**〉など〔同郷〕での出現が期待される項目が反対に〔他郷〕に多くなっている点などを踏まえると、X は必ずしも場面によって「その場面らしい」引用方法に切替えているわけではないことが推察される。

6) X の〔同郷〕に〈**実際**〉が少ないのは、総発話数の少なさが関与していると思われる。〔同郷〕での X は対者 Kx の聞き役にまわることが多く、X 主体のナラティブはさほど観察されなかった。そのため実際の出来事や過去の発話を描写する〈**実際**〉の使用がことのほか少なかったものと思われる。

3.2. Y の場合

続いて本節では Y の引用発話の用い方についてみていくこととしたい。Y の引用発話に関連する項目を場面別に示した表を以下に挙げる。表の見方は表 6-1 と同様である。

表 6-2 引用発話の使用頻度及びタイプ別内訳ほか (Y)

分析項目	〔他郷〕		〔同郷〕	
総発話数	1334		1373	
A) 総引用発話数 (※1)	129	[9.7%]	216	[15.7%]
〈実際引用〉数 (※2)	65	[50.4%]	90	[41.7%]
B) 〈心内引用〉数	41	[31.8%]	88	[40.7%]
〈想像引用〉数	23	[17.8%]	38	[17.6%]
C) 標識・述部省略数	21	[16.3%]	40	[18.5%]
第三者への直接提示数	3	[2.3%]	20	[9.3%]

(※1) A) の[]内は総発話数に占める各実数の割合を示す。

(※2) B) C) の[]内は総引用発話数に占める各実数の割合を示す。

はじめに引用発話の使用頻度について確認する。全発話に占める引用発話の割合(表中 A)) を算出すると、〔他郷〕では 9.7%であったのに対し〔同郷〕では 15.7%と、場面間で約 1.5 倍の違いが現れた。関西方言話者に多いとされてきた引用発話の使用が〔同郷〕の方に目立ち、一方の〔他郷〕ではやや抑えられているとみえることから、Y は〔他郷〕と〔同郷〕で引用発話の使用頻度を切換えている可能性が考えられる。ただし〔他郷〕でも一定数の使用が確認できるため、5 章・6 章で扱った文法項目やアクセントなど比較的顕著に切換えがみられたものと比べると、その切換え方は緩やかである。

次に引用発話のタイプ別内訳として、表中の B) の分析に移る。B) によると、〔他郷〕では〈実際〉の使用が半数を占め、〈心内〉、〈想像〉がその後に続く。一方の〔同郷〕は〈実際〉が〈心内〉をわずかに上回るものの、ほぼ同数である。〈実際〉が多数を占めるという関西談話に顕著な特徴が〔同郷〕だけでなく〔他郷〕にも反映されている点から考えると、Y は〈実際〉を場面に関わらず用いており、切換え項目とみなしていないものと推察される。

また、上林 (2019a) において関西談話と首都圏談話でもっとも顕著に違いが現れた〈想像〉の使用頻度について、Y は両場面とも 17%台と高い頻度で使用していることがわかった ((15) (16) 参照)。この値は関西談話の平均使用率 (26.1%) に迫る高さであり、〈想像〉に関しては両場面を通して関西方言話者的な使用が行われている、すなわち〔他郷〕と〔同郷〕で切換えがなされているわけではないことを示唆する結果である。

- (15) 761Y: 静かで / なんか こう お茶 おいしいわねみたい / コーヒー おいしい
わね / ケーキも おいしいわねみたい / 店だと / 思ったら / ほんと
に もう がしゃんみたい。 / もう 赤ちゃん うわー 泣く、 / おば
あちゃんたち うわーって まだですかって / 叫んで / もう ほんと や
なの。 / (Y〔他郷〕〈想像〉)

(16) 【Ky が進路のことで親と喧嘩したという話を受けて】

749Ky : まー それで 受かったから / よかったけど。 /

750Y : なー ほんまやな。 /

751Ky : もう 落ちたら / 最悪やん。{笑い} /

752Y : もう なくな なくな 私立 行っとった。 /

753Ky : 【自身の親に向けて】 すいません。 / 行かしてください。{笑い} /

754Y : 申し訳ございません。 / 私が 間違っていました。{笑い} /

755Ky : {笑いながら} 殴って / ごめんなさい。 / そう。 / 〈Y〔同郷〕〈想像〉〉

なお(16)をみると、754Yの〈想像〉の前後で対者であるKyもまた〈想像〉を用いていることがわかる(753Ky、755Ky)。このように〈想像〉は対者との間で相互作用的に使用されるケースが目立った。相手の〈想像〉に対し、話し手自身も〈想像〉を用いて対応することによって話の流れや内容に可笑しみを持たせ、談話を円滑に進めるさまがみてとれる。後述するが、同様の事象はZの運用にも見受けられた。

最後に引用発話の具体的な用い方として、表中C)の引用標識及び述部の省略数とその割合についてみていきたい。表によると〔同郷〕での省略率の方がやや上回っているものの、両場面でそれほど顕著な違いはなく、場面間で切り換えがなされているとは判断しにくい。また、上林(2019a)における関西談話の標識・述部省略率が17.3%であった点⁷⁾も考え合わせると、Yの標識・述部省略数(率)は関西談話の特徴に沿うものといえる。つまりYは従来の関西方言話者の引用発話の用い方を踏襲しており、かつその用い方はYにとって場面の違いに左右されるものではないと考えられる。

一方、標識・述部の省略に伴う第三者への〈心内〉の直接提示に関しては、〔同郷〕では20例もの使用が確認できた。(17)はその一例である。

(17) 【S 高校に対する Y・Ky の評価について】

770Y : ただなー ちょっと 勘違い してる やつも 多いからな。 / あたし 〈S 高〉やから みたい。 / は? ϕ / 横 【S 高よりも格上の】〈M 高〉の子 いますけど。 ϕ /

771Ky : 【S 高のレベルは】そこまでじゃない。{笑い} /

772Y : 同じ 駅で 降りてますけど。 ϕ /

773Ky : そう。 / それ 辛いよな。{笑い} /

774Y : 恥ずかしく ない? /

775Ky : {笑いながら} ほんまに。 / 〈Y〔同郷〕直接提示〉

対する〔他郷〕ではこうした第三者に対する話し手の〈心内〉が示される際、次例の□内のように標識や述部の挿入が基本であり、省略されたもの(=直接提示)はわずか3例にとどまった。

7) 上林(2019a)では標識・述部の省略に関して具体的な数値までは挙げていないが、改めて算出した結果、首都圏談話における標識・述部省略数(率)は(総引用発話数441例に対し)27例(6.1%)、関西談話における省略数(率)は(総引用発話数606例に対し)105例(17.3%)であった。

(18) 【電車の遅延による遅刻を認めてくれない教員に対する文句】

381Y : んで 〈Y 線〉は よく 遅れるから / 〈Y 線〉だったら / 23 本 早いの
乗れよ^{つて}。 / でも 〈K 線〉は 遅れないの。 /なのに たまたま 遅
れただけなのに / その 遅延とか だめって / ゆわれてもって / ゆう。
〈Y〔他郷〕〈心内〉〉

(19) 【同上】

391Y : なんか 小言 ゆってくんだよね。 / なんか 結構 大きな 遅刻ですねと
か /ゆってくるの。 / うるさいな—^{みたいな}。 / 今日 雨 降って 〈K
線〉 遅れてんの^{みたいな}。 / うーん。 / じゃあ 〈K 線〉 使って 来て
^{みなよ}^{つて} / すごい ^{思うしさ}。 / 〈Y〔他郷〕〈心内〉〉

Y の場合はこの引用方法に限り、場面間で比較的明瞭に使い分けを行っているといえる。

ここまで、Y の発話の引用方法における場面間の相違について検討した。引用発話の全体数や一部の引用方法の用い方においては〔他郷〕と〔同郷〕で差がついており、場面間の切換えと解釈できる結果が示された。一方で、〈想像〉の使用や標識・述部の省略などについては両場面を通してほとんど差がみられなかったことから、こうしたより細かい項目に関しては場面間の切換えを行わず、関西談話的使用を維持する傾向にあることが明らかとなった。

3.3. Z の場合

最後に本節では Z の引用発話の運用について検討する。次表は Z の総引用発話数・引用のタイプ内訳・標識等を省略した発話数を場面別に示したものである。

表 6-3 引用発話の使用頻度及びタイプ別内訳ほか (Z)

分析項目	〔他郷〕	〔同郷〕
総発話数	1617	1078
A) 総引用発話数 (※1)	272 [16.8%]	206 [19.1%]
〈実際引用〉数 (※2)	163 [59.9%]	86 [41.7%]
B) 〈心内引用〉数	75 [27.6%]	43 [20.9%]
〈想像引用〉数	34 [12.5%]	77 [37.4%]
C) 標識・述部省略数	31 [11.4%]	44 [21.4%]
第三者への直接提示数	0 [0.0%]	1 [0.5%]

(※1) A) の[]内は総発話数に占める各実数の割合を示す。

(※2) B) C) の[]内は総引用発話数に占める各実数の割合を示す。

まず Z の引用発話の使用頻度 (表中 A)) については〔他郷〕が 16.8%、〔同郷〕が 19.1% とやや〔同郷〕が上回るものの大差とまではいえず、関西談話の平均使用率 (13.6%) と比べても、両場面を通じて頻繁に使用されている様子が確認できる。Y は場面に関わらず基本的に引用発話を多用する関西談話的傾向にあるようである。

続いてこれらの引用発話がどのようなタイプによって実現されていたか、表中 B) に注目してみたい。すると、〔他郷〕〔同郷〕ともに〈実際〉の使用率がもっとも高いことがわかる。関西方言話者的特徴である過去の発話や出来事の忠実な再現が両場面を通じて目立つことから、Zにとって〈実際〉の多用は場面間の切換えに関わらない項目であると予想される。

一方、対する〈想像〉の使用に関しては〔同郷〕が〔他郷〕を凌ぎ、その差は倍以上となっている。この結果から〈想像〉に関していえば、場面による切換えがなされたと解釈できそうである。このように架空の出来事等を話す際に積極的に引用発話を用いることによってより臨場感を高めるという戦略は、Zの対者であるKzにも高頻度で確認できた⁸⁾。そのうち複数の例は、ZとKzが同じ話題のなかで互いに〈想像〉を突き合わせる形で実現していた。以下がその例である。

(20) 【無口な初対面の人に対してどのように話すかについて】

560Z : あえて ゆえば? / え なんか しゃべんの 嫌なん? / 嫌や 嫌なんやったら / あかんでみたいな。 / 面接の 練習してんで 今。 / わかる? とか / ゆって。{笑い} /

561Kz : 緊張せんといて一て。{笑い} / 〈Z〔同郷〕〈想像〉〉

上記例では560Zの〈想像〉の量みかけに対し、561Kzもまた〈想像〉を用いて対応している。こうした例は前節のYとKyの談話にも観察されたが、この二者及びZとKzは〈想像〉を互いに駆使することで、主張したい内容により具体性を持たせようとしたものと思われる。〔同郷〕でのZの〈想像〉の多さは、このような対者との相互作用が影響したものと考えられる。

最後に表中C)の標識・述部省略数から、より具体的な引用方法の運用の実態について検討してみたい。C)によるとZは〔他郷〕では11.4%、〔同郷〕では21.4%の引用発話について、引用標識や述部を排した引用部のみの形で実現していることがわかる。以下に各場面の用例を挙げる。実線部と点線部はそれぞれ引用元が異なることを意味する。

(21) 【地元の近くの喫茶店への行き方について】

089Oz : 《略》でも やっぱ 車が ないと / 動きづらい。 /

090Z : あー そうなんやねー。 / 【大阪は】 も すぐみたいな。 /

091Oz : すぐ ある? /

092Z : あ どこ? φ / なんか スタバ 行こ。 φ / おっけ 《OK》 みたいな / 感じ。 /
〈Z〔他郷〕省略〉

(22) 【初対面の人との雑談で何を話すかについて】

597Kz : でも たい ども 体型に 関しては なんか しゃべれんく ない? / も 触れたら / あかんかな。 / なんか。 / あんまり ゆわれへん。 /

598Z : だって Kz さー どっちか ゆうと / 細身やからさ / ゆった (+ら) 嫌

8) Kzの〈想像〉は総引用発話数137のうち37例(25.5%)であった。

味に なるやん。 / なんか ちょっと 太ってきてーφ / それ..全然..太っ
てへんやんとか / なるとさ。 / あれやから。 /

〈Z〔同郷〕省略〉

関西談話の省略率(17.3%)と比べても〔同郷〕ではそれに迫る割合で省略がなされており、関西談話的特徴を有した使用として位置づけられる。一方の〔他郷〕での使用割合がそれに比べてやや控え気味である点を踏まえると、ZはC)の項目に関してもB)の〈想像〉と同様に場面による影響を受けている、すなわち切換えていることが示唆される。

なお(21)(22)の実線部と点線部が示すように、複数人からなる会話を引用部のみの連続によって構築するという関西談話的特徴に関しては両場面で確認されており、そこに切換えはないものと考えられる。また、標識・述部の省略に伴う第三者への〈心内〉の直接提示については〔同郷〕での1例にとどまり、使用自体がきわめて少なかったことから、場面間で使い分けがなされていたかは判断できない。

以上からZの場面間における発話の引用方法を整理すると、引用発話の使用数全体としては〔他郷〕と〔同郷〕でさほど大きくは変わらないものの、関西談話に顕著な特徴である〈想像〉の多用及び標識・述部の省略が〔同郷〕で特に目立つ点から、場面間で切換えがあることは否めない。ただし〔同郷〕での〈想像〉の多用については対者との相互作用的な使用によるところが大きく、Zが場面間で積極的に切換えたとはまでは認定しにくい。両項目とも〔他郷〕においても一定数の使用が確認できることを踏まえると、Zの引用発話の切換えは主体的になされたものとは考えにくい。

4. 本章のまとめ

ここまで、関西出身若年層X・Y・Zそれぞれの発話の引用方法について、場面間でどのような運用が行われたかを検討した。明らかになった各話者の結果を分析項目A)～C)ごとに整理すると次表のようになる。なおB)については上林(2019a)による関西談話と首都圏談話の対照のなかでもっとも違いが示された〈想像〉の使用頻度を代表として挙げている。

表 6-4 引用方法におけるX・Y・Zの運用まとめ

分析項目	X	Y	Z
A) 全体の使用頻度	=	●	=
B) 〈想像〉の使用	=	=	●
標識・述部省略	=	=	●
C) 第三者への直接提示	-	●	-

〈凡例〉● :〔同郷〕に多い = :両場面とも同程度に近い
 - :ほぼ不使用

各話者の運用から明らかになった点は、以下のようにまとめられる。

- a) XはC)「第三者への〈心内〉の直接提示」を除き、いずれの項目も両場面で同程

度の使用頻度であった。このことから、X の引用発話の用い方は場面に関わらず一貫しており、特に切換えは行われていないと考えられる。(3.1 節)

- b) Y は A) 「全体の使用頻度」及び C) 「第三者への〈心内〉の直接提示」が〔同郷〕の方に多く、特に後者は Y にのみ明らかな使用差がみられたことから、場面間で切換ええていることがうかがえる。ただし、〔同郷〕に多いとはいえ〔他郷〕でも一定数使用されている点や、B) や C) の一部のように場面に関わらず使用が同程度の項目もあった点などを踏まえると、切換えの程度としては前章までの個別項目よりも緩やかであるといえる。(3.2 節)
- c) Z は量的には B) 「〈想像〉の使用」や C) の「標識・述部省略」における〔同郷〕での使用が目立つ。ただし対者との相互作用のなかでの使用も少なからずみられたことから、場面間で自ら主体的に運用を変えているとまでは言いきれない。また A) 「全体の使用頻度」が両場面で同程度に近い使用になっている点なども合わせると、明瞭な切換えを行っているとは考えにくい。(3.3 節)

X・Y・Z は語彙・文法・アクセントなどの個別具体的な言語項目においては〔他郷〕と〔同郷〕できわめて性質の異なる運用を行っていた⁹⁾が、本章で示した発話の引用方法に関してはそうした切換えがみられず (X)、あるいはみられたとしても連続的なもの (Y・Z) という、前章までとは傾向の異なる切換え方を行っていることが明らかとなった。以上から関西出身若年層 X・Y・Z が知識として持つ「標準語スタイル」のなかには、発話の引用方法のように談話の進め方に関わる分析単位の大きなレベルの項目は含まれておらず、標準語運用能力の完全な顕在化には至らなかったものと考えられる。三者の標準語運用能力は言語単位のレベルが大きくなるにつれ、発揮されにくくなることが予想される。

この点を裏付けるためにも第 7 章では、談話レベルのなかでもさらに大きな言語単位として談話の構造や展開そのものに目を向け、場面間でどのような異同がみられるかを考察していく。

9) Z は X・Y のように談話開始当初から完全に切換えていたのではなく、談話の進行に従って徐々に当該場面での使用が見込まれる形式の使用が増加していくという切換え方であった。しかし引用発話に関しては、談話後半ほど使用が増加するなどといった時間軸との因果関係は見出されなかった。

第7章 談話の展開方法にみる運用の実態

各論の最後にあたる本章では、談話レベルの分析項目のうち、言語単位のもっとも大きい「談話の展開方法」に着目する。具体的には、談話が展開される際に用いられる談話標識の使用パターンを中心に分析を行い、関西出身若年層 $X \cdot Y \cdot Z$ が場面ごとにどのような談話構造ないし展開を構築しているのか、その異同を明らかにする。

1. はじめに

ことばの地域差に関する議論は近年、語彙や文法形式などの個々の言語項目にとどまらず話の進め方そのもの、すなわち談話の展開方法にも及んでいる。後述するが、談話展開の地域差に着目した久木田（2005; 2010）や琴（2005a; b）は関西方言話者の談話について、接続詞を連続させることによる客観的事実の説明によって展開させていく特徴があることを指摘した。また、会話に「笑い」が伴うことが重視される傾向にあり、いわゆる「ボケ・ツッコミ」の構造が談話内の随所にみられるとしている。この点は一般向けの書物やメディア等においても度々言及されており、関西方言に特有の特徴であるとされることが多い。

ただし、こうした特徴は高年層の関西方言話者同士の談話から導き出されたものが多数を占める。他地域出身者を相手にした場合や若年層同士の談話展開にはどのような違いがみられるのか、あるいは上述の特徴は場面や世代に関係なく普遍的なものなのかといった点については、未だ明らかにされていない部分が多い。本章ではスタイル運用の様相を探る最後の分析項目として談話の展開方法を取り上げ、上述の点について分析・考察を行う。

本章は次の構成に従って進める。まず2節で分析方法について述べる。3節及び4節では場面間の運用の検討に先立ち、東京・関西間の談話展開にみられる相違点ならびに共通点について、先行研究の結果や本研究の別途調査によるデータをもとに整理する。5節では4節までの検討を踏まえた分析の枠組みを示したうえで、関西出身若年層 X・Y・Z の場面間における談話展開の実態について考察する。続く6節で三者の傾向と従来指摘されてきた東京・関西談話の特徴を比較し、三者の運用の位置づけを図る。7節はまとめである。

2. 分析方法

談話の構造や展開方法の分析に関しては、これまで様々な観点や手法が検討されてきた。なかでも、文の内容に関わらず客観的な比較・分析を可能にする項目として「談話標識」に注目する研究が増えつつある。方言談話を対象とした研究においても近年、談話標識の種類や使用パターンを子細に検討することによって、談話間の地域差を明らかにする取り組みが試みられている。

関西若年層の場面間における談話展開の異同に関心がある本章では、一話者につき複数の談話を比較する必要があるため、分析に際し、より客観性の高い指標が必要となる。また、従来の研究によって明らかにされている傾向と比較するためにも、共通の材料（＝談話標識）を用いた分析が適当であると考ええる。以上の点から、本章では各話者の談話標識の使用を主な注目点としたうえで、談話展開の切換えの内実に迫りたい。本節ではまずその前提として、先行研究が示した談話標識とその機能について概観しておく。

方言談話の展開方法における地域性の解明において先駆的とされる久木田（1990）は、談話を一文一文に分けたうえで、①文の内容と②文頭・文中・文末に現れるキーワードとなるものに着目して分析を行った。琴（2003; 2004; 2005a; 2005b; 2018 ほか）は分析における客観性の高さを重視し、久木田の扱った項目のうち②に該当する談話内の情報内容を効

果的に伝達するためのマーカー、すなわち談話標識をより重点的に観察することで各地域における談話展開の特徴の明示化を試みた。

琴の一連の研究における分析方法は概ね次の通りである。まず一人の話者が相手の情報要求に対して説明を行っている、長いポーズで区切られたひとまとまりの説明的談話（1人の話者による1ターン内の発話）を取り上げる。続いて、その談話内で効果的な情報伝達に重要な役割を果たしていると考えられる談話標識を取り出し、それらを機能ごとに分類する。そして、これらの談話標識が談話内のどの位置にどのような順序でどの程度現れるか、さらには各標識の組み合わせとそのパターンの出現傾向について検討する。

琴の取り上げた主な談話標識とその機能について、東京方言談話を例にまとめたものが次の表 7-1 である。

表 7-1 東京方言談話の談話標識とその機能（琴 2005a:4 より一部改変）

談話標識	機能
ダカラ	発話権取得: 談話の最初に現れ、発話権を受ける 発話権維持: 談話の途中に現れ、発話権を維持する
ソレデ ソシタラ ソシテ ソレカラ ソースルト	説明開始: 談話の先頭に現れ、説明を開始する 説明累加: 談話の途中に現れ、説明を累加する
ネ(間・終) サ	引き込み: そこまでの話を相手が理解しているかを確かめ、相手を話のなかに引き込みながら進める
ヤハリ	情報共有表示: 情報の共有を前提に話を進めていることを示す
ホラ	情報共有喚起: 話者と相手が以前共有していた情報や共有可能であると判断される情報について、それを相手に喚起する
デショー(ノ) ネ(感・終)(ノ) ヨネ(ノ) ワネ(ノ) ジャナイ	情報共有確認: 情報の共有を積極的に求め、確認を行う
ネ(感)(ノ)	念押し: 情報の共有を再確認し、念を押す
ウン エ	自己確認: そこまでの話を自分のなかで整理・自己確認し、そうすることで相手も納得させながら話を進める

〈凡例〉

(間): 間投助詞 (終): 終助詞 (感): 感動詞 (ノ): 上昇調のイントネーション

本節ではこのように各標識を談話内での具体的な役割（機能）ごとに分類した琴の手法に概ね従うこととするが、対象とする談話標識については以下の検討を加える。

久木田（1990:4）は東京方言の談話展開の特徴として、文末部分に「ネー」と「ノ」が繰り返し用いられていることを指摘した。特に「ノ」は聞き手に反論の余地を与えずに納得させる効果があり、東京方言の談話展開において重要な位置を占めるとしている。しかし、琴の一連の研究は「ネ（一）」は扱っているものの、「ノ」及びその相当形式を分析の対象とはしておらず、機能についても触れていない。本研究が対象とした関西出身若年層は「ノ」

あるいはそれに相当する方言形式を一定数使用しており、これらの形式も談話展開において何らかの役割を果たしているものと考えられる。したがって本章では「ノ」相当の形式（ワケ、ネン/テンなど）も談話標識として認定し、「ノダ類」と称して分析に加えることとする。なお、久木田（1990）は「ノ」の役割について「主観を交えた状況説明を加えていく」としていることから、本章では「ノダ類」の機能を「主観的説明累加」とした。

そのほか琴の提示した談話標識のうち、カジュアル談話には出現しにくいと考えられるものなどを除き、本章で扱う談話標識とその機能¹⁾をまとめ直すと次掲表 7-2 のようになる。参考として琴（2005a）による東京・大阪方言談話における標識もあわせて提示する。

表 7-2 本章で用いる談話標識とその機能

琴による談話標識		本章における談話標識 (括弧内は具体形式)	機能
東京方言	大阪方言		
ダカラ	ソヤカラ	ダカラ (ダカ、ダーラ、ダカラ) ソヤカラ (セヤカラ、ヤカラ)	発話権取得 : 談話の最初に現れ、発話権を受ける 発話権維持 : 談話の途中に現れ、発話権を維持する
ソレデ ソシタラ ソシテ ソレカラ ソースルト	ホンデ ホンタラ ホレカラ ソースルト	ソレデ (デ、ンデ、ホンデ、ソレデ) ソシタラ (ホシタラ、ソシタラ、シタラ) ソレカラ (ホレカラ、ソレカラ)	説明開始 : 談話の先頭に現れ、説明を開始する 説明累加 : 談話の途中に現れ、説明を累加する
-	-	ノ (ノ、ン) ワケ ネン (ネン、テン)	主観的説明累加 : 話者の主観を交えて説明を加えていく
ネ(間・終) サ	ナ ネ(間・終) サ	ナ (ナ、ナー) ネ(間・終) (ネ、ネー) サ (サ、サー)	引き込み : そこまでの話を相手が理解しているかを確認、相手を話のなかに引き込みながら進める
ヤハリ	ヤハリ	ヤハリ (ヤッパリ、ヤッパ、ヤッパシ)	情報共有表示 : 情報の共有を前提に話を進めていることを示す
ホラ	-	ホラ (ホラ、ホレ)	情報共有喚起 : 話者と相手が以前共有していた情報や共有可能であると判断される情報について、それを相手に喚起する
デショー(ノ) ネ(感・終)(ノ) ヨネ(ノ) ワネ(ノ) ジャンイ	ヤロー(ノ) デショー(ノ) ナ(ノ) ネ(ノ) ヨナ(ノ) ヨネ(ノ) ワナ(ノ) ワネ(ノ) ヤン	ヤロー (ヤロー、ヤロ) デショー (デショー、デショ) ナ (ナ、ナー) ネ (ネ、ネー) ヨナ (ヨナ、ヨナー) ヨネ (ヨネ、ヨネー) ワナ (ワナ、ワナー) ヤン (ヤン、ヤンカ、ヤンナ、ヤンネ) ジャン (ジャン、ジャンカ、ジャンネ)	情報共有確認 : 情報の共有を積極的に求め、確認を行う
ネ(感)(ノ)	ナ(ノ) ネ(感)(ノ)	ナ (ナ、ナー) ネ(感) (ネ、ネー)	念押し : 情報の共有を再確認し、念を押す
ウン エ	ウン エ ハイ	ウン (ウン、ウーン、シー)	自己確認 : そこまでの話を自分のなかで整理・自己確認し、そうすることで相手も納得させながら話を進める

1) 本章では関西出身若年層 X・Y・Z の談話展開の方法を場面間で比較するとともに、従来から指摘されてきた関西方言話者の展開方法との異同について明らかにすることを目的とする。したがって比較の材料となる談話標識の機能については琴の考察に則ることとし、個別的な検討は機会を改めて考えたい。

3. 従来の東京・関西方言談話間にもみる展開方法の異同

本節では5節以降で述べる関西出身若年層 X・Y・Z の場面間における談話展開方法の異同を明らかにするための前提として、そもそも東京方言談話と関西方言談話の談話展開にはどのような違いがあるとされてきたのかを、先行研究の結果をもとに整理しておく。

前節の談話標識やキーワードとなる語句の出現傾向から久木田（1990）及び琴（2005a; b）が指摘した東京方言談話と関西（大阪）方言談話の談話展開のパターンまとめると、以下のようなになる。

表 7-3 東京・関西方言談話の展開パターン

	東京方言談話	関西方言談話
久木田(1990)	①ネー・ノの繰り返し ②ダカラ・ホラ・ネッの多用	①ヘテ・ヘタラ・ホイデ等による説明の累加 ②ンー等による自己確認
琴(2005a; b)	①ダカラによる発話権の取得・維持 ②ホラによる情報共有の喚起 ③デショー等による情報共有の確認 ④ネ・サによる引き込み	①ソレデ等による説明の開始・累加 ②ヤロー等による情報共有の確認 ③ウン・エ・ハイによる自己確認 ④ナ・ネ・サによる引き込み

まず久木田（1990）は東京方言談話の談話展開方法の特徴として、2つの展開パターンを指摘した。第一に客観的な状況説明と主観的な説明・判断を「ネー」と「ノ」という談話標識によって繰り返し述べるパターン、第二に「ダカラ」「ホラ」「ネッ」という談話標識をキーワードに、聞き手を強引に納得させていくパターンである。久木田は客観的状况に感情を込めた主観的な文を交えて進めるこのような展開方法を「主観直情型」と名付け、東京方言談話の談話展開の特徴としてまとめている。

対する関西方言談話に関しては「ヘター」「ヘタラ」「ホイデ」などの順接の接続詞によって説明を累加していく、客観的状况説明の多い展開方法であるとした。加えて、話を引き取り、「ンー」等で自己確認を行う傾向を指摘した。こうした展開方法を久木田は「客観説明累加型」と呼び、聞き手に続きを期待させながら展開する関西方言談話の特色とした。

一方、談話標識の出現傾向を重点的に検討した琴（2005a; b）は東京方言談話の談話展開について、「ダカラ」によって自身の発話権の保有を聞き手にアピールし、「ホラ」や「デショー（ろ）」などで情報共有を強く要求・確認することで積極的に話を納得させていく「他者説得型」であるとした。対する関西（大阪）方言談話に関しては「ホンデ」などで説明を継続しつつ、「ウン」などによって話を自身で納得しながら進めていく「自己納得型」の展開方法であるとし、両談話の対照性を指摘している²⁾。

以上を踏まえ、各方言談話に顕著な特徴ならびに共通する特徴を抽出すると、次の（1）のようなになる。

2) 「祝言のあいさつ」という統一的な性質を持つ談話を用いて各地域の談話構造の解明を試みた沖（2006）は、「東の方言」が自身の感情を吐露的に語るのに対し「西の方言」は出来事の経緯を長く説明する描写的な談話運用を行うとしており、久木田や琴の結果と重なる点を指摘している。

(1) 従来の談話展開の特徴

① 東京方言談話に顕著な特徴

- (①-1) ダカラによって発話権を取得・維持する
- (①-2) ホラによって情報共有を相手に喚起する
- (①-3) ノによって主観を交えて状況を説明する

② 関西（大阪）方言談話に顕著な特徴

- (②-1) ソレデ類によって説明を開始・累加する
- (②-2) ウンによって自己確認を行う

③ 両談話に共通する特徴

- (③-1) ネ・サ・ナ等によって相手を話に引き込む
- (③-2) デショー/ヤロー類によって情報共有を確認する

なお久木田や琴が示したこれらの特徴は、東京方言話者・関西（大阪）方言話者のいずれも高年層の談話から得られたものである。したがって、本研究が対象とする若年層の展開方法とは性質が異なる可能性も否めない。(1)を若年層の特徴として認定することの妥当性を検証するためにも、次節では東京及び関西の若年層談話を対象とした展開パターンについて明らかにしておく。そこで示される若年層の特徴と(1)との擦り合わせを行ったうえで、X・Y・Zを対象とした5節以降の分析に入ることとしたい。

4. 東京・関西若年層の談話展開パターン

東京・関西若年層の談話展開の違いを論じたものは琴（2018）を除くほかはみられず、蓄積途中の段階にある。本節では琴の結果に加え、量的補完の名目も含めた筆者の別途調査による結果をもとに、両地域における若年層の談話展開の特徴を見出すこととしたい。

分析に用いるのは東京・関西出身者各3名ずつ計6名分の談話データである。話者情報を以下表7-4に示す。ここでの関西若年層はいずれもX・Y・Zの〔同郷〕の対者とした。東京若年層についてはXの〔他郷〕の対者Oxのほか、新たにOa、Obを追加した³⁾。

表 7-4 東京・関西若年層の話者情報

話者 ID	性別	調査時 年齢	職業	出身地	外住歴	
東京	0x	女性	21	大学生	東京都杉並区	なし
	0a	女性	27	会社員	東京都世田谷区	なし
	0b	女性	26	会社員	東京都大田区	なし
関西	Kx	女性	21	大学生	和歌山県有田市	18-現在:大阪府
	Ky	女性	20	大学生	大阪府堺市	0-3:大阪市
	Kz	女性	21	大学生	兵庫県宝塚市	なし

3) Yの〔他郷〕の対者Oyは分析に耐えうる説明談話（後述）がみられなかった点、Zの対者Ozは静岡県出身である点を考慮し、分析から除外した。

以後、関西若年層の談話を「**関西談話**」、東京若年層の談話を「**東京談話**」と称する。また、分析に用いる談話例は談話の流れや展開の把握及び比較のしやすさ等を考慮し、対者とのやり取りが少なく一貫したテーマのある説明的場面（1 人の話者による 1 ターン内の発話）のものを扱う。以後、各談話例について言及する際は「**説明談話**」と称する。

以下、まず 4.1 節で談話標識全体の出現傾向について、続く 4.2 節で各談話標識の組み合わせのパターンについて明らかにしたうえで、両地域間の相違点の抽出を試みたい。

4.1. 談話標識の出現傾向

まずは東京・関西出身の各話者がどのような談話標識をどの程度用いていたかについて、量的な検討を行う。次表は、2 節表 7-2 に挙げた談話標識の出現数を話者ごとに示したものである。琴（2004）ほかに倣い、各談話標識の出現数を説明談話の総数で割ることによって一説明談話あたりの平均出現数を算出した。凡例にも示した通り平均出現数を〔 〕内に、各話者の説明談話の総数を話者 ID 横の（ ）内に記載した。

表 7-5 談話標識の出現数

話者 (談話数)	談話標識 と機能	ダカラ/ ソヤカラ	ソレデ/ ホンデ類	ノダ類	ネ・サ・ ナ	ヤハリ	ホラ	デショ/ ヤロ類	ナ・ネ	ウン
		発話権 取得・ 維持	説明 開始・ 累加	主観的 説明 累加	引き 込み	情報 共有 表示	情報 共有 喚起	情報 共有 確認	念押し	自己 確認
東京 談話	0x (7)	2 [0. 29]	11 [1. 57]	4 [0. 57]	2 [0. 29]	-	-	-	-	-
	0a (29)	10 [0. 34]	147 [5. 07]	74 [2. 55]	43 [1. 48]	2 [0. 07]		12 [0. 41]	1 [0. 03]	-
	0b (6)	6 [1. 00]	31 [5. 17]	23 [3. 83]	16 [2. 67]	-	-	2 [0. 33]	-	-
	計 (42)	18 [0. 43]	189 [4. 50]	101 [2. 40]	61 [1. 45]	2 [0. 05]		14 [0. 33]	1 [0. 02]	
関西 談話	Kx (2)	-	3 [1. 50]	4 [2. 00]	4 [2. 00]	-	-	1 [0. 50]	-	-
	Ky (9)	3 [0. 33]	26 [2. 89]	21 [2. 44]	2 [0. 22]	-	-	10 [1. 11]	-	2 [0. 22]
	Kz (13)	7 [0. 54]	20 [1. 54]	17 [1. 31]	17 [1. 31]	-	-	24 [1. 85]	-	6 [0. 46]
	計 (24)	10 [0. 42]	49 [2. 04]	42 [1. 75]	23 [0. 96]	-	-	35 [1. 46]	-	8 [0. 33]

〔凡例〕 話者 ID 横()内:説明談話の数 []内:一説明談話あたりの平均使用数

まず東京若年層の出現数をみてみると、「説明開始・累加」の機能を持つソレデ/ホンデ類の出現数がもっとも多く、三者平均で一説明談話あたりに約 4~5 回用いられていることがわかった。これは説明累加の使用が抑えられているとされてきた従来の東京方言談話の傾向とは対照をなす結果であり、関西若年層のソレデ/ホンデ類の出現数の多さも合わせると若年層全体に共通する特徴とも考えられる。また、「主観的説明累加」の機能を果たすノダ

類や「引き込み」のネ・サ・ナの出現数が次いで多く観察されており、従来の使用傾向に追随する結果が現われている。

一方で、従来の東京方言談話の特徴として挙げられてきた「情報共有喚起」のホラの出現は一例も得られず、また「情報共有確認」のデショー/ヤロー類に関しても Oa に一定数観察されたものの、三者の平均としてはさほど顕著には現れなかった。「発話権の取得・維持」のダカラに関しては、一説明談話あたりの数としては多くないが、三者ともに使用がみられるという点においては、従来の使用傾向が現れているとも解釈できる。

関西若年層の出現傾向のなかでもっとも目立ったのは高年層と同様「説明開始・累加」のソレデ/ホンデ類であり、各話者とも一説明談話につき 1 回以上用いていることが明らかとなった。次いで、東京方言的特徴とされてきた「主観的説明累加」のノダ類も三者に安定して使用されており、従来の関西方言的展開方法の傾向との違いが現れている。「情報共有確認」のデショー/ヤロー類及び「自己確認」のウンに関しては従来通り多用する傾向がみられ、東京若年層との違いが比較的明瞭に現れた。

一方、「情報共有表示」のヤハリや「情報共有喚起」のホラ、「念押し」のナ・ネの使用に関しては一切確認されなかった。また琴（2005）の関西（大阪）方言談話における結果ではもっとも高い平均出現値（[5.48]）を示していた「引き込み」のネ・サ・ナに関しては、三者の平均値が [0.96] と東京若年層の値（[1.45]）よりも低く、頻回に使用されているわけではないことが明らかとなった。

4.2. 談話標識の組み合わせパターン

前節の結果から、東京若年層と関西若年層の談話標識の出現頻度はそれぞれに異なる傾向がみられた一方で、ソレデ/ホンデ類やノダ類のように従来は東京・関西間で対照的な出現傾向をみせていた標識が揃って多用されるなど、両地域に共通する特徴もみられた。ただし、総合的な数値のうえでは共通の使用傾向にあるこれらの談話標識も、談話内における出現位置や他の標識との共起可能性など、より具体的な使用実態においては何らかの違いが存在することも考えられる。そこで本節では談話標識の組み合わせパターンに着目し、特にノダ類に関連するものを中心に、東京若年層と関西若年層の相違点を探ってみたい。

説明談話の展開にノダ類が用いられる際は、主に以下（A）～（C）に示す 3 つのパターンが観察された。

（A）ノダ類のみで終了し、何も後接しないパターン

例）なんか、そう、病院行って、なんかテストみたいなのした^ノ。 【東京】

例）え、なんか、なんかさ、はじめそんな感じや^{ネン}、味が。 【関西】

（B）ノダ類に「引き込み」のネ・サ・ナが後接するパターン

例）結局手数料も入れて 1 万円ぐらいした^{ノネ}。 【東京】

例）で、枠が 3 人とからしい^{ネンナ}。な 結構大手で一。⁴⁾ 【関西】

4) 後述するように（B）は Kx・Ky・Kz からは得られなかったため、ここでは Z の使用例を挙げておく。

(C) ノダ類に「情報共有確認」のデショ/ヤロー類が後接するパターン

例) なんか最後よくわかんなくて、なんかそれこそ子どもに刺されて死ぬ^{ンダ}
^{ヨネ}。 【東京】

例) んで、付き合って、ってゆう話を聞いとっ^{テンヤンカ}。 【関西】

上記 3 パターンの出現頻度を話者別に示したものが次表 7-6 である。

表 7-6 ノダ類に関するパターンの出現頻度

		(A)ノダ類+ φ	(B)ノダ類+ ネ・サ・ナ	(C)ノダ類+ デショ/ヤロー類
東京 談話	Ox	4	—	—
	Oa	53	19	2
	Ob	17	6	—
関西 談話	Kx	3	—	1
	Ky	18	—	3
	Kz	13	—	4

表 7-6 によると、東京・関西談話ともにノダ類に何も後接しない (A) が基本的なパターンとして運用されているが、別の標識が後接する場合に関しては両地域で出現頻度に差がみられた。ノダ類に「引き込み」のネ・サ・ナが後接する (B) のパターンは東京若年層に多く観察されたが、関西若年層からは一例も得られなかった。次掲 (2) の[□]内は東京若年層 Oa の (B) 「ノ+ネ」の使用例である。参考として (A) の箇所にも下線を施す。なお、用例の最左欄の丸数字は意味的に一連のつながりがあると思われる文のまとまりを指し、中央欄の数字はポーズで分けた文の番号を指す (当該手法は琴 2005a; b ほかに拠る)。

(2) 【舞台を観に行ったときの話】

〈東京談話 (Oa)〉

③	6	で、なんかもう 1 人は、もう 1 人じゃない、もう 1 日は、空いてたけどめっちゃ後ろだった ^ノ 。
	7	で、あとあたし通路側がよかった ^{ノネ} 。
④	8	ちょっと遅れるかもしれないから、会社。
	9	で、結局行った日は通路側が 1 個だけたまたま空いてて、で、そこにしたんだけど、
⑤	10	まず、もう S 席はもうない ^ノ 。
	11	で、A 席で 1 階のもう後ろの方だったんだけど。
⑥	12	結局手数料も入れて 1 万円ぐらいした ^{ノネ} 。
	13	「うわ、たかー《高い》」って思って、でもそれ 2 月に取って公演 6 月だった ^ノ 。
⑦	14	で、もう未来みたいな感じ。
	15	で、若干忘れてた ^{ノネ} 。

	16	で、でも一応やっぱ普通に【予定を】携帯に入れてたから、あ、やば（+い）
	17	や、行くこと（+は）覚えてるけど、もう「いつだっけ」みたいな。
⑧	18	で、しかも結局、なんか公演時間か開演時間か。が、
	19	なんか変な時間で 5 時 45 分だった <u>ノ</u> 。
⑨	20	で、あたし定時 5 時 45 分な <u>ノネ</u> 。
⑩	21	だか（+ら）結局 1 時間【会社を】休んで、
	22	で、観る前に、あ、じゃあ〈飲食店 F〉行こうって思って昔 Ob と行った〈飲食店 F〉に行って、
⑪	23	で、その日くそ暑かったんだけど。
⑫	24	で、行って、もうついに〈T 劇場〉デビューをした <u>ワケ</u> 。

(2) から Oa は (A)「ノ/ワケ+φ」と (B)「ノ+ネ」を交互に繰り返し用いていることがわかる。「引き込み」がそこまでの話を聞き手が理解しているかどうか確かめる(琴 2005b:24)働きを持つとされることから、Oa はノによって自身の主張や説明を聞き手に聞かせつつ、ネによって逐一確認をとりながら話を進めるという展開方法をとっていると考えられる。

対する関西談話には先にも述べた通り「引き込み」による確認はみられず、(A) のパターンにあたる「ネン (テン) + φ」の使用が目立った。次掲下線部がその例である。

(3) 【弟の素行の悪さについて】

〈関西談話 (Ky)〉

①	1	今までは、もう今まではお父さんもあほやかからかばい続けて <u>テン</u> 。
	2	かばい続けてるってゆうか、なんてゆうん。
②	3	も、そう、家出しても普通に迎えてあげてたし、ちゃんと。
	4	で、「ごはんも食べー」みたいな。
③	5	その、あんまりが一って怒りはせんか <u>テン</u> 、お母さんほど。
	6	でもこの前とうとうお父さんも怒って。
④	7	それとその、なに、友達関係ごたごたあって、んで、この前もなんか、なんか高校生の、その、友達とつるんでるやん。
	8	そいつらが卒業式に来てんて《来たんだって》。
⑥	9	んで、弟らまだ 2 年やねんけど、その卒業式ん《の》ときに、なんか弟の友達のちょっとおとなしい感じの子が「うわ、またあいつら来てるわ」みたいなことゆったらしい <u>ネン</u> 。
	10	で、それが、その高校生集団の誰かに聞こえたらしくって、んーなら《そしたら》なんか「〈Ky の弟の名前〉、おまえあいつ連れてこい」みたいなんを高校生にゆわれて、でも弟自体は連れて行きたくない <u>ネン</u> 。
⑦	11	ま、なんかされんのわかってるから。

⑧	12	で、「もう無理」みたいな、そう、なんてゆう、弟、その友達も行きたくないってゆうし、その高校生にも挟まれて、なんか弟がいらいらして、んで、それで結局友達のこと殴っ <u>テン</u> 。
---	----	--

「ネン+ナ」や「テン+ナ」ではなく「ネン/テン+φ」の形を連続的に用いていくこうした手法は Kx・Ky・Kz 全員に共通してみられたことから、関西若年層の展開方法の特色ともいえそうである。

では一方で、関西若年層が東京若年層とは反対に聞き手への理解の確認をまったく行わないのかというと、必ずしもそうとはいえない。前掲表 7-6 に戻ると、ノダ類にデショー/ヤロー類が後接する (C) のパターンが東京若年層よりも関西若年層に集中して現れている様子がみてとれる。下記用例の□内が該当の箇所であり、下線部はデショー/ヤロー類が単独で現れた箇所を指す。

(4) 【周囲の就活開始時期の遅さについて】

〈関西談話 (Kz)〉

①	1	んーまに《ほんまに》、ん、「交流広めないとなー」とは思う。
	2	おらんもん。なんか。
②	3	ばりばり就活してる子、周り、周りにおらん <u>ネヤン</u> 。
	4	そう。だから。
③	5	バイト【先の人】も、みんな「あ、3月 (+に) になったらもうそろそろバイト辞めて行くっかなー」みたいな感じやから。
④	6	いや、今、「今が一番大事やで」と思うねん。3月前。
	7	だって3月に、エントリー開始やから、
	8	それまでにはちょっとは、なんてゆうの？
	9	面接練習も、いな、行かなあかんし、
⑤	10	ある程度なんてゆうの、自分の中の軸を決めとかないとさ、
	11	もうエントリーを、エントリーシート何個も書かなあかんからさ、やってられへん <u>ヤン</u> 。
	12	いちいちそれに【時間を】かけてられへんから。
⑥	13	ってなったら、ほんま、「え？やっとけよ」と思うねんけど。
	14	そう、そんなんばっかりやから。
⑦	15	まー、東京《東京進学組》(+は) 結構みんなばりばり【就活をしている】 <u>ヤン</u> 。

上記例「ネ+ヤン」のヤンや単独のヤンなどのデショー/ヤロー類は「情報共有確認」の機能を持つ談話標識であり、琴 (2005) はこの機能を「聞き手に情報の共有を積極的に求め、確認を行う」と説明している。聞き手への働きかけの強さの度合いに多少の違いはあるものの、聞き手にそれまでの話の内容の確認を促し反応をうかがうという点において、「情報

共有確認」は先述の「引き込み」と類似した働きを持つと解釈できる。つまり東京若年層と関西若年層はノダ類を用いた談話の展開に際し、聞き手への確認行為を行うという点では一致がみられる一方、その確認行為を行う際にどのような種類の形式を選択しているかという点において違いがあるものと考えられる。

なお、前節表 7-5 の結果や琴（2018:244）の指摘にもあるように、関西若年層はノダ類との組み合わせに限らず「情報共有確認」を行う談話標識の使用そのものが東京若年層に比べて多い。この点から、(3) のように「ノダ類+φ」によって談話内容の描写を優先的に進め、「引き込み」に代わる「情報共有確認」の形式によって適宜聞き手の反応を仰ぐ、という流れが関西若年層の基本的な展開方法といえるだろう。

以上、東京・関西の若年層における談話標識の運用傾向について述べた。本節及び 3 節の内容を踏まえ、次節では X・Y・Z の各場面での談話展開方法の異同について検討する。

5. 関西出身若年層の談話展開の場面間比較

本節では、関西出身若年層 X・Y・Z の〔他郷〕ならびに〔同郷〕における談話展開方法の異同を捉えていくこととしたい。はじめに前節までの内容をもとにした分析の枠組みを提示したのち（5.1 節）、三者の運用実態を順に明らかにしていく（5.2-5.4 節）。

5.1. 分析の枠組み

3 節と 4 節では東京方言話者と関西方言話者の談話標識の使用について、高年層と若年層に分けてそれぞれ整理した。本節ではそれらをもとに、三者の各場面の談話展開がどの程度東京的/関西的か、あるいは違いがないかを測るための大まかな指標を示すこととしたい。

まず東京・関西方言話者の談話標識の出現傾向を次の表 7-7 に世代別に整理し、各地域における談話展開の特徴の抽出を試みる。若年層に関しては 4 節に示した筆者の調査結果（以下上林調査）と、東京・大阪の若年層の談話展開を対照した琴（2018）による結果（以下琴調査）を合わせて示す。

表 7-7 談話標識の出現傾向まとめ

談話標識の機能・代表形		高年層	若年層	
			琴調査	上林調査
発話権取得・維持	ダカラ/ソヤカラ	○	○	=
説明開始・累加	ソレデ/ホンデ	●	○	○
主観的説明累加	ノ・ワケ/ネン	○	-	○
引き込み	ネ・サ・ナ	●	=	○
情報共有表示	ヤハリ	=	○	=
情報共有喚起	ホラ	○	○	=
情報共有確認	デショー/ヤロー	○	●	●
念押し	ネ・ナ	=	○	=
自己確認	ウン	●	○	●

〈凡例〉○:東京に多い ●:関西に多い =:ほぼ同数 -:不明

表 7-7 によると東京・関西間の談話標識の出現傾向は高年層と若年層で一致するものもあればしないものもあるが、本節で分析対象とする X・Y・Z は若年層であるため、ここでは琴調査と上林調査の結果を優先して枠組みを検討する。

琴調査と上林調査で出現傾向が一致した談話標識は「説明開始・累加」のソレデ/ホンデ類と「情報共有確認」のデショー/ヤロー類の 2 種類のみであり、前者は東京若年層に多く、後者は関西若年層に多いという点で一致した。この 2 種類は東京・関西間の談話展開の違いをマークする標識として切換え項目の指標となりうると判断し、5.2 節以降の分析においても注視することとしたい。

また、上林調査ではほぼ同数であったもののうち従来の高年層と琴調査の若年層で傾向が一致した「発話権取得・維持」のダカラ/ソヤカラ及び「情報共有喚起」のホラ、ならびに琴調査では対象とされなかったが高年層と上林調査の若年層で一致した「主観的説明累加」のノダ類についても、従来から現在に至るまでおよその傾向が一致した標識（いずれも「東京に多い」）であると判断し、切換え項目の指標に含めることとする。

「主観的説明累加」のノダ類に関しては、4.2 節に示したように他の標識との組み合わせ方に地域差が現れたため、各パターンを切換え項目として採用する。すなわちパターン (B) の「ノダ類+ネ・サ・ナ（引き込み）」は東京談話に、パターン (C) の「ノダ類+デショー/ヤロー類（情報共有確認）」は関西談話に顕著な特徴として捉えることとする。

上記内容をまとめると以下ようになる。

(5) 先行研究・調査から抽出した談話展開の特徴

① 東京方言の談話展開に顕著な特徴

- (①-1) ダカラによって発話権を取得・維持する
- (①-2) ソレデ類によって説明を開始・累加する
- (①-3) ホラによって情報共有を相手に喚起する
- (①-4) ノダ類によって主観を交えて状況を説明する
- (①-5) 「ノダ類+ネ・サ・ナ」の組み合わせを多用する

② 関西方言の談話展開に顕著な特徴

- (②-1) デショー/ヤロー類によって情報共有を確認する
- (②-2) 「ノダ類+デショー/ヤロー類」の組み合わせを多用する

本章ではこれら諸々の特徴を東京方言・関西方言の談話展開における相違点として大まかに位置づけ、次節以降の場面間の運用を測るうえでの指標に据えることとする。ただし分析にあたり、仮に先行研究や過去の調査結果に沿わない談話標識の使用傾向が認められたとしても、使用数等が場面間で明らかに異なるなどした場合には、当該標識をその話者にとっての切換え項目として認めることがある。

5.2. X の場合

本節ではまず X の談話展開の仕方に注目する。次掲表 7-8 は X が使用した談話標識の出現頻度を示したものである。

表 7-8 談話標識の場面別出現頻度 (X)

	ダカラ/ ソヤカラ	ソレデ/ ホンデ類	ノダ類	ネ・サ・ ナ	ヤハリ	ホラ	デシヨ/ ヤロ類	ナ・ネ	ウン
〔他郷〕 (18)	9 [0.50]	9 [0.50]	6 [0.33]	8 [0.44]	1 [0.06]	-	6 [0.33]	1 [0.06]	2 [0.11]
〔同郷〕 (6)	-	3 [0.50]	1 [0.17]	7 [1.17]	-	-	2 [0.33]	-	1 [0.17]

〈凡例〉 () 内: 説明談話の総数 [] 内: 一説明談話あたりの平均使用数

各話者の語った説明談話の数が異なるため単純に比較はできないが、X は Y や Z に比べると、談話標識の使用回数自体が両場面を通じてそもそも少ないことがわかった。詳細は後節でも述べるが、特にソレデ/ホンデ類やノダ類などについては他の二者の使用が多かっただけに、X の少なさが際立つ結果となった。

X の説明談話は出来事を時系列に沿って説明していくというよりも、主張したい事柄にまつわる補足的なエピソードを時系列に関わらず複数提示するという構成になっている点が目立った。次掲 (6) (7) を参照されたい。なお、次掲以降の各用例のゴシック箇所は当該談話内に現れた談話標識を指し、右欄にその機能とともに示す。□ は注目箇所を指す。

(6) 【過去に受けた英語の授業のゆるさについて】

〈X〔他郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
①	1 英語もね、ゆるかった。	ネ	引き込み
	2 ふたりとも日本人で。		
②	3 なんかひとりは姉妹校出身の先生だからめっちゃゆるいみたい な。んー。	ウン	自己確認
	4 なんか歌詞を聴いて、あの、なんか歌聴いて英語で書き取り とか穴埋めとかめっちゃ。		
③	5 なんか「どうゆうのやりたい？」とかゆって「映画をみたい」 とかゆったら映画みせてくれたりとか。		
	6 そう、すごいゆるくて。		
	7 それからもうひとりは、なんかそのニューヨークにもともと いて、ちょっとおばあちゃん先生みたいな感じなんだけど、	ソレカラ	説明累加
④	8 すごい厳しそうだけど、でもなんか出席を、じゅ、めっちゃ 重視してくれて、		
	9 なんかそう、1 回も休まなかったことめっちゃほめてくれた。		

		{笑い}		
⑤	10	最後なんか面接みたいな、英語で面接みたいなやったんだけど、		
	11	なんかその「学校入ってどうですか」とか「〈A 大〉に入ってどうですか」とか聞かれて、		
	12	ゆわれて。		
	13	なんか「どう活かしていきたいですか」とか、うん、英語で。	ウン	自己確認
	14	なんか「英語の授業受けてどうですか」とか。		

(7) 【画像管理のアプリを始めた理由について】

〈X〔同郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
①	1 あたしこれ【アプリ】始めたんは 、なんかどこで何を食べたってわからんやん。	ヤン	共有確認
	2 ただ写真撮ってるだけやったらさ。	サ	引き込み
	3 「え、これどこのやつやっけ」ってわからんから、		
②	4 なんかこのさ、お店の名前と商品名は書くようにし（＋ている）	サ	引き込み
③	5 なんかみんな（＋が）みたときに「あ、これ行きたいな」って思ってくれたらいいなと思って。		
④	6 なんかこう、「行ってきた」みたいなゆってくれたら嬉しいやん。	ヤン	共有確認

(6) (7) では□に示したようにそれぞれ「英語（の授業）がゆるいこと」「これ（アプリ）を始めた理由」をテーマに主張するために、それらに関わる要素が時系列に関わらず断片的かつ補足的に提示されている。(6) であれば歌の歌詞の書き取り (③-4) や映画鑑賞 (③-5)、出席重視の評価 (④-8・9) が主張内容である「授業のゆるさ」に関連する要素として挙げられており、(7) では被写体の情報を記録し (②-4)、受け手からの評価を得る (③-5・6) ことが「アプリを始めた理由」に関わる要素として述べられている。

このように X の談話のなかには時系列に沿って説明していくタイプのものが両場面を通じて少なかったために、ソレデ/ホンデ類やノダ類などの説明開始あるいは累加に関連する談話標識の出現頻度が少なかったものと考えられる。時系列に沿う場合には、談話標識に加え「～して…、～って言って…」などのようなテ形でつなげる形が頻出しており、これも両場面に共通していた。いずれにしても X は場面によって展開方法を変えることはしておらず、切り換えがなされているとは考えにくい。

ただ、なかには一方の場面に特有の展開の仕方のように思われるものもあった。たとえば時系列に沿う展開でありながら、談話標識がおそらく意図的に用いられなかったと思われる箇所が複数見受けられ、それらは特に〔同郷〕で目立った。次掲はその一例である。

(8) 【旅行先の観光名所について】

〈X〔同郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
①	1 【旅行先に誰と行ったのか聞かれて】 ママと行った。		
	2 〈友人名〉 ん 《の》 とこ泊まってママと行った。		
②	3 【画像をみせながら】 これ、なんか想いが叶う石みたいなんで、		
	4 なんか軽く感じたらもうすぐ想いが叶うみたいな。		
	5 んで、重く感じたらまだちょっと願いは叶わん、遠いみたいな。	デ	説明累加
③	6 めっちゃ重かった。{笑い}		

(8) は、②で「想いが叶う石」の説明をしたのち、③で実際に持ってみた結果を伝えている。Xは②の後に「で、実際に持ってみたら、…」などのような説明を累加するための表現や談話標識を用いることなく、③で「重かった」という結果のみを唐突に、いわば「オチ」をつけるような形で提示している。談話標識等をあえて挿入しないことで説明に伴う情報量や回りくどさを排除し、結論部分を目立たせて聞き手の反応を得るという X の戦略的な試みが示された箇所である。③の発話の後に X と聞き手 Kx の笑い声が入っていたことから、X のこの戦略は功を奏したといえるだろう。

僅少な差とはいえダカラ/ソヤカラやソレデ/ホンデ類など、次の発話へのつながりとして使用される標識が〔他郷〕に比べ〔同郷〕で少なくなっている点は、こうした X の〔他郷〕と〔同郷〕での展開方法の差が現れた結果とみることもできるだろう。ただし用例数が十分とはいえないため、ここでは可能性の提示にとどめておく。

以上、X の談話展開の実態について検討した。

5.3. Y の場合

続いて Y の運用に移る。Y の談話標識の場面別出現頻度を以下表 7-9 に示す。

表 7-9 談話標識の場面別出現頻度 (Y)

	ダカラ/ ソヤカラ	ソレデ/ ホンデ類	ノダ類	ネ・サ・ナ	ヤハリ	ホラ	デショ/ ヤロ類	ナ・ネ	ウン
〔他郷〕(12)	4 [0.33]	44 [3.67]	41 [3.42]	36 [3.00]	4 [0.33]	-	28 [2.33]	-	5 [0.42]
〔同郷〕(16)	15 [0.94]	37 [2.31]	31 [1.94]	24 [1.50]	4 [0.25]	-	17 [1.06]	-	4 [0.25]

〈凡例〉 ()内:説明談話の総数 []内:一説明談話あたりの平均使用数

表 7-9 によると、ソレデ/ホンデ類やノダ類、ネ・サ・ナ、デショ/ヤロ類など複数の談話標識が両場面で一定数使用されているが、一説明談話あたりの出現数で言うといずれも〔他郷〕の方がやや上回る結果となった。特に「引き込み」のネ・サ・ナや「情報共有確認」のデショ/ヤロ類には倍近くの開きがある。4.2 節では東京若年層の傾向として、

「引き込み」のネなどによって自身の主張を聞き手に確認をとりつつ進める点を指摘したが、Y の場合も「確認」の要素を有するネ・サ・ナやデショー/ヤロー類が〔他郷〕により頻出している点から、聞き手への確認をとることに対して〔同郷〕以上に慎重になった結果が場面間の数値の差に現われたとも解釈できる。次例 (9) に示す□は〔他郷〕における「引き込み」と「情報共有確認」の機能を持つ標識である。

(9) 【バイト先のコーヒーの価値について】

〈Y〔他郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
①	1 うちのコーヒーが、たとえば 400 円 500 円だったら「おいしい」ってゆわれちゃうの。うん。	ノ ウン	主観説明 自己確認
	2 「500 円でこのコーヒーはおいしいです」みたいな。		
	3 700 円になった瞬間においしいのかわからなくなっちゃうの、要は。	ノ	主観説明
②	4 やっぱその、味？		
	5 味とか雰囲気より値段がすごいやっぱその、目に入っちゃう□じゃん。	ヤハリ ジャン	共有表示 共有確認
	6 「これで 700 円か」って思う□じゃん。うん。	ジャン ウン	共有確認 自己確認
③	7 実際さ、そのコーヒーをさ、コーヒー効きの人なんかいないからさ。	サ	引き込み
	8 100 円のコーヒーと 700 円のコーヒーを、あたしはコーヒー飲まないからわかんないけど、		
	9 おいしいかどうかわかんない人もいるんだったら、「じゃあ 100 円でいいじゃん」ってなる□じゃん。	ジャン	共有確認

ただし、4.2 節で関西若年層に優勢な標識とされたデショー/ヤロー類が〔同郷〕よりもむしろ〔他郷〕に多い点などをみると、Y の〔他郷〕は必ずしも東京方言談話的になっているとは限らず、談話展開の仕方を場面によって切換えているとは判断しにくい。

また、5.1 節で東京方言的特徴として抽出した「発話権取得・維持」のダカラや「情報共有喚起」のホラが〔他郷〕ではほとんど現れなかった点、あるいは従来の関西方言談話の特徴とされた「自己確認」のウンが両場面で確認された点などをみても、Y の談話展開が場面間で著しく異なるとは考えにくい。

続いて、ノダ類と他標識との組み合わせという観点からみてみることにしたい。Y の各パターンの出現頻度を次掲表 7-10 に示す。

表 7-10 ノダ類との組み合わせパターンの出現頻度 (Y)

	(A)ノダ類+ φ	(B)ノダ類+ ネ・サ・ナ	(C)ノダ類+ デショ/ヤロ類
〔他郷〕	36	1	4
〔同郷〕	26	2	3

東京若年層に多く観察された (B) パターンが Y の〔他郷〕ではわずか 1 例にとどまり、反対に関西若年層が主に使用した (C) パターンが〔同郷〕だけでなく〔他郷〕にも複数例確認された。いずれも数としては僅少であるため断言はできないが、この結果のみをみると〔他郷〕では東京方言談話的展開、〔同郷〕では関西方言談話的展開といったようなそれぞれの場面に即した談話展開がなされているとはいいにくく、切換えがあるとは判断しがたい。

ただ、Y が用いたノダ類における諸形式の出方を詳しくみると、〔他郷〕では「ノ」あるいは「ンダ」のみが ((10) 参照)、〔同郷〕ではそれらの関西方言形にあたる「ンヤ/ネン/テン」に加え、説明のモダリティ形式である「ワケ」が使用されていた ((11) 参照)。

(10) 【電車の遅延について】

〈Y〔他郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
①	1 あたしこないだ《この間》8 時 54 分の電車ん《に》乗った ^① 。	ノ	主観説明
	2 そしたら〈B 駅〉にだいたい、	ソシタラ	説明累加
	3 え、違う、うそついた、ごめん。		
②	4 7 時 54 分 (+に) 乗って、だいたい〈B 駅〉に 8 時 40 分過ぎぐらいには絶対着くやつん《に》乗ったんだけど、それで遅れてる ^① 。	ノ	主観説明
	5 ってことはもう遅延じゃん。	ジャン	共有確認
	6 そうそう、だから〈T 線〉で来るのやだと思って、次の週は〈K 線〉で行った ^① 。	ダカラ ノ	発話維持 主観説明
③	7 たら《そしたら》その日〈K 線〉遅れた ^① 。	ソシタラ ノ	説明累加 主観説明
④	8 も、意味わかんなくない？		

(11) 【妹の進路について】

〈Y〔同郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
①	1 んで、なんか、まー先生にさ、ようけ《たくさん》みてもらってさ、まーなんとか、まーそこそこ行けたんやけど、ちょっとやっぱ詰め甘い ^① ねんな。	デ サ ヤハリ ネン ナ	説明開始 引き込み 共有表示 主観説明 引き込み

②	2	なんかその、あんま《あまり》その、先生とかお母さんと忠実ん《に》なれへん ^{ワケ} よ。	ワケ	主観説明
	3	ちょっと反発する ^{ワケ} よ、やっぱり。	ワケ ヤハリ	主観説明 共有表示
	4	「あたしは〈M 高校〉なんか行きたくないのに」、みたいな。		
	5	「なんでお母さんあたしの行きたい高校の話とかあかんあかんってゆうん」、みたいん《に》なってもうて《なってしまうて》、		
③	6	で、まーでもそうやけど、親の話聞いとくのが一番自分が楽 ^{ヤン} 。 んー。	デ ヤン ウン	説明累加 共有確認 自己確認
④	7	んで、たぶん間違っただことゆってない ^{ねん} 、親は。んー。	デ ネン ウン	説明累加 主観説明 自己確認
⑤	8	〈M 高校〉行っとけば間違いない ^{ヤン} 。	ヤン	共有確認
	9	どう考えても。		
	10	近いし、近いし頭いいし、も、い、あかんところないのに。		
⑥	11	なんでそこで手抜いて、て、行きたい、と、まー行きたいやろうけど、んー。	ウン	自己確認
	12	ま、それ、まーお母さんの的に気に入らんかったみたいで、え、でも本人も家にお金ないことはわかってん ^{ねん} 。	ネン	主観説明
⑦	13	やから〈M 高校〉受けたらまずいってわかってた ^{んや} 、たぶん。	ヤカラ ンヤ	発話維持 主観説明
⑧	14	落ちて、落ちるから。		
⑨	15	だからもう、〈S 高校〉。	ダカラ	発話維持

「ワケ」は「ネン/テン」を凌ぎ〔同郷〕でのノダ類の半数以上（30 例中 17 例）を占めたのに対し、〔他郷〕では 1 例も使用されていないことから、Y にとっての切換え項目になっていると考えられる。つまり、ノダ類の出現自体は〔他郷〕でも〔同郷〕でも一定数確認でき、その用い方に場面間の差異はさほどない一方で、使用される具体形式のレベルになると、場面による使用形式が明確に分けられていることが示された。

以上のように談話標識の用い方から Y の談話展開の特徴をみたところ、一部の談話標識が一方の場面に多い、あるいは各標識における具体的な実現形式のレベルでは場面によって使用されるものが異なるといった違いは見受けられたものの、談話展開全体として場面間で明らかに異なる使用、すなわち切換えがなされているとは考えにくい結果となった。

5.4. Z の場合

最後に Z の談話展開の実態についてみていく。以下は Z の談話標識の場面別出現頻度を示したものである。

表 7-11 談話標識の場面別出現頻度 (Z)

	ダカラ/ ソヤカラ	ソレデ/ ホンデ類	ノダ類	ネ・サ・ナ	ヤハリ	ホラ	デシヨ/ ヤロ類	ナ・ネ	ウン
〔他郷〕 (16)	8 [0.50]	78 [4.88]	25 [1.56]	35 [2.19]	-	-	15 [0.94]	-	1 [0.06]
〔同郷〕 (9)	5 [0.56]	37 [4.11]	21 [2.33]	20 [2.22]	-	-	24 [2.67]	-	-

〈凡例〉 ()内:説明談話の総数 []内:一説明談話あたりの平均使用数

Z の談話標識の平均使用数は両場面とも概ね一致しているが、「情報共有確認」のデシヨ/ヤロ類に限り〔同郷〕での使用の方がかなり上回っており、〔他郷〕とは約 1.5 倍の差が生じている。以下に〔同郷〕の例を示す。

(12) 【家事の大変さについて】

〈Z 〔同郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
①	1 ん、てか、子育てじゃなくても、なんてゆうの？		
	2 おっ、なんか【負担が】おっきく《大きく》なるやん。	ヤン	共有確認
②	3 うちの家とかさ、ま、【兄弟が】3 人もおるから、も、もろともに洗濯物がぼわーってなんねやんか《なるんだよね》。	サ ネン ヤンカ	引き込み 主観説明 共有確認
	4 で、その、なんかもう、妹もおっきいからさ、も、サイズもでかいわけやん。	デ サ ワケ ヤン	説明累加 引き込み 主観説明 共有確認
	5 もう洗濯物さ、1 回じゃ済まないねやんか。	サ ネン ヤンカ	引き込み 主観説明 共有確認
③	6 だからもう、なに？	ダカラ	発話維持
	7 え、それ《=洗濯物》をもうみたら {驚く仕草をする} ってなるし、		
④	8 ま、それをなんかこう、結婚して「ずっとそればっかやっていけるかな」と思うと、「や、無理」って思う。		
	9 で、私の目標は、できるだけお金によりゆう、余裕がありまくる人と結婚をして、家事を手伝ってくれる人を雇う。{笑い}	デ	説明累加

Zの〔同郷〕におけるデショー/ヤロー類は、(12)のように1つの説明談話のなかで複数回連続的に用いられるケースが多くみられた。このような連続的に使用される際のデショー/ヤロー類は、(12)や次掲(13)のように〔他郷〕〔同郷〕に関わらず方言形である場合が多く、対応する非方言形の標識に関しては(14)のように単発で使用される例が目立った。

(13) 【アトラクションに並んでいたときの出来事】

〈Z〔他郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
④	10 で、ふ、後ろにさ、カップルがおってさ、いちゃいちゃいちゃいちゃいちゃいちゃすんね ^{やん} 《するんだよね》。	デ サ ネン ヤン	説明開始 引き込み 主観説明 共有確認
	11 もうなんかさらにいらついてさ。	サ	引き込み
⑤	12 で、たまにこうやって写真撮ったらさ、	デ サ	説明累加 引き込み
	13 あ、『スノー』《アプリ名》で撮っててん ^{やん} 。	テン ヤン	主観説明 共有確認
⑥	14 で、あたしとさ、友達はもうそら《そりゃ》『スノー』さ、認識する ^{やん} 。	デ サ ヤン	説明累加 引き込み 共有確認
⑦	15 後ろのさ、いちゃいちゃしてる女の人の顔にもさ、『スノー』がさ、認識してさ、	サ	引き込み
	16 や、スリーショットみたいな。{笑い}		
	17 やばい。		

(14) 【友人Iの良くないところについて】

〈Z〔他郷〕〉

番号	発話内容	標識	機能
④	6 だ（+から）この前のやつもそうだよ。	ダカラ	発話維持
	7 なんか、浮気されたらん《の》ときの話も、		
	8 あれは確実に〈友人I〉がおかしい ^{じゃない} 。	ジャナイ	共有確認
⑤	9 「いや、わたしは一」みたいな。		
	10 なんか「嘘はつかれたくない」ってゆう割に嘘つく、みたいな。		
⑥	11 「おいおいおいおい、それは違うだろ」ってゆうさ。	サ	引き込み
⑦	12 あの意見が万人に「変だよ」ってゆわれてるのに対して、こう、認められないことが「ちょっとだめだよ」ってゆったげないとね《言ってあげないとね》。	ネ	引き込み

13	あれだけど。		
----	--------	--	--

つまり Z は〔同郷〕での「連続的な情報共有確認」という特徴をそのまま〔他郷〕にスライドさせているというよりも、談話のなかで方言的要素が頻出する箇所ではその特徴を反映させ、反対に非方言的要素が中心的に用いられる箇所ではその特徴を控えるといったシフトを行っていると考えられる⁵⁾。

続いてノダ類と他標識との組み合わせについてみていく。以下は Z の表である。

表 7-12 ノダ類との組み合わせパターンの出現頻度 (Z)

	(A)ノダ類+ φ	(B)ノダ類+ ネ・サ・ナ	(C)ノダ類+ デショ/ヤロ類
〔他郷〕	18	3	4
〔同郷〕	6	1	14

東京方言談話的特徴とされた (B) は〔他郷〕で 3 例、〔同郷〕で 1 例確認された。〔他郷〕の方が上回っているが、その差はわずかであり、切換えといえるかは判断しがたい。一方、関西方言談話に顕著とされた (C) については〔同郷〕での値が 14 と〔他郷〕を大きく上回っていることから、(C) は Z にとっての切換え項目であり、関西方言的特徴として Z に認識されていると考えられる。

以上、Z の談話展開の方法に関しては、デショ/ヤロ類及びそれに関わる一部の組み合わせに限り場面間で異なる使用を行っている可能性を指摘したが、その他の標識についてはいずれも大きな違いはなく、基本的には〔他郷〕と〔同郷〕でほぼ同様の展開方法を行っているものと思われる。

ここまで各話者の談話展開方法の特徴について個別的に検討してきた。この結果を踏まえ 6 節では、首都圏に移住した関西出身若年層の談話展開の傾向が、従来の東京方言談話あるいは関西方言談話の特徴と比べた際にどのような点で一致・不一致をみせるのか、5.1 節に示した分析の指標を参照しつつ明らかにする。

6. 全体の傾向と従来の東京・関西談話との比較

前節の分析から、関西出身若年層 X・Y・Z それぞれに、場面間で異なる談話標識の用い方や展開の仕方を行っている箇所があることが明らかとなった。ただ、それらは非常に限られた範囲にとどまっており、談話全体のおおよその展開は〔他郷〕と〔同郷〕でさほど違いがないことも指摘した。

本節では三者全体の談話展開の運用傾向を改めて整理し直したうえで、その傾向が従来

5) (12) (13) の談話例はいずれも京阪式アクセントで実現されていたほか、語彙や文法形式についても方言形の使用が複数確認された。対する (14) の例は東京式アクセントによる実現が中心であり、使用された文法形式も非方言形が目立った。

から指摘されてきた東京方言話者ないし関西方言話者の談話展開との比較において、どのように位置づけられるかを考えてみたい。

次掲表 7-13 は、4 節に示した上林調査における東京・関西若年層の談話標識の平均出現数と、X・Y・Z 三者の平均出現数を並べて示したものである。

表 7-13 談話標識の平均出現数における東京・関西談話との比較

	ダカラ/ ソヤカラ	ソレデ/ ホンデ類	ノダ類	ネ・サ・ ナ	ヤハリ	ホラ	デショ/ ヤロ類	ナ・ネ	ウン
	発話権 取得・ 維持	説明 開始・ 累加	主観的 説明 累加	引き 込み	情報 共有 表示	情報 共有 喚起	情報 共有 確認	念押し	自己 確認
東京談話 (42)	18 [0.43]	189 [4.50]	101 [2.40]	61 [1.45]	2 [0.05]	-	14 [0.33]	1 [0.02]	-
関西談話 (24)	10 [0.42]	49 [2.04]	42 [1.75]	23 [0.96]	-	-	35 [1.46]	-	8 [0.33]
〔他郷〕 (46)	21 [0.46]	131 [2.85]	62 [1.35]	79 [1.72]	6 [0.13]	-	49 [1.07]	1 [0.02]	8 [0.17]
〔同郷〕 (31)	20 [0.65]	76 [2.45]	53 [1.71]	51 [1.65]	4 [0.13]	-	43 [1.39]	-	5 [0.16]

〈凡例〉 () 内: 説明談話の総数 [] 内: 一説明談話あたりの平均使用数

はじめに表下部の〔他郷〕と〔同郷〕の平均出現数を比較してみると、[] 内に示した各標識の三者平均値は両場面でいずれもほぼ同じ値を示していることがわかる。また、一説明談話あたりの平均出現数の上位を「説明開始・累加」のソレデ/ホンデ類、「主観的説明累加」のノダ類、「引き込み」のネ・サ・ナ及び「情報共有確認」のデショ/ヤロー類が占めている点（いずれも平均 1~2 回以上）、あるいは反対に出現が少ないものとして「情報共有表示」のヤハリや「情報共有喚起」のホラ、「念押し」のナ・ネが挙げられる点についても、両場面に共通した特徴である。以上から、〔他郷〕と〔同郷〕における三者の談話展開は談話標識の出現頻度という観点からみるとほぼ同様の傾向を示しており、特に目立った切換えがなされているわけではないと考えられる。

では〔他郷〕と〔同郷〕におけるこれら三者の傾向をこれまでの東京談話あるいは関西談話における展開方法の類型と比べた場合に、どのような特徴を持つ談話として位置づけられるだろうか。

まず東京方言の談話展開の特徴（5.1 節 (5) ①）として挙げたダカラ/ソヤカラ、ソレデ/ホンデ類、ノダ類、ホラの多用が〔他郷〕と〔同郷〕にどの程度当てはまっているかをみてみよう。ダカラ/ソヤカラについては上林調査の東京若年層においても使用が少なかったため判断できないが、ソレデ/ホンデ類に関しては東京談話が平均 4.50 回であったのに対し〔他郷〕及び〔同郷〕では約 2 回と少なく、むしろ関西談話での平均使用数（2.04 回）に近い。同様の傾向はノダ類にも現れ、ホラに至っては 1 例も用いられていない。なおホラの不使用は上林調査の東京若年層でも確認されたためダカラ/ソヤカラ同様に判断しがたい

が、以上から三者の〔他郷〕と〔同郷〕はいずれも東京方言談話的展開の傾向とはやや異なることが示された。

一方の関西方言の談話展開の特徴（5.1 節（5）②）として挙げたデショ-/ヤロー類の多用について、同じように各場面の出現数を照合してみると、関西談話の平均出現数が 1.46 回であったのに対し〔他郷〕では 1.07 回、〔同郷〕では 1.39 回とそれぞれ 1 回以上の出現が認められる。つまり関西方言の談話展開の特徴は三者の各場面での使用にも反映されているものと解釈できる。なお関連して、対する東京談話でのデショ-/ヤロー類が 0.33 回と他の 3 談話よりも少ない点から考えても、三者の〔他郷〕〔同郷〕での談話標識の用い方が「東京方言的」ではないことを示しているといえよう。

また、本章での分析の指標には含めていないが、従来の関西高年層の特徴とされてきた「自己確認」のウンが関西談話に加え〔他郷〕〔同郷〕でも複数出現が確認された点は、両場面における三者の談話が「関西方言的」であることを示唆する結果といえる。なお、東京談話でのウンの使用は確認されなかった。

続いてノダ類に関連した談話標識の組み合わせパターン（A）～（C）に注目してみると、次表のような結果が得られた。

表 7-14 X・Y・Z のノダ類に関するパターンの場面別出現頻度

		(A) ノダ類+ φ	(B) ノダ類+ ネ・サ・ナ	(C) ノダ類+ デショ/ヤロー類
〔他郷〕	X	6	—	—
	Y	36	1	4
	Z	18	3	4
	計	59	4	8
〔同郷〕	X	1	—	—
	Y	26	2	3
	Z	6	1	14
	計	30	3	17

表の合計欄によると〔他郷〕〔同郷〕ともに（A）がもっとも多く、次いで（C）（B）の順に使用が多くなっていることがわかる。4.2 節では東京若年層が（B）を、関西若年層が（C）を多用する点に両地域の違いがあることを指摘したが、上記結果は〔他郷〕〔同郷〕ともに関西若年層的特徴である（C）の使用が優勢であることを示していることから、場面間で切換えがなされているとは言にくい。ただし、4 節で対象とした関西談話の話者 Kx・Ky・Kz からは 1 例も得られなかった（B）を Y・Z が用いている点は、首都圏への移住の影響とも考えられる。いずれにしても出現数が限られているため、可能性の提示にとどめておく。

以上から、全体の傾向としては談話標識の出現頻度も組み合わせパターンも両場面で概ね類似した運用がなされており、特に切換えは行われていない様子が明らかとなった。

7. 本章のまとめ

ここまで、関西出身若年層 X・Y・Z の各場面での談話展開とその切換えの実態について、談話標識の使用に着目して分析を行った。また関連して、三者の談話展開と従来の東京談話・関西談話の傾向との異同についても検討した。

個々の話者の運用については、それぞれ以下のようにまとめられる。

- a) X は関西談話で多用される標識も含め、談話標識の使用自体が少ない。この特徴は〔他郷〕〔同郷〕に関わらず一貫していることから、談話標識の使用頻度に関しては切換えがみられず、両談話を通して同様の談話展開を行っていると考えられる。ただし、話の結末部分の示し方において、切換えの可能性をうかがわせる使用が観察された (5.2 節)。
- b) Y は各談話標識の具現形のレベル (ノダ類の下位分類ノ・ワケ) において、使用形式の種類や数が場面によって異なっていた。しかし標識それ自体 (ノダ類) の出現頻度や用い方そのものに明らかな場面間の差異はみられず、〔他郷〕と〔同郷〕ではほぼ類似した展開を行っていた (5.3 節)。
- c) Z はデショールヤロー類のみ〔同郷〕での使用が多く、場面間で使用数に差が生じた。〔同郷〕でのデショールヤロー類は一説明談話内に連続して用いられるケースが多いのに対し、〔他郷〕は方言的要素の多い箇所であれば〔同郷〕と同様に連続的使用を行い、非方言的要素の多い箇所では反対に控えるという切換えがみられた。その他の標識に関しては、両場面とも概ね同様の使用傾向がみられた (5.4 節)。

また、従来の傾向に対する三者全体の運用の特徴としては、以下の点が明らかとなった。

- d) 三者の談話は両場面ともに東京談話的展開とはやや異なり、むしろ関西談話的展開に近い特徴を有していることが示された (6 節)。

このように三者は談話標識の用い方において、それぞれ部分的には切換えをうかがわせる一方、両場面で概ね一致した談話展開を行っていることが明らかとなった。また三者に共通する d) の特徴については、場面の違いに関わりなく、談話全体の基本的な流れは成育地である関西の特徴が維持される、ということを示唆する結果となった。

語彙や文法 (第 4 章)、アクセント (第 5 章) などの個別事象については切換えの意識が働きやすい、すなわち知識としての標準語能力が発揮されやすい一方、発話の引用方法 (第 6 章) や談話展開 (本章) など、談話全体の構造面に係る項目については切換えの意識が働きにくい、あるいは働かせる必要がないと話者が判断したとも解釈できる。話者の標準語運用能力も、談話レベルにまでは及びにくいということが結論づけられる。

ここまで述べてきた点を踏まえ、第 8 章では、第 4 章から本章までの各論の内容の総括として、関西出身若年層 X・Y・Z の場面間におけるスタイル運用の全容とそのメカニズムについて考察する。

第Ⅲ部 結論：関西若年層のスタイル運用のメカニズム

第Ⅲ部は本論文の結論にあたる。第 8 章ではこれまでの各章で述べてきた関西出身若年層の各項目における切換えの実態を再度まとめ直し、そこで示された運用実態の実現要因やメカニズムについて考察する。最後に第 9 章にて、本研究で明らかにした点、ならびに今後に向けた課題を記し、本論文の結びとしたい。

第 8 章 スタイル運用の全容とそのメカニズム

本論文の総括にあたる本章では、第 4 章から第 7 章までの各論で述べた関西出身若年層 $X \cdot Y \cdot Z$ の切換えの実態の全容を整理し直したうえで、現代の関西若年層のスタイルの運用がどのようなメカニズムによってなされているのかを、マクロ・ミクロの両視点から議論する。

1. はじめに

本章では、これまでの各章で述べてきた関西出身若年層 X・Y・Z の場面間の切換えの実態についてまとめを行い、現代を生きる関西若年層のスタイル運用のメカニズムについて明らかにすることを試みる。

まず2節では第4～7章で扱った各分析項目の切換えの実態を整理し、各話者の運用の全容を改めて振り返る。続く3節では2節で整理した内容をもとに各話者の言語項目レベル別の「切換え度」を算出し、どのような項目が切換えを左右するのかについて検討する。X・Y・Zの切換えの実態を受け、4節では現代における関西若年層の言語運用能力とそのメカニズムについて考察する。

2. 各項目の運用の全容

本論では場面間における X・Y・Z の切換えの実態の網羅的な把握を目指し、分析項目を語彙・文法レベル（第4章）、音声レベル（第5章）、談話レベル（第6・7章）に分けて考察してきた。本節ではその総括として、各レベルの切換えの結果をそれぞれ順に整理する。

まず2.1節で語彙レベルの結果をまとめ、2.2節で文法レベル、2.3節で音声レベル（アクセント）を概観したのち、最後に2.4節で談話レベル（発話の引用方法・談話展開）について整理する。

2.1. 語彙レベル

第4章で扱った X・Y・Z の語彙レベルにおける各項目の切換えの結果を改めて整理すると、次頁図 8-1 のようになる。図の下の方の表 8-1 は、図の割合を実数で示し直したものである。

扱った語は関西方言と標準語にそれぞれ対応する形式があり、かつ三者全員に使用が認められたものを対象とした（第4章2.1節参照）。図によると、そのうち上位3対「駄目（だめ/アカン）」「居る（いる/オル・イテル）」「本当（に）（ほんと（に）/ホンマ（ニ）」）」に関しては、三者に共通して比較的明確な切換えが行われている。

対して、「よく（よく/ヨー）」以下の3対は話者によって運用が様々である。Xは「よく」と「違う」に関しては両場面とも非方言形で一本化しているが、「凄く」に関しては方言形（メッチャ）をベースとしながらも非方言形（すごく・すごい）の使用量に場面間で差が出ており、切換えの様子がうかがえる。Yは「よく」と「違う」において方言形が〔同郷〕でのみ使用されている点や、「凄く」に関しても各場面で期待される形式（〔同郷〕ならばメッチャ、〔他郷〕ならばすごく・すごい）が多数を占めている点から、先の上位3対ほどではないにしろ、切換えの様子がみてとれる。Zは「よく」に関しては方言形が〔同郷〕にのみみられ、切換えが確認できる一方で、「凄く」に関しては方言形が、本来期待される〔同郷〕よりも〔他郷〕で多用されており、やや変則的な切換えとなっている。また、「違う」に関しては場面に関わらず方言形と非方言形の使用比率が拮抗しており、特に切換えている様子はうかがえない。

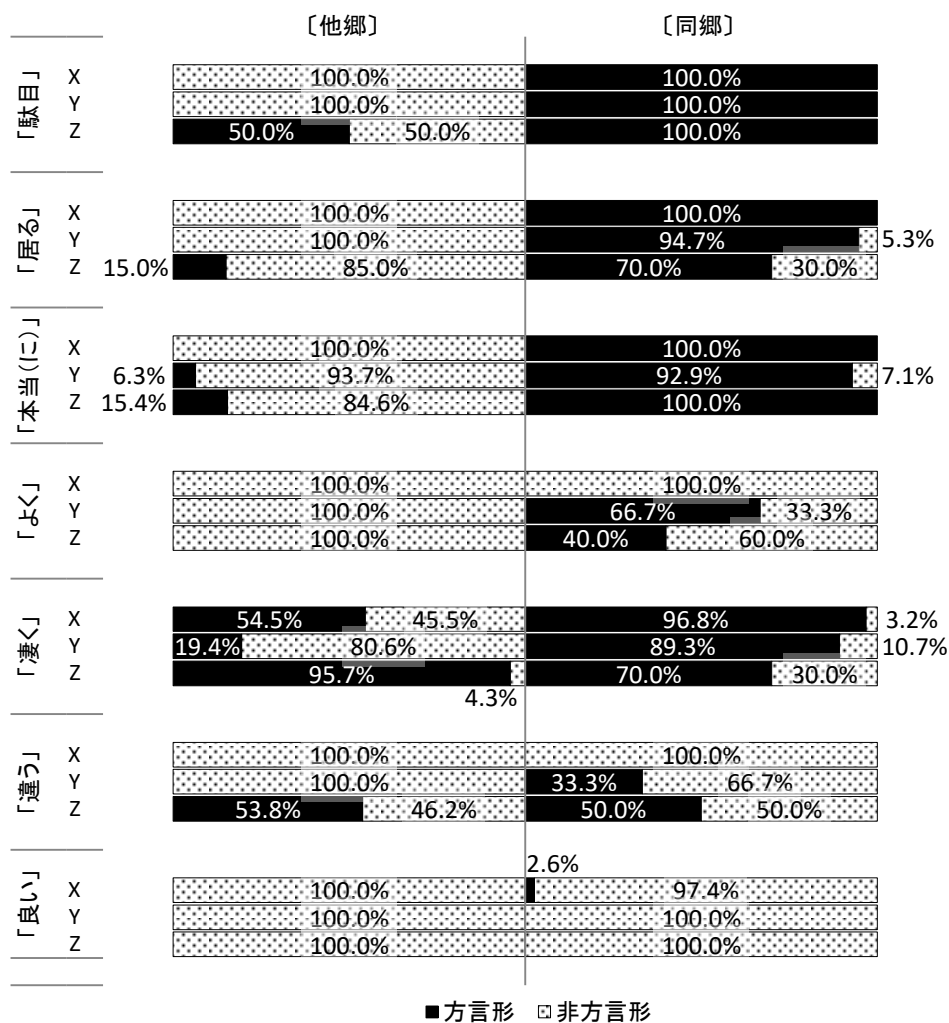


図 8-1 語彙項目の場面別・話者別使用割合

表 8-1 語彙項目の場面別・話者別使用実数

		X		Y		Z	
		〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
「駄目」	方言形 (アカン)	—	2	—	8	2	7
	非方言形 (だめ)	2	—	5	—	2	—
「居る」	方言形 (オル・イデル)	—	2	—	18	3	7
	非方言形 (いる)	27	—	30	1	17	3
「本当(に)」	方言形 (ホンマニ)	—	15	2	26	4	6
	非方言形 (ほんとに)	10	—	30	2	22	—
「よく」	方言形 (ヨー)	—	—	—	2	—	2
	非方言形 (よく)	5	1	2	1	1	3
「凄く」	方言形 (メッチャ)	18	30	6	25	22	7
	非方言形 (すごく・すごい)	15	1	25	3	1	3
「違う」	方言形 (チャウ)	—	—	—	2	7	3
	非方言形 (ちがう)	6	6	11	4	6	3
「良い」	方言形 (エエ)	—	1	—	—	—	—
	非方言形 (いい)	31	37	45	59	33	26

最後に図の最下部に示した「良い (いい/エエ)」については、X の〔同郷〕に方言形が 1 例認められたほかは両場面・各話者とも非方言形に一本化しており、場面間の切り換えは観察されなかった。

以上から、語彙レベルについては、一部のものを除き場面間で概ね切り換えがなされていることが明らかになった。その切り換える程度は話者間で比較的共通しており、本論が対象とした語でいえば図 8-1 の上位 3 対はいずれの話者も比較的明瞭な切り換えをみせた。中位の 3 対は話者によって切り換え方にばらつきがみられたが、下位の 1 対のみ三者に共通して一本化、すなわち切り換えがなされていないことが示された。

2.2. 文法レベル

続いて本節では文法レベルの切り換えについて改めて整理しておく。次掲図 8-2 は文法項目各種の場面別・話者別運用を一覧にしたものである。実数をまとめた表を次頁冒頭に付す。

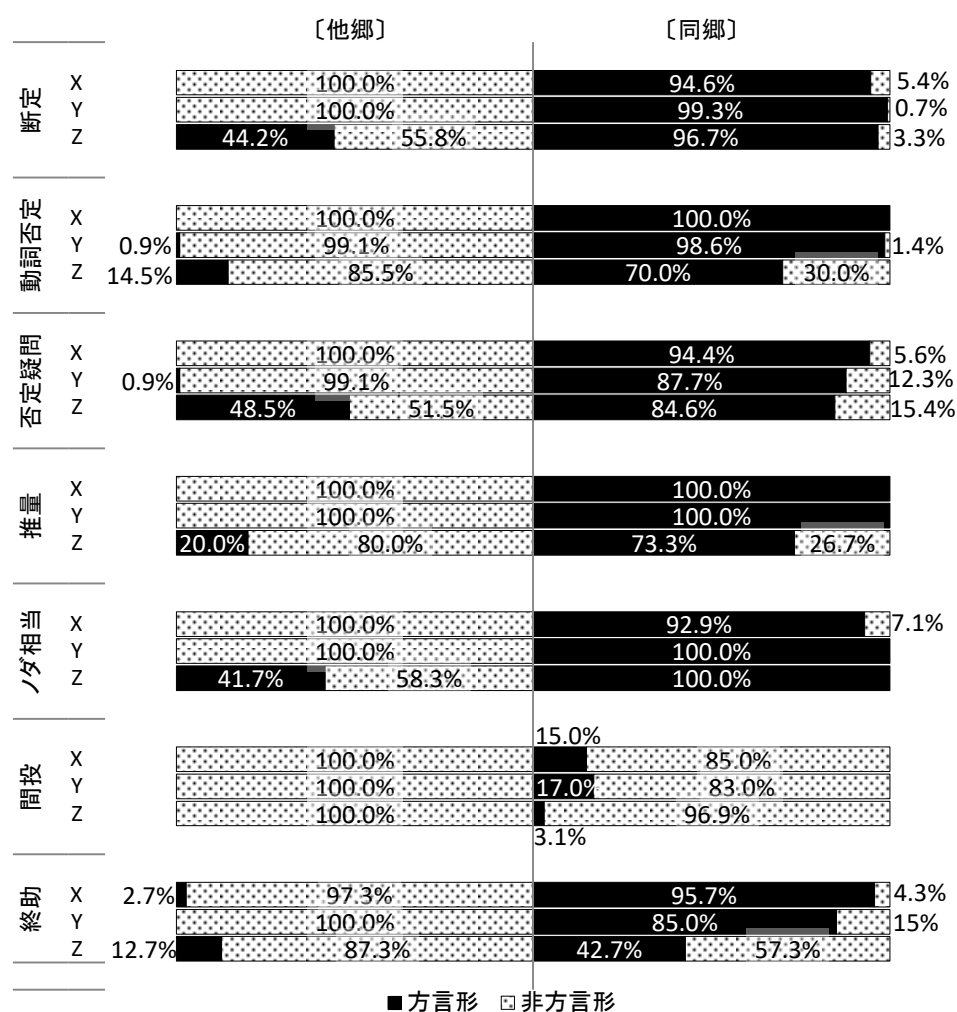


図 8-2 文法項目の場面別・話者別使用割合

表 8-2 文法項目の場面別・話者別使用実数

		X		Y		Z	
		〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
断定	方言形	－	70	－	133	50	87
	非方言形	178	4	183	1	63	3
動詞否定	方言形	－	42	1	68	9	28
	非方言形	82	－	105	1	53	12
否定疑問	方言形	－	17	1	50	16	55
	非方言形	23	1	108	7	17	10
推量	方言形	－	16	－	39	3	11
	非方言形	16	－	31	－	12	4
ノダ相当	方言形	－	26	－	76	30	53
	非方言形	67	2	134	－	42	－
間投	方言形	－	6	－	16	－	3
	非方言形	65	34	158	78	131	93
終助	方言形	1	22	－	91	10	35
	非方言形	36	1	107	16	69	47

図全体から、間投助詞を除いたほぼすべての項目で切換えが比較的明確に現れている様子が確認できる。話者別にみていくと、X の切換え方はきわめて厳密であることがわかる。特に〔他郷〕では終助詞を除くすべての項目で方言形の使用が認められず、〔同郷〕でも間投助詞以外の項目における非方言形の使用は 10% に満たない。

Y も同様に、場面間の使用形式の違いが非常に顕著であり、〔他郷〕での方言形式はほとんどみられない。〔同郷〕ではいくつかの項目で非方言形の使用が多少観察されたが、方言形使用が中心である点は X と一致する。

対する Z の切換え方は先の二者と異なり、〔他郷〕では非方言形が優勢であるものの、断定形式・否定疑問形式・ノダ相当形式においては方言形が拮抗している。この 3 項目の〔同郷〕での使用はほぼ方言形で占められていることから、〔他郷〕で非方言形が半数以上使用されている点は切換えがなされた結果と判断できるが、X・Y に比べるとその切換え方は緩やかである。また〔同郷〕では先の 3 項目も含め方言形の使用が中心である一方、動詞否定形式や推量形式、終助詞に関しては非方言形の使用が X・Y よりも目立つ。このように Z の切換え方は、本来的に出現の期待されない形式が両場面ともに多いという点で、先の二者に比べ幾分変則的といえる。

以上から文法レベルにおいては、一部の項目を除きほぼ明瞭に切換えられていることが明らかになった。その切換えの程度は話者によって異なり、X と Y は場面間できわめて厳密に切換えられている一方、Z の切換えは比較的緩慢であることが示された。

2.3. 音声レベル

次に本節では、第 5 章で扱った音声レベル（アクセント）の切換えの様相について整理することとしたい。アクセントの切換えについては、談話全体に占める方言量を、文節を

単位に算出する「方言文節量」の手法を用い、文法要素の違いによって形態的に分類した各文節がどのアクセント型で実現されているかを分析することで求めた(第5章2節参照)。以下の図8-3はこの形態的分類に関わらず、すべての文節におけるアクセントの実現形式を話者別・場面別にまとめて示したものである。なお、実際には関西方言と標準語の両変種に共通するアクセントやいずれの型にも該当しないアクセントも観察されたが、のちの分析に備え、ここではそれらを除外した結果を示す。表8-3は実数である。

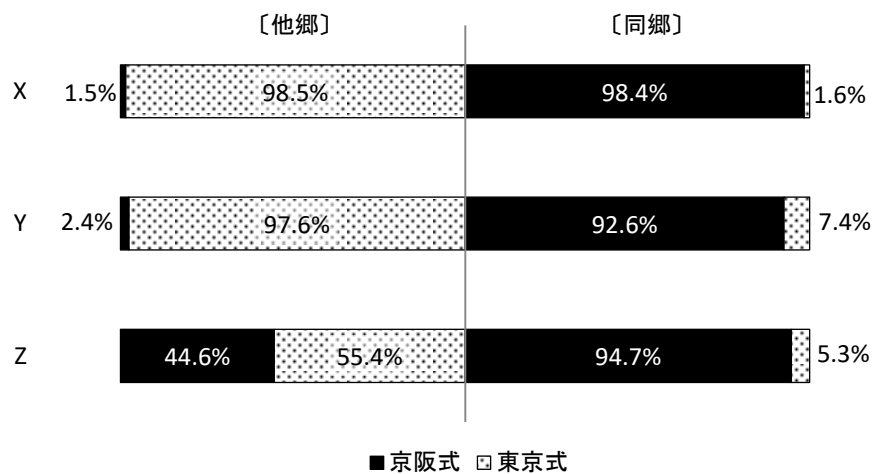


図 8-3 アクセントの場面別・話者別実現割合

表 8-3 アクセントの場面別・話者別実現実数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
京阪式	35	1123	60	2492	1051	1812
東京式	2279	18	2404	199	1306	101

図から、場面間における切換えが三者に共通して確認できるが、その程度には差がみられる。X は〔他郷〕では東京式、〔同郷〕では京阪式の実現が大半を占めており、三者のうちでもっとも切換えの程度が明瞭な話者である。

Y も X と同様、場面間で使用するアクセントの違いが顕著に現れており、音声レベルにおいても切換えが厳密である様子がうかがえる。

この二者に対し Z は〔他郷〕での京阪式の使用割合が突出して高いという違いが現れた。本来的に出現が期待される〔他郷〕での東京式の値が〔同郷〕に占める値よりも高くなっている点から、Z も同様に切換えを行っている判断できるが、その程度は先の二者に比べてやや緩やかである。

このように、先に示した語彙・文法レベルと同様、音声レベルにおいても場面間で切換

えが認められることが明らかとなった。話者によってはその切換え方の程度がきわめて明瞭であり、関西方言話者にとって「方言らしさ」を表すマーカーとして重要な位置を占めるとされてきたアクセントでさえも、切換えの対象となりうることが示された。

2.4. 談話レベル

最後に談話レベルの切換えの様相についてまとめておく。談話レベルとして扱った項目は発話の引用方法（第6章）及び談話の展開方法（第7章）であった。前者を2.4.1節で、後者を2.4.2節で整理する。

2.4.1. 発話の引用方法

発話の引用方法における場面間の異同をみるために第6章で注目したのは、A) 引用発話の頻度、B) 引用発話のタイプ、C) 具体的な引用の仕方の3つの観点であった。ここでは具体的にA)にあたる「引用発話率（数）」、B)にあたる「〈想像引用〉率（数）」、C)にあたる「引用標識・述部省略率（数）」及び「第三者への直接提示率（数）」の値をみていくこととしたい。

なお、上記4項目は関西・東京談話間で差異が生じた項目であり、いずれも関西談話に多いという結果が出ている（第6章2.2節参照）。両談話間の差を網掛け部分に示す。

表 8-4 関西・東京談話間における各項目の値とその差

		関西談話	東京談話	両談話間の差※
A)	引用発話率 (引用発話数/総発話数)	13.6% (606/4440)	10.1% (441/4351)	3.5pt
	〈想像〉率 (〈想像〉数/引用発話数)	26.1% (158/606)	3.4% (15/441)	22.7pt
C)	標識・述部省略率 (省略数/引用発話数)	17.3% (105/606)	6.3% (28/441)	11.0pt
	直接提示率 (直接提示数/引用発話数)	5.6% (34/606)	0.5% (2/441)	5.1pt

※関西談話の値から東京談話の値を引いたもの

本節では両談話間に現れたこれらの差を、 $X \cdot Y \cdot Z$ の〔同郷〕・〔他郷〕間の切換えの基準とする。たとえばA)の引用発話率（数）は関西談話が東京談話を3.5ポイント上回っているが、仮に三者の〔同郷〕での値が〔他郷〕よりも3.5ポイント以上多ければ、〔同郷〕では〔他郷〕よりも引用発話を多用するという行動が選択された、すなわち場面間の切換えがあったものと判断する。3.5ポイント未満の差、あるいは反対に〔他郷〕の方が〔同郷〕よりも多いといったような場合には、引用発話が切換え項目としてみなされていないものと判断する。

以上を踏まえ、 $X \cdot Y \cdot Z$ の各項目の使用割合と場面間の値の違いを算出すると、次表8-5のようになった。網掛け部分が場面間の差を表す。

表 8-5 〔同郷〕〔他郷〕間における各項目の値とその差

		X			Y			Z		
		〔同郷〕	〔他郷〕	差※	〔同郷〕	〔他郷〕	差	〔同郷〕	〔他郷〕	差
A)	引用発話率	5.4%	8.7%	-3.3pt	15.7%	9.7%	6.0pt	19.1%	16.8%	2.3pt
B)	〈想像〉率	2.3%	7.1%	-4.8pt	17.6%	17.8%	-0.2pt	37.4%	12.5%	24.9pt
C)	標識・述部省略率	9.3%	1.8%	7.5pt	18.5%	16.3%	2.2pt	21.4%	11.4%	10.0pt
	直接提示率	-	-	0.0pt	9.3%	2.3%	7.0pt	0.5%	-	0.5pt

※〔同郷〕の値から〔他郷〕の値を引いたもの

Xの結果をみると、いずれの項目も場面間の値の差が表 8-4 の関西・東京談話間の差を下回っている、あるいはマイナスに転じている（〔同郷〕よりも〔他郷〕に多い）。つまり X は、発話の引用方法については場面間でさほど切換えているわけではないと考えられる。

一方、Y は引用発話率で 6.0pt、直接提示率で 7.0pt の開きがあり、関西・東京談話間の差異（それぞれ 3.5pt、5.1pt）を上回っている。Y はこの 2 項目に関しては場面間で切換えていると考えられ、語彙・文法・音声レベルに続き談話レベルにおいても場面間で異なる運用を行っていることが推察される。

Z に関しては B) の〈想像引用〉率に 24.9pt の開きがみられ、関西・東京談話間の 22.7pt を凌ぐ結果となった。これは Z が〔同郷〕において、〔他郷〕以上に〈想像〉を用いるという切換え方を行っていることを示唆するものである。また、標識・述部省略率についても基準値 11.0pt に迫る 10.0pt の差がみられたことから、この項目においても切換えに準ずる運用がなされていると思われる。以上から Z も Y と同様に、発話の引用方法という談話レベルの項目においてもある程度の切換えを行っていると解釈できる。

このように切換えがあると判断された Y と Z であるが、その程度に関しては先に整理した語彙・文法・音声レベルに比べるとやや緩慢である。特に Y の場合、当該場面において出現の期待されない形式（〔他郷〕における京阪式アクセントなど）が先の 3 つのレベルではほとんど現れなかったのに対し、引用発話に関わる上記の項目は、本来であれば期待されない〔他郷〕においても一定数の使用が認められる。つまり切換えはあるにしても、先に示したレベルよりは絶対性に欠けることが明らかとなった。

2.4.2. 談話の展開方法

談話の展開方法の切換えに関しては、主に談話標識の使用傾向を対象に分析を行った。その際に前提として、引用方法の分析手順と同様、関西談話と東京談話における特徴の違いをあらかじめ抽出した（第 7 章 3 節参照）。ここでは違いが特に現れたものとして、①東京談話に特徴づけられるソレデ/ホンデ類とノダ類の使用、及び②関西談話に特徴づけられるデショー/ヤロー類とウンの使用に注目し整理することとしたい。次表 8-6 は関西・東京談話間における上記各標識の平均使用数とその差を示したものである。

表 8-6 関西・東京談話間における各標識の平均使用数とその差

		関西談話	東京談話	両談話間の差※
①	ソレデ/ホンデ類	2.04	4.50	-2.46
	ノダ類	1.75	2.40	-0.65
②	デショ/ヤロ類	1.46	0.33	1.13
	ウン	0.33	-	0.33

※関西談話の値から東京談話の値を引いたもの

本節ではこの関西・東京談話間に現れた網掛け部分の差を X・Y・Z の場面間の切換えの基準値に定める。

差については注（※）にも示した通り、関西談話の値から東京談話の値を引いたものであるため、東京談話に多い①の差はマイナスの値となる。したがって後述の〔同郷〕〔他郷〕間の差は、マイナスの値の絶対値が上記①の当該値よりも大きければ、場面間で切換えがあるものと判断する。たとえば、①ソレデ/ホンデ類の〔同郷〕〔他郷〕間の差が-3.00 であれば、関西・東京談話間の差である-2.46 よりも絶対値が大きいため、場面間の使用数に有意な差があるものとみなし、切換えられていると判断する。反対に場面間の差が-1.00 であれば-2.46 よりも絶対値が小さいため、切換える程度が低いものと判断する。値がプラスの場合も同様である。

一方、関西談話に多い②の値の差はプラスが基準となるため、場面間の差については上記②の当該値を上回る場合に限り、切換えがあるものと判断する。すなわち、②デショ/ヤロ類の場面間の差が 2.00 であった場合、関西・東京談話間の差である 1.13 よりも値が上回るため、有意な差とみなし切換えがあるものと判断する。対して、1.00 のように基準値を下回る値の場合には、切換えられていないものとする。

以上を踏まえ、X・Y・Z の場面間における各談話標識の平均使用数とその差を示すと、次表のようになった。

表 8-7 〔同郷〕〔他郷〕間における各標識の平均使用数とその差

		X			Y			Z		
		〔同郷〕	〔他郷〕	差※	〔同郷〕	〔他郷〕	差	〔同郷〕	〔他郷〕	差
①	ソレデ/ホンデ類	0.50	0.50	-	2.31	3.67	-1.36	4.11	4.88	-0.77
	ノダ類	0.17	0.33	-0.16	1.94	3.42	-1.48	2.33	1.56	0.77
②	デショ/ヤロ類	0.33	0.33	-	1.06	2.33	-1.27	2.67	0.94	1.73
	ウン	0.17	0.11	0.06	0.25	0.42	-0.17	-	0.06	-0.06

※〔同郷〕の値から〔他郷〕の値を引いたもの

X は①のソレデ/ホンデ類については両場面で差がなく、ノダ類に関しても関西・東京談話間における基準値-0.65 の絶対値より小さいため、切換える程度は低いと考えられる。また②の両標識においても同様のことがいえ、X は談話標識の使用傾向という観点からみると

切換えを行っていないことが推察される。

Y に関しては①のノダ類のみ関西・東京談話間の基準値を超える値が得られ、切換えの可能性がうかがえる結果となった。関西談話に多いとされる②の両標識に関してはいずれも、むしろ本来的には出現が期待されない〔他郷〕での使用が多く、本研究の想定する切換え方にはなっていないことが示された。

Z は②のデショ-ヤロー類のみ、場面間で有意な差が得られた。その他の標識については基準値内にとどまる程度の差、あるいは期待される傾向とは反対の結果が示された。

このように談話展開においては、これまでに述べてきた項目に比べ場面間の切換えがなされていないか、なされたとしてもすべての項目に渡るわけではないということが三者に共通して明らかになった。切換え有の判断がそれぞれ 1 項目ずつみられた Y と Z に関して、出現が期待されない場面での使用（〔同郷〕での①や〔他郷〕での②）が一切なかったわけではない。つまり、語彙・文法・音声レベルに比べると切換え方における絶対性が低く緩やかであるという点において、同じく談話レベルに含まれる発話の引用方法と類似する結果となった。

3. 各話者のレベル別切換え度

続いて本節では 2 節で整理した結果をもとに、X・Y・Z の各レベル・項目における切換えの程度、すなわち切換え度を算出する。そしてそれによってどのような項目が切換えに影響しやすいのか、あるいは影響しにくいのかを俯瞰することとしたい。

はじめに切換え度の算出方法について説明しておく。語彙・文法・音声レベルについては以下の手順で算出した。

(ア) 2 節図 8-1～図 8-3 に示した各項目の使用割合を点数に置き換える。

例) X の断定形式：〔他郷〕100%⇒100 点、〔同郷〕94.6%⇒94.6 点

(イ) 各場面で本来的に使用が期待される形式の点数の合計を求める（200 点満点）。

例) X の断定形式：〔他郷〕100 点＋〔同郷〕94.6 点＝194.6 点

(ウ) (イ) の合計を 2 で割り、100 点満点中の値に換算する。

例) X の断定形式：194.6 点÷2＝97.3 点

(エ) (ウ) で得られた点数を下記のスケールと照合する。点数が高いほど切換え度（切換えの程度）が大きく、低いほど切換え度が小さいことになる。

A) 91 点以上：きわめて明確な切換え（◎）

B) 71～90 点：比較的明確な切換え（○）

C) 51～70 点：やや緩慢な切換え（△）

D) 50 点以下：ほぼ切換えなし（×）

談話レベルの 2 項目については単純に点数化しにくいとため、2 節の表 8-5・表 8-7 において基準値を満たした項目の数がいくつあったかによって切換え度を判断した。スケールは次の通りとする。

- a) 4 個：きわめて明確な切換え (◎)
- b) 2-3 個：比較的明確な切換え (○)
- c) 1 個：やや緩慢な切換え (△)
- d) 0 個：ほぼ切換えなし (×)

以上の手順を踏まえたうえで各レベル・項目の切換え度を算出したところ、次表 8-8 のようになった。

表 8-8 レベル別切換え度

レベル	項目	X	Y	Z
語彙	「本当(に)」	◎	◎	◎
	「駄目」	◎	◎	○
	「居る」	◎	◎	○
	「凄く」	○	○	×
	「よく」	×※	○	△
	「違う」	×※	△	×
	「良い」	△	×※	×※
文法	断定	◎	◎	○
	動詞否定	◎	◎	○
	否定疑問	◎	◎	△
	推量	◎	◎	○
	ノダ	◎	◎	○
	間投助詞	△	△	△
	終助詞	◎	◎	△
音声	アクセント	◎	◎	○
談話	発話の引用	×	△	△
	談話展開	×	△	△

〈凡例〉

◎:きわめて明確 ○:比較的明確 △:やや緩慢 ×:ほぼ無し
 ※:形式が一本化していることを示す

三者に共通する点として、文法レベルにおける各項目の切換え度が安定して高く、語彙レベルにおいても一本化したものを除くと明確に切換えられている項目が多い。また、変化が生じにくいとされてきた音声レベルにおいても非常に明確に切換えられていることがわかる。対する談話レベルにおいては、三者とも切換えていないか、あるいは他のレベルに比べ切換え度が緩やかである。

Auer et al. (1998) は方言あるいは言語が接触したときにみられる言語構造の歩み寄り (convergence) の過程において、話者が「目立ちやすい (目立ち度: salience が高い)」と感じた要素は「目立ちにくい (salience が低い)」と感じた要素に比べて失われやすいことを実証的に示した。この点を三者の傾向に当てはめると、語彙や文法、アクセントなどの個別的な項目は方言形式であるか否かが比較的把握しやすい、「目立ちやすい」項目である。

したがって話者自身による意識的な操作が容易となり、上述の切換えの明瞭さに現れたものと考えられる。

一方、発話をどのように引用するか、あるいは談話をどのように展開させるかといった談話・発話全体の流れに関わる項目については、個別的な項目に比べると地域性の有無が明示的であるとはいいにくく、そもそも地域差があるか否かということ自体、話者が把握していない可能性が高い。すなわちこれらは「目立ちにくい」要素であるため意識的な操作がしづらく、結果的に切換えに与りにくくなったものと思われる。各レベル間のこうした違いが、表 8-8 に示されたような切換え度の違いに影響していると考えられる。

話者別にみると、X は全体を通して「きわめて明確な切換え」が多い傾向がみられたが、談話レベルに関してはほとんど切換えていない。Y は語彙・文法・音声ともに切換え度が安定的に高く、その傾向は文法項目において特に顕著である。談話レベルについては他のレベルよりはやや落ちるものの、まったく切換えていないわけではない。Z は、どの項目が切換えに与りやすいかといった切換え方の方向性としては X・Z と類似の傾向をみせたが、その程度に関しては三者のなかでもっとも緩やかである。「きわめて明確な切換え」がほとんどみられない一方で、もっとも切換えにくい談話レベルにおいて一部切換えがみられるなど、一貫していない点が Z の特徴といえる。

次節では、以上で示してきた三者それぞれの切換への傾向をもとに、現代の関西若年層のスタイル運用のメカニズムについて考察することとしたい。

4. スタイル運用のメカニズム

これまでの各章及び前節で述べてきた、関西出身若年層 X・Y・Z の場面間における切換えを含めたスタイルの運用は、どのような仕組みに基づいて生じた事象なのだろうか。本節ではそのメカニズムについて、本研究が対象とした話者全員に共通する基本的な枠組み（マクロ視点：4.1 節）ならびに話者によって個人差がある個別的な枠組み（ミクロ視点：4.2 節）から考察することとしたい。

4.1. 基本的な枠組み（マクロ視点でのメカニズム）

本節では、本論文が対象とした 3 名の関西出身若年層に共通して存在すると考えられる基本的なメカニズムの検討を行う。結論から述べると、関西出身若年層 X・Y・Z は、自身がどのような場面に接しているかによって方言スタイルと標準語スタイルを使用し分ける「わきまえ（こういう時にはこういうもの、と社会で決めているものに従って使うという言葉使用（井出 2006:72-73)）」タイプの話者であるということができる。

わきまえの程度に関してはむしろ個人差があるが、程度が比較的低いと思われる Z であっても、場面間の使用形式の数に相対的な違いがみられている。また〔他郷〕において、時間的推移に伴い期待される「標準語モード」への移行をうかがわせる運用を行っていた点も考え合わせると、Z もまた多かれ少なかれ社会的な「場面」に影響を受けて切換えを行

う「わきまえタイプ」に含まれることが推察される。

三者の切換えにわきまえが関係している点は、切換えに対する話者自身の意識からもうかがうことができる。第3章の調査の概要のなかで述べたように、本研究では談話調査のあとに談話参加者の言語意識を問う簡易的な質問調査を行っており、そこでは①各場面における話者自身のことばに対する認識とそれに関する対者の評価、ならびに②話者自身の場面間における使用変種の異なりの認識を問う項目を中心に尋ねた。質問内容を整理したものを次掲(1)に示す(実際に調査で用いた質問票については第3章表3-1参照)。

(1) 質問内容のまとめ

①【X・Y・Zに対して】

- a) それぞれの場面で用いた自身のことばをどのように認識しているか
- b) ([他郷]での言語使用に関して) a)のことばを用いた動機やきっかけは何か
- c) ([他郷]での言語使用に関して) a)のことばは意識的使用によるものか否か

【各場面の対者に対して】

相手(X・Y・Z)のことばにどのような印象を受けたか。方言的要素あるいは非方言的要素をどの程度感じたか

②【X・Y・Zに対して】

それぞれの場面で用いたことばに違いはあると思うか

上記の質問内容に対して得られた回答を話者ごとにまとめたものが以下の表8-9である。なお①の内容についてはみやすさを考慮し、回答を場面ごとに分けて記載した。

表 8-9 切換えに対する話者自身の意識

質問番号			X		Y		Z	
			自己認識	対者評価	自己認識	対者評価	自己認識	対者評価
①	他郷	a)	標準語	方言的要素は一切ない	標準語	ほとんど標準語	関西弁ベースの標準語	やや訛っている
		b)	移住後に訛りを指摘された経験から、それによって場を乱したくないと思うようになったため。	-	方言を話しても(相手は)わからないだろうし、(方言使用を)指摘されて会話が中断するのが煩わしいため。	-	相手の標準語に合わせるため。相手につられて使うこともある。	-
		c)	特に意識せず使用できている。	-	意識せず自然に使用できる。	-	使用しようと思えば続けられる。	-
	同郷	a)	関西(和歌山)弁	標準語らしさは全くない	完全に方言	関西弁	関西弁	関西弁
②			かなり異なる	-	かなり異なる	-	異なる	-

表中の①a) によると、X・Y の 2 名は自身のことばについて、〔他郷〕では標準語、〔同郷〕では関西弁あるいは自身の出身地名を冠した方言名と内省した。また Z は〔他郷〕では関西弁がベースにあるとしつつも標準語であることを自覚しており、〔同郷〕では関西弁であるとした。この三者の内省に対し、各場面の対者も概ね一致した見解を示している（①a) 「対者評価」）。また、各場面で用いたことばに違いがあると思うかという②の問いに対しても、三者ともに「異なる」との内省が得られた。これらの結果は、場面によって使用することばの変種を変えている、すなわちこの場面ではこの変種、別の場面では別の変種というような「わきまえ」が実際の運用のみならず話者自身の意識の中にも備わっていることを意味している。

また、①c) の回答をみると、標準語スタイルへの切換えは三者揃って特に意識せずとも可能であると内省しており、切換えに労力を要していない様子が意識面からもうかがえる。加えて、b) の使用動機・きっかけについては「場を乱したくない」「(方言使用の指摘による) 会話の中断が面倒」「相手に合わせる」などが挙げられていることから、当該場面に即した然るべき変種を選択する必要がある、といった意識が三者の根底に共通して存在すると考えられる。つまり、その場その場に適したことばを使用したいというわきまえ的な動機と、標準語スタイルへのスイッチがさほど苦ではないという意識が噛み合い、〔他郷〕〔同郷〕間のことばの使用意識の異なり（②）に現れたものと思われる。

このように、場面場面に適した言語使用が求められるというわきまへの作用は、話者自身の意識面からもうかがえることが示された。X・Y・Z の切換えのメカニズムの基本は、わきまえによるところが大きいといえそうである。

なお、このようなわきまへの作動によって、2 節・3 節で確認したように各話者の場面間の切換えは比較的明瞭なものであることが明らかとなったが、すべての項目が一様に切換えられるという訳ではない。項目によっては切換えが行われやすいものとそうでないものがあり、アクセントや文法項目、語彙項目など、言語単位が小さいために注意を払いやすく意図的に操作可能なものは切換えに与りやすい。一方、発話の引用方法や談話の展開方法などの言語単位が大きい談話レベルの項目については、地域差の有無が明示的ではなく意図的な操作が難しいことから、切換えに与りにくいと考えられる。この点を図示すると、次頁図 8-4 のようになろう。

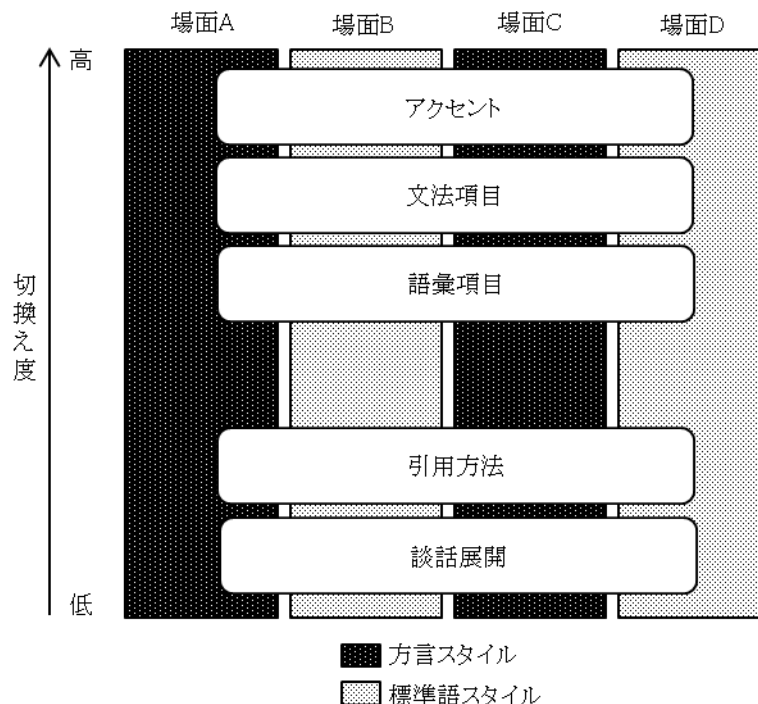


図 8-4 関西若年層のスタイル運用のメカニズム

話者は図中 A～D のように、場面（本研究の場合は〔同郷〕と〔他郷〕の二場面）によって方言形式を基調とする方言スタイルや標準語形式を基調とする標準語スタイルを様々に切換える。ただし切換えの程度は項目によって異なり、アクセント・文法項目・語彙項目は切換え度の比較的高いところに位置する一方、引用方法や談話展開の切換え度は低くなると考えられる。各話者の有する潜在的な標準語運用能力は、前者のような個別具体的な言語事象に対しては有効に働くのに対し、後者のように談話全体の構造に関わるような、話者の意識の届きにくい事象に対しては発揮されにくいと考えられる。

4.2. 個別的な枠組み（ミクロ視点でのメカニズム）

続いて本節では 4.1 節で述べた「わきまえ」を基本とする枠組みを前提としたうえで、話者それぞれが個別的に有していると思われるスタイル運用のメカニズムについて、特に切換えの程度がもっとも緩やかであった Z を中心に、より子細に検討することとしたい。

切換え度が比較的高い位置を占めた語彙・文法・アクセント項目に限ると、X・Y の場合は〔他郷〕と〔同郷〕で使用形式の種類が明瞭に分かれている。この点はすなわち、彼女らの使用スタイルの切換えには「対者が関西地域出身者であるか否か」という点がもっとも大きく作用するということを意味する。X・Y は「同郷の人には方言スタイル、他地域の人には標準語スタイルで話すものだ」というスタンスのもと、どのような場面に身を置くかが言語使用に影響する「わきまえ」の強いタイプといえる。

対する Z は、X・Y に比べると〔他郷〕〔同郷〕間の切換え方が緩やかであることがこれまでの各章の分析結果から明らかになっており、対者の属性が直ちに切換えに影響しているという訳ではない。Z の場合は、どのような話題で談話を進めていくかという、場面（対者）よりもさらに細かな要素が切換え発動のトリガーになっていると考えられる。具体例として、〔他郷〕での Z の談話におけるおおよその話題の内容と、そこで主に使用されていたスタイルを次掲表 8-9 に合わせて示す。

表 8-9 Z の〔他郷〕での話題内容と使用スタイルの推移

録音時間	話題内容	主な使用スタイル
0-21 分頃	春休み中に何をするかについて Z の実家周辺の環境や利便性について 最近実家が引っ越したこと 地元の友人家族と行った地元のテーマパークでの体験	方言スタイル
22-47 分頃	好意を抱いている人との最近の出来事 Oz との共通の友人の失恋話 失恋後の友人の情緒の不安定さについて	標準語スタイル
48-50 分頃	試験・レポート・単位について	方言スタイル
51-64 分（録音終了時）	Oz が最近行ったデートについて デートでの気の遣い方について 過去に浮気をされた経験について	標準語スタイル

上記表によると、録音開始後から 20 分過ぎあたりまでは話題が様々に移り変わりつつ進行しており、その内容は Z の実家に関する出来事や地元での体験談などが中心である。これらの話題が進行している間は、概ね方言スタイルによって実現されていた。対する 20 分過ぎ以降の談話は、細かな推移はみられるものの、一部を除きそのほとんどが Z の、あるいは他者の恋愛にまつわる話で占められている。これらの恋愛話における Z の使用スタイルは標準語スタイルが基調であり、そこから外れる話題（表中 48-50 分頃）に関しては方言スタイルが基調となっていた。

先に述べた X・Y のように〔同郷〕では方言スタイル、〔他郷〕では標準語スタイルで話すという「場面」による切換えの仕方は、「社会的に共通に認識されているものに従って使わねばならないもの（井出 2006:73）」（＝わきまえ）とされる。つまり社会的に決められた結果としての切換え方とみることができる。

一方の「話題」は、社会的な共通認識に従うべきものとはいにくい。たとえば「地元に関する話題には方言スタイル、恋愛話には標準語スタイルで話すものだ」といった認識は社会的に共有されているものではない。つまり話題によるスタイルの変動は、社会的認

識に縛られた受動的なものとされる「わきまえ」というよりも、話し手自身の能動的な選択 (Eckert 2018 ほか) の結果と捉えることが可能である。

ある話者の土着イデオロギーと音声バリエーションとの関係性について考察した高野 (2011:269-271) は、インタビュー調査時の「話題」の内容によって当該地域方言の特徴を有した音声バリエーションの使用率が変動する点に注目した。たとえば話者の生い立ちや家族構成等の比較的中立な話題に比べ、幼少時代の出来事や遊びといったよりカジュアルな場面、あるいは地域のグローバル化の進行に対する意見や自身の仕事への想いといった地域の固有性ないし自己の社会的アイデンティティを誇示・主張する場面では、方言的特徴がより顕著に現れたという。この点から、高野 (2011) は「当該音声変項が話者の土着イデオロギーを主張する言語的リソースの一つとして活用されていることは明らか」(p.271) と結論づけているが、同様のことは Z の言語運用にも該当する。

たとえば方言スタイルによる実現が確認された 20 分以前は「実家」や「地元の友人家族」「地元のテーマパーク」など、Z の出身地域に関連する話題が連続している。このように関西出身者としての Z 自身のアイデンティティが示される内容には、それに呼応するように方言的要素を基調としたスタイルが言語資源として選択されたものと考えられる。

また他方の標準語スタイルについても、話題内容に則った Z 自身の能動的選択によるものと思われる部分がある。先述のように標準語スタイルが中心となる 20 分過ぎ以降の話題はほぼ一貫して恋愛に関わる内容であり、割かれた時間数からみても、当該話題が Z にとって話すのに夢中になれるものであることが推察される。話の内容に集中する際はことばへの注意度 (attention paid to speech) が低くなり日常語 (Vernacular) の使用が頻出するとされることから (Labov 1966)、本来であればこの場合は他の話題と同様、方言スタイルが用いられても不思議ではない。それが標準語スタイルで実現されているのは、あえて異なるスタイルを用いることで「大学生活のなかで恋愛に一喜一憂するなどの充実した日々を送る自分」という新たなアイデンティティの表明を試みたためであると思われる。

一時的に別の話題に移行した期間 (48-50 分頃) が方言スタイルであった点や、その後恋愛話に戻ったときに再び標準語スタイルが用いられた点から考えると、Z にとって恋愛に関する話題はある種の憧れや理想を含んだ、いわば他の日常的な事象から一步脱したところに位置するものとして捉えられている可能性がある。Z は出身地域に根ざした土着のアイデンティティとはまた異なる自己の表出を、標準語スタイルという言語的特徴に反映させることによって実現させたものと推察される。

ただし、対する〔同郷〕での Z の談話は基本的に方言スタイルで一貫しており、恋愛に関する話題もまた例外ではない。仮に〔同郷〕でも恋愛話が標準語スタイルで実現されていたとすれば、Z の標準語スタイルの (話題の違いによる) 能動的使用がより確実性を帯びたものとなるが、方言スタイルであったということは X・Y と同様、Z にも〔同郷〕〔他郷〕という社会的場面 (対者) に影響を受けた「わきまえ」が切換えの根本を担うメカニズムとして少なからず作用していたことになる (4.1 節)。

以上をまとめると、Zのスタイル切換えは基本的な枠組みとしてはわきまえによるところが大きい、ミクロの視点で見るとスタイルそのものを言語資源の1つとして能動的に活用し、自己の中の様々なアイデンティティを明示化しようとした結果生じた現象と捉えることができる。この点を含め、X・Y・Zの切換えのメカニズムをタイプ別に表すと、以下図8-5のようになる。

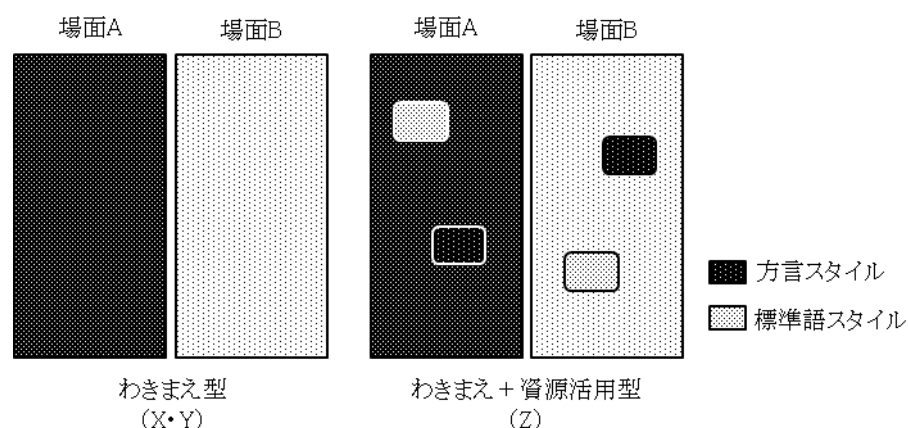


図 8-5 タイプ別の切換えのメカニズム

微視的にみると現代の関西若年層の切換えのメカニズムには、XとYのように社会的な場面に従って使用スタイルが決まる「わきまえ」が要因のタイプ（わきまえ型）と、Zのように概ね「わきまえ」に従いながらも部分的にはスタイルをアイデンティティ表出のための言語資源として能動的に活用するタイプ（わきまえ+資源活用型）があると考えられる。

いずれのタイプにしても、これまで場面を問わず方言を中心とした言語生活が営まれる「方言中心社会」のなかで過ごしてきた関西若年層が、基本的に知識としてののみ有してきたであろう潜在的な標準語の運用能力を、実践可能な実態としてダイナミックに発揮するさまが現れているといえる。

5. 本章のまとめ

本章では、第4～7章で明らかになった各分析項目の切換えの結果を総括し（2節）、それをもとにX・Y・Zの各項目における切換え度を算出した（3節）。その結果明らかになったことは以下の通りである。

- X・Y・Zのスタイル切換えは、基本的には「〔同郷〕での方言スタイル、〔他郷〕での標準語スタイルの使用」といった社会的場面に従った言語使用、すなわち「わきまえ」が根底で作動している（4.1節）。
- それぞれの切換え項目は、言語単位のレベルによって切換え方の程度に違いがある（同4.1節）。

- c) ミクロの視点からみると、「わきまえ」を主要な要因として切替えるタイプとは別に、自己のアイデンティティを示すために当該スタイルをより能動的に活用しようとする「資源活用」の手法をとるタイプが存在する。いずれのタイプにせよ、現代の関西若年層が有する知識としての標準語は、一部の言語レベルを除ききわめて実践的な形で運用される（4.2 節）。

第9章 まとめと今後の課題

最後に本章では、本研究で明らかにしてきたことを順にまとめたうえで、今後取り組むべき課題について述べる。

本研究では、首都圏に移住した関西出身若年層のカジュアル談話におけるスタイル運用の在り方を明らかにするため、下記Ⅰ～Ⅳの課題を提示した（第3章2節）。

- I) 一個人のなかに様々あるスタイルは、実際にどのような形で運用されているのか。
具体的には、どのような言語項目が場面間の切換えの対象となるのか。切換えに与りやすい、あるいは与りにくい項目はどのようなものか。
- II) 移住者は所属するコミュニティ内でどのようにスタイルを活用・選択しているか。
ことばの運用に移住者としての特徴は現れるか。それはどのようなものか。
- III-1) 方言と標準語の両スタイルを有していると考えられる関西若年層は、いずれのスタイルでも用いられうる環境に身を置いた際に、どのような言語運用の在り方を選択・実行するのか。特に、潜在的に保有されているスタイル（標準語スタイル）は実際にはどのように実現されるのか。
- III-2) 従来の多言語・多変種話者の運用モデルに対し、現代の関西若年層のスタイル運用のメカニズムはどのようにモデル化できるか。
- IV) 関西若年層は他地域出身の友人（母方言以外の話者）に対し、どのような言語運用を行うか。それは地元関西の友人に対する運用とどのように異なるか。

以上の課題を踏まえ本論文では、関西出身若年層 3 名を対象に、語彙・文法、音声（アクセント）ならびに談話の各レベルからスタイル運用の在り方を考察することを試みた。これまでに明らかにしてきた内容は以下の通りである。各内容に関連する課題番号を合わせて伏す。

(1) 語彙・文法レベルの運用（第4章：課題Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-1・Ⅳ）

(1-1) 話者全体の傾向：

〔他郷〕の方が当該場面での使用が期待されない形式（〔他郷〕での方言形、〔同郷〕での非方言形）の数が少ないことから、標準語話者（〔他郷〕の対者）をより意識した運用が行われていると考えられる。

(1-2) 移住者に特有の運用の特徴：

〔他郷〕では東京語形が対者と同等、あるいはそれ以上に積極的に使用される。対する〔同郷〕では伝統方言形が特に志向され、その使用は関西在住の対者以上に顕著な場合がある。

(1-3) X・Y は使用形式が場面ごとに固定された絶対的に近い切換えを行うタイプである。

Z は使用数全体からみると相対的・連続的な切換えを行っているが、談話の進行に伴い、当該場面に沿った形式に移行していくタイプである。

(2) 音声（アクセント）レベルの運用（第5章：課題Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-1・Ⅳ）

(2-1) 話者全体の傾向：

場面によって方言/標準語の各変種に固有のアクセント型（京阪式/東京式）の使用が多数を占め、切換えの程度は高い。

- (2-2) X・Y は形態的に方言文節であっても原則として〔他郷〕では東京式を、〔同郷〕では京阪式を用いる、切換えの明瞭なタイプである。また引用発話におけるアクセントの実現パターンから、語彙・文法項目同様、標準話者をより意識した切換えが認められる。
- (2-3) Z は両場面ともに京阪式/東京式を用いる、切換えの緩やかなタイプである。ただし、談話の進行に伴い当該場面に沿ったアクセント使用へと徐々に移行していくという特徴を持つ。〔同郷〕での東京式の使用など、首都圏への移住の影響を示唆する運用もみられる一方、引用発話におけるアクセントの実現パターンから、方言話者への意識がより強い従来型の切換えが認められる。
- (3) 談話レベルの運用①：発話の引用方法（第 6 章：課題 I・III-1・IV）
- (3-1) 話者全体の傾向：
 切換えの程度は高くなく、切換えが認められる場合も語彙・文法・アクセントなどの個別項目に比べると相対的・連続的である。
- (3-2) X は発話を引用するという行為自体が少ない。しかしその少なさは一貫しており、違いがみられないことから、場面間の切換えはなされていないと考えられる。
- (3-3) Y・Z は引用発話の全体数、あるいは一部の引用方法の使用において場面間で異なる運用を行っていることから、切換えがあることは否定できない。ただしその切換え方は緩やかであり、切換えのあった項目自体も限られていたことから、積極的かつ意図的な行動によるものとは認定しがたい。
- (4) 談話レベルの運用②：談話展開の方法（第 7 章：課題 I・II・III-1・IV）
- (4-1) 話者全体の傾向：
 場面に関わらず関西談話的展開にみられる特徴を維持しており、場面間の切換えの程度は低い。
- (4-2) X は談話標識を両場面ともに同程度の頻度で使用しており、そこに切換えの様子はみられない。ただし話の結末部分の示し方に、場面間の違いを示唆する点が認められる。
- (4-3) Y は各談話標識の具体形式のレベルにおいては使用した数や種類に場面による違いが認められるものの、標識そのものの出現頻度や用い方に明らかな差異はみられず、両場面ではほぼ一致した展開を行っている。
- (4-4) Z は一部の談話標識の使用を除き、両場面では概ね一致した展開方法をとっており、積極的な切換えは認められない。
- (5) スタイル運用のメカニズム（第 8 章：課題 I・III-2）
- (5-1) レベル別切換え度：
 語彙や文法、音声（アクセント）などの個別的なレベルについては切換え

度が非常に高い。これらは言語単位が小さいために話者が注意を払いやすく、意図的な操作が可能になることが理由として考えられる。それに対し、発話の引用方法や談話の展開方法などの談話レベルの項目については、言語単位が大きいために地域差の有無が個別項目ほど明示的ではない。したがって話者による意図的な操作が難しく、切換え度も低い。

(5-2) 全話者共通の運用メカニズム（マクロ視点）：

三者のスタイルの運用は基本的に「〔同郷〕では方言スタイルを用いるもの」「〔他郷〕では標準語スタイルを用いるもの」といった社会的場面に従った言語使用、すなわち「わきまえ」を根底に維持しつつ行われていると考えられる。

(5-3) 個別的な運用メカニズム（ミクロ視点）：

X・Yのように社会的な場面に従って使用スタイルが決まる「わきまえ」が特に強く働くことによってスタイル選択がなされるタイプ（わきまえ型）と、Zのように「わきまえ」に概ね従いながらも、部分的にはスタイルを自己のアイデンティティ表出のための言語資源として能動的に活用するタイプ（わきまえ＋資源活用型）がある。

多言語話者やバイリンガルのように、複数の言語ないし変種の運用能力を持つ話者を対象とした研究については蓄積が進む一方で、知識としてのみ保有されてきた変種の実際の運用可能性に関しては、これまで注目されることが少なかった。しかし人々のライフスタイルや社会生活の多様化が進む現在、知識としての変種、すなわち関西方言話者にとっての標準語にあたるものが、実際の言語実践の場で活用されうる可能性は今後ますます高まっていくと思われる。本研究はそうした人々の言語運用の在り方とそのメカニズムについて、部分的ではあるものの明らかにすることができたと考える。

最後に、本研究では取り組むことが叶わなかったいくつかの点を今後の課題として示し、本論文の結びとしたい。

(A) 調査対象・調査場面の再検討

本研究では首都圏に移住した話者を主要な考察対象としたが、関西にとどまる者についても今後検討していく必要がある。関西内部で生活を営む者と首都圏を拠点とする者とは、同じ属性の相手に対しても異なるスタイル運用を行う可能性があるためである。また同様の理由で、調査場面の検討も必要となる。たとえば〔同郷〕の対者が地元ではなく首都圏で知り合った者であれば、また異なる運用が行われよう。様々な対象や場面を検討し、関西若年層のスタイル運用の在り方を多角的かつ複合的に捉えていくことを今後の課題としたい。

(B) 談話収録調査の追加

(A) とも関連するが、本研究では若年層（20代）の女性に限定したうえで調査・分析を行った。今後は中年層以上の世代、あるいは男性の話者も視野に調査を進

め、本論文で主張した内容の進展を図りたい。

(C) インタビュー調査の検討

本論文ではスタイル運用のメカニズムとして言語資源の活用という視点を取り入れたが、資源活用型の話者（Z）に対し、本人のアイデンティティ形成に関わる情報を十分に収集できなかった。今後は量的調査に加えインタビュー調査等の充実に努め、話者のアイデンティティとスタイル運用との関連性を探っていくことが求められる。

参考文献一覧

- 朝日祥之（2008）『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』 ひつじ書房.
- 阿部貴人（2006）「スタイル切換えと切換え能力の発達—青森県弘前市方言話者の目的表現を例に一」『阪大日本語研究』 18, pp.23-48, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』 大修館書店.
- 井上文子（2009）「関西における方言と共通語」『言語』 38-7, pp.49-57, 大修館書店.
- 岩根裕子（1998）『児童の方言習得とその運用』 平成9年度大阪大学文学部卒業論文（未公開）.
- 宇佐美まゆみ（2015）「日本語の『スタイル』にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—」『社会言語科学』 18-1, pp.7-22, 社会言語科学会.
- 榎垣実（1936）「「へん」と「やん」—和歌山市方言の否定の助動詞—」『国語研究』 4-7, 国語文化研究所.
- 榎垣実（1954）「関西弁と東京語のせり合い」『言語生活』 33, pp.15-20, 筑摩書房.
- NHK 大阪弁プロジェクト編（1995）『大阪弁の世界』 経営書院.
- NHK 放送文化研究所編（2016）『日本語発音アクセント新辞典』 NHK 出版.
- 大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』 朝倉書店.
- 沖裕子（2006）『日本語談話論』 和泉書院.
- 沖裕子（2017）「談話論から見た松本方言の判断終助詞と通知終助詞」『方言の研究』 3, pp.217-238, ひつじ書房.
- 荻野綱男（1995）「大阪方言話者の移住による言語変容」徳川宗賢・真田信治編『関西方言の社会言語学』 pp.178-200, 世界思想社.
- カーター, バーバラ・白坂千里・韓娥凜（2013）「高知県四万十市西土佐におけるスタイル切換え—フォリナー・トークの観点から—」『阪大社会言語学研究ノート』 11, pp.42-56, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 加藤和夫（1999）「テレビから流れた方言を聞いてどう思うか」佐藤和之・米田正人編『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ—』 pp.130-134, 大修館書店.
- 加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現—引用標識に着目して—』 くろしお出版.
- 神鳥武彦（1989）「新居住地方言の受容」『国語国文』 58-11, pp.36-64, 京都大学国文学会.
- 神鳥武彦（1992）「新興住宅地と方言—移住地方言との接触とその受容—」『日本語学』 11-3, pp.88-99, 明治書院.
- 神鳥武彦・高永茂（1988）「方言に対する好悪の意識—『広島方言』に対する場合—」『国文学攷』 120, pp.1-18, 広島大学国語国文学会.
- 上林葵（2019a）「発話の引用方法に関する対照研究—関西・首都圏若年層を例に一」『阪大

- 社会言語学研究ノート』16, pp.55-69, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 上林葵 (2019b) 「関西方言における終助詞的断定辞『ジャ』の機能—マイナス感情・評価の提示—」『日本語の研究』15-2, pp.1-17, 日本語学会.
- 岸江信介 (2004) 「大阪弁の中の多様性—大阪弁の地域差と世代差をめぐって—」『日本語学』23-11, pp.28-40, 明治書院.
- 岸江信介・ロング, ダニエル (1993) 「沖縄から大阪への移住者の言語使用意識」『日本語研究センター報告』2, pp.71-84, 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター.
- 金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子 (2014) 『ドラマと方言の新しい関係—「カーネーション」から「八重の桜」、そして「あまちゃん」へ—』笠間書院.
- 金田一春彦監修・秋永一枝編 (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』三省堂.
- 久木田恵 (1990) 「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162, pp.1-11, 国語学会.
- 久木田恵 (2005) 「談話類型から見た関西方言」陣内正敬・友定賢治編『関西方言の広がり—とコミュニケーションの行方』pp.43-51, 和泉書院.
- 久木田恵 (2010) 「談話展開の地域差」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見—知られざる地域差を知る』pp.137-160, ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2004) 『ブラジル日系社会言語調査報告』大阪大学大学院文学研究科紀要 モノグラフ編 第44巻.
- 琴鍾愛 (2003) 「仙台市方言における談話展開の方法—説明的場面で使用される談話標識から見る—」『文芸研究』155, pp.1-13, 日本文芸研究.
- 琴鍾愛 (2004) 「仙台市方言における談話標識の出現傾向」『国語学研究』43, pp.1-12, 東北大学大学院文学研究科.
- 琴鍾愛 (2005a) 「日本語方言における談話標識の出現傾向—東京方言、大阪方言、仙台方言の比較—」『日本語の研究』1-2, 日本語学会.
- 琴鍾愛 (2005b) 「大阪方言における談話標識の出現傾向」『文化』68-3・4, pp.21-36, 東北大学文学会.
- 琴鍾愛 (2018) 「若年層における談話展開の方法の地域差」小林隆編『コミュニケーションの方言学』pp.229-247, ひつじ書房.
- 言語編集部編 (1995) 『言語』別冊 24-12, 大修館書店.
- 国立国語研究所 (1990) 『場面と場面意識』国立国語研究所報告 102, 三省堂.
- 国立国語研究所 (1991) 『方言文法全国地図』第2集, 財務省印刷局.
- 国立国語研究所 (1995) 『テレビ放送の語彙調査 I —方法・標本一覧・分析—』国立国語研究所報告 112, 秀英出版.
- 国立国語研究所 (2002) 『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第13巻 大阪・兵庫』国立国語研究所資料集 13-13, 国書刊行会.
- 齋藤孝滋 (1994) 「コミュニケーションにおける自己無標化ストラテジー研究のために—地方出身者が首都圏大学へ進学した場合を例として—」『国文学 解釈と鑑賞』59-1,

- pp.99-104, 至文堂.
- 酒井雅史 (2017)「兵庫県神戸市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (3) 活用体系 (2)』pp. 97-104.
- 佐藤和之 (1995)「方言主流社会—地域構成員の多様化とその言語意識」『言語』別冊 24-12, pp.20-33, 大修館書店.
- 佐藤和之 (1996)『地域語の生態シリーズ 東北篇 方言主流社会—共生としての方言と標準語—』おうふう.
- 佐藤和之 (1997)「共生する方言と共通語—地域社会が求めることばの使い分け行動—」『国文学 解釈と教材の研究』42-7, 學燈社.
- 佐藤和之・米田正人編『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ—』大修館書店.
- 真田信治 (1987)「ことばの変化のダイナミズム—関西圏における neo-dialect について—」『言語生活』429, pp.26-32, 筑摩書房.
- 真田信治 (1993)「現代日本語論への新しい視点 方言」『国文学 解釈と教材の研究』38-12, pp.33-37, 學燈社.
- 真田信治 (1996)『地域語の生態シリーズ 関西篇 地域語のダイナミズム』おうふう.
- 真田信治監修 (2018)『関西弁事典』ひつじ書房.
- 渋谷勝己 (2002)「プロジェクトの概要」『阪大社会言語学研究ノート』4, pp.1-10, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 渋谷勝己 (2008a)「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『言語』37-1, pp.18-25, 大修館書店.
- 渋谷勝己 (2008b)「言語変化のなかに生きる人々」金水敏・乾善彦・渋谷勝己『シリーズ 日本語史 4 日本語史のインターフェース』pp.177-203, 岩波書店.
- 渋谷勝己 (2013)「多言語・多変種能力のモデル化試論」片岡邦好・池田佳子編『コミュニケーション能力の諸相 変移・共創・身体化』pp.29-51, ひつじ書房.
- 渋谷勝己 (2015)「書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム—山東京伝を例として—」『社会言語科学』18-1, pp.23-39, 社会言語科学会.
- 寿岳章子 (1997)「標準語の問題」『岩波講座 日本語 3 国語国字問題』pp.167-198, 岩波書店.
- 陣内正敬 (1996)『地域語の生態シリーズ 九州篇 地方中核都市方言の行方』おうふう.
- 陣内正敬 (1999)「次のような場面でああなたが使うことばは？」佐藤和之・米田正人編『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ—』pp.135-141, 大修館書店.
- 高木千恵 (2006)「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」『阪大日本語研究』別冊 2, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 高木千恵 (2008)「関西若年層にみる東京語の使用」『言語』37-1, pp.46-51, 大修館書店.
- 高野照司 (2011)「バリエーション研究の新たな展開」『日本語学』30-14, pp.256-275, 明治書院.

- 田中ゆかり (2005) 「東京首都圏における関西方言の受容パターン—「間接接触」によるアクセサリ的受容—」 陣内正敬・友定賢治編『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』 pp.159-178, 和泉書院.
- 田中ゆかり (2011a) 「言語意識による地域の類型化と分類の試み」『語文』 140, pp.1-16, 日本大学国文学会.
- 田中ゆかり (2011b) 『方言コスプレの時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』 岩波書店.
- 田中ゆかり・前田忠彦 (2012) 「話者分類に基づく地域類型化の試み—全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討—」『国立国語研究所論集』 3, pp.114-142, 国立国語研究所.
- 田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫 (2016) 「1 万人調査からみた最新の方言・共通語意識—「2015 年全国方言意識 Web 調査」の報告—」『国立国語研究所論集』 11, pp.114-145, 国立国語研究所.
- 田原広史 (2006) 「近畿における方言と共通語の使い分け意識の特徴—方言中心社会の提唱—」『日本海総合研究プロジェクト研究報告 4 日本のフィールド言語学—新たな学の創造にむけた富山からの提言—』 pp.174-188, 桂書房.
- 辻加代子 (2003) 「京都市方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』5, pp.2-27, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 友定賢治・陣内正敬 (2004) 「関西方言・関西的コミュニケーションの広がりが意味するもの—全国六都市調査から—」『社会言語科学』 7-1, pp.84-91, 社会言語科学会.
- 鳥谷善史 (2015) 「関西若年層の新しい否定形式「～ヤン」をめぐって」『国立国語研究所論集』 9, pp.159-176, 国立国語研究所.
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』 勉誠出版.
- 西村拓 (1990) 「移住と言語変容—十津川村からの移住者を対象として—」『地域言語』 2, pp.37-55, 天理・地域言語研究会.
- ハインリッヒ, パトリック (2016) 「液化化する社会におけることばとアイデンティティ—イギリス、ドイツ、日本の比較—」『ことばと社会』 18, pp.86-104, 三元社.
- ハインリッヒ, パトリック・石部尚登 (2016) 「第三の波の社会言語学におけることばとアイデンティティ」『ことばと社会』 18, pp.4-10, 三元社.
- 濱田隆文 (2011) 「移住と言語変容—福井県若狭地方出身者を例にして—」『待兼山論叢 日本学篇』 45, pp.47-64, 大阪大学文学会.
- 日高水穂 (2014) 「近畿地方の方言形成のダイナミズム—寄せては返す「波」の伝播—」『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』 pp.245-264, ひつじ書房.
- 備前徹 (1996) 「在日外国人と方言」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』 pp.343-361, 明治書院.
- 不二門千里 (1988) 「関西出身者の東京移住後の言語意識」『国文鶴見』 23, pp.45-58, 鶴見女子大学日本文学会.

- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』 和泉書店.
- 船木礼子 (2009) 「カジュアルスタイルにおける方言切換え—移住先方言の受容と切換えの要因—」 『第 88 回日本方言研究会研究発表会発表原稿集』 pp.27-34, 日本方言研究会.
- 船木礼子 (2011) 「カジュアルスタイルにおける方言切換え—形式の受容と切換えの要因—」 『神女大國文』 22, pp.1-20, 神戸女子大学国文学会.
- 船木礼子 (2016) 「方言談話におけるあいづちの出現傾向」 『方言の研究』 2, pp.165-191.
- 細谷書子 (2004) 「大阪市方言話者のスタイル切換え」 『阪大社会言語学研究ノート』 6, pp.42-63, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 前田直子 (2004) 「文末表現『みたいな。』の機能」 『言語』 33-4, pp.54-57, 大修館書店.
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』 くろしお出版.
- 村内英一 (1962) 「和歌山県方言」 榎垣実編 『近畿方言の総合的研究』 pp.365-420, 三省堂.
- 村中淑子 (2014) 「大阪・奈良の方言における否定辞について—世代差を中心に—」 『人間文化研究』 1, pp.3-27, 桃山学院大学総合研究所.
- メイナード, 泉子, K. (2005) 「会話導入文—話す声が聞こえる類似引用の表現性—」 鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ編 『言語教育の新展開 牧野成一教授古希記念論集』 pp.61-76, ひつじ書房.
- 山村時弘 (1990) 「天理における言語意識—全国からの移住者を対象として—」 『地域言語』 2, pp.13-35, 天理・地域言語研究会.
- 山本俊治 (1962) 「大阪府方言」 榎垣実編 『近畿方言の総合的研究』 pp.421-494, 三省堂.
- ロング, ダニエル (1989) 「京阪方言に対する他地方出身者の意識と方言使用」 『待兼山論叢 日本学篇』 23, pp.41-59, 大阪大学文学会.
- ロング, ダニエル (1990a) 「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」 『国語学』 162 pp.12-25, 国語学会.
- ロング, ダニエル (1990b) 「方言接触による方言意識と行動—移住者を対象にしたアンケート調査の自由回答から—」 『地域言語』 2, pp.3-12, 天理・地域言語研究会.
- ロング, ダニエル (1991) 「方言状況の一考察—日本とアメリカの違いについて—」 『国語展望』 87, pp.40-44, 尚学図書.
- Auer, P., B. Barden and B. Grosskopf. (1998) Subjective and objective parameters determining “salience” in long-term dialect accommodation. *Journal of Sociolinguistics*, 2-2, pp.163-187.
- Bell, Allan. (1984) Language style as audience design. *Language in Society*, 13-2, pp.145-204.
- Bell, Allan. (2001) Back in style: reworking audience design. In P. Eckert and J. Rickford (eds.) *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.139-169.
- Brown, P. and Stephen C. Levinson. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cook, Vivian. (2002) Background to the L2 user. In Cook, V. (ed.) *Portraits of the L2 User*. pp.1-31.

- Clevedon: Multilingual Matters.
- Coupland, Nikolas. (2007) *Style: Language Variation and Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cummins, Jim. (1996) *Negotiating Identities: Education and Empowerment in a Diverse Society*. Los Angeles: California Association for Bilingual Education.
- Eckert, Penelope. (2000) *Linguistic Variation as Social Practice*. Oxford: Blackwell.
- Eckert, Penelope. (2012) Three Waves of Variation Study: The Emergence of Meaning in the Study of Sociolinguistic Variation. *Annual Review of Anthropology* 41, pp.87-100.
- Eckert, Penelope. (2018) *Meaning and Linguistic Variation: The Third Wave in Sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Giles, Howard. (1973) Accent mobility: a model and some data. *Anthropological Linguistics* 15, pp.87-105.
- Labov, William. (1966) *The Social Stratification of English in New York City*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics.
- Labov, William. (1972) *Sociolinguistics Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Long, Daniel. (1999) Geographical Perceptions of Japanese Dialect Regions. In Preston, D. (ed.) *Handbook of Perceptual Dialectology Vol. 1*, pp.177-198. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Rampton, Ben. (1995) *Crossing: Language and Ethnicity among Adolescents*. London: Longman.
- Rickford, J. R. and P. Eckert. (2001) Introduction. In Eckert, P. and J. R. Rickford (eds.) *Style and Sociolinguistic Variation*, pp.1-18. Cambridge: Cambridge University Press.